
Tomorrow is another day ~ Another K-ON ! ~

三月三日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tomorrow is another day } Another
erk - ON }

【Nコード】

N6298X

【作者名】

三月三日

【あらすじ】

漫画“けいおん！”及びアニメ“けいおん！！”の世界を扱った二次創作です。今年度から共学となった桜高を舞台に、新たに軽音部部員となったオリ主を中心に、物語は進みます。原作にオリジナルのストーリーを挟みつつ、描いていきますので、以上の点を理解した上で、暖かい目で読んでもらえれば嬉しいです。

#1 それぞれとの邂逅

出逢い……。

それは幾重の偶然と、数多の選択……その結果が織り成す奇跡の産物。

幾重の偶然は必然に変わり、数多の選択は応報に繋がる。

そしてそこから生まれる奇跡を、人は運命と呼ぶのだろう。

何故ならそこには、意思も、希望も、努力さえも、介在するとはかぎらないのだから。

そして最も残酷なのは、その傍らには常に別れが携えられているということだ。

*

私立桜が丘女子高等学校。

某県に所在するこの学校は、今年度から改称された。

私立桜が丘高等学校。

それが新しい校名だ。

つまりは昨年度までは女子高だったこの学校も、今年度からは男子生徒を受け入れ、共学化されたのだ。

そして俺は、その第一期生となる。

もっとも全校生徒としては、八十七期生だが……。

俺がこの学校を受験した理由は、ある意味、邪かもしれない。

中学時代、部活のバスケに熱中するあまり、勉強が疎かとなっていたこと。

そのバスケでも、結果を残すことはできず、推薦を取れなかったこと。

今年度から共学となるこの桜高が、家から近いということ。

しかも共学化の理由が少子化対策ということで、受け入れる男子生徒の定員もかなりの人数を期待できると思ったこと。

以上の理由から、俺は桜高を受験した。

しかしその後、俺にとっての誤算が現れる。

それは合格発表の日。

今年度新入生……二百名。

内、女子生徒……百九十七名。

つまり、男子生徒は僅か三名しかいないことになる。

しかも今年度から共学ということは、上級生に男子生徒はいないわけ、よって全校生徒約六百名の中で、男子生徒が三名しかいないということになるのだ。

そして今日、入学式も終わり、2週間程過ぎた頃、俺は五人の女子生徒たちに囲まれていた。

「何で今頃？」

長い黒髪と切れ長の目が特徴的な女子生徒が、そう訊ねる。

リボンの色が青いところを見ると、三年生らしい。

「昨日まで入院してまして、今日が初登校なんです」

「ピアノ、上手ね」

ウェーブのかかった髪、表情、仕草、どれをとっても上品そうな女子生徒が続く。

どうやら彼女も三年生らしい。

「子供の頃に少しだけ……」

「習ってたのか!？」

今度は見るからに元気そうな、ボーイッシュな女子生徒が聞いてきた。

やっぱり三年生だ。

「いえ……。習っていたのは姉さんで、俺はそれを見様見真似で……」

「名前は何て言うの？」

ところどころ跳ねた髪が特徴的な女子生徒。

彼女も三年生だ。

「乾孝臣です」

「クラブにはもう入ってるのかな？」

最後に聞いてきたのは、五人の中でも一番背の低い、ツインテールの女子生徒。

リボンの色が赤いことから、彼女だけ二年生らしい。

「いえ……。何せ今日が初登校ですから……」

俺のその言葉に、五人の目が輝いた……。ように見えた。

「入りたいクラブとかあるの？」

そう聞いてきたのは、長い黒髪の……。秋山零先輩だ。

何だか必死に見える。

「中学の時はバスケやってたので、バスケ部に入りたかったんです

けどね……」

「けど男子バスケットなんてあったかしら？」

そう疑問を口にしたのは、物腰も上品そうな……琴吹紬先輩だ。

太い眉は、まるで某丁漬物の沢庵のようだ。

「男子バスケットも何も、男子自体、俺を入れて三人ですから……」

「そりゃー、部活どころかチームも組めないな……」

氣遣うように、そう言ったのは……田井中律先輩。

カチューシャを使ってオデコ丸出しなのは、ポリシーなのだろうか？

「まあ……、仕方ないですね……」

「ねえ！ ねえ！ 名前が“孝臣”だから、渾名は“オミくん”でいいよね？」

「は……！？」

髪が跳ねている……平沢唯先輩。

全く脈絡も突拍子もない話題を突然振ってくる。

もしかして、かなりの天然さんなのかもしれない。

「もう！ 大事な話をしてるんですから、唯先輩は口を挟まないで

ください」

先輩に対して容赦ないツツコミを入れるのは、ツインテールの中野梓先輩。

「ええ〜！？ あずにゃん、酷いよぉ〜」

そう言って平沢先輩は、隣にいる中野先輩に抱きつくこうとする。

どうやらこのやりとりが、この二人の間では“お約束”なのかもしれない。

（っていうか、“あずにゃん”っていう渾名はどうなの……？ まあ、“オミくん”も、かなり酷いけど……）

「ねえねえ！ オミくんも“オミくん”がいいよね？」

平沢先輩のその自信は、何を根拠にしているのだろうか？

「いや……、孝臣なら普通は“タカくん”とか“タツくん”になるんじゃないあ……？」

だからそう否定してみる。

「“タツくん”って……」

中野先輩は、かなり引いてしまったようだ。

「でも“あずにゃん”よりは、まだマシかと……」

だから、細やかな反抗を試みた。

「ムッ！」

思いつきり睥睨されてしまった……。

「すみません……」

結局、素直に謝る俺。

「それでね、もし他に入りたいクラブがないなら、軽音部に入部してほしいの」

「軽音部……ですか？」

琴吹先輩にそう言われ、改めて室内を見渡した。

“準備室”という名札が掛けられたこの部屋は、一応は音楽準備室ということだったが、準備室と呼ぶにはかなりの広さがある。

そもそも準備室なのに、倉庫まで備わっていることから、その広さは窺い知れる。

しかも机を四つくつつけて作られた簡易のテーブルの上には、高校では先ずお目にかかれないであろう、素人目にも高価なティーセットと、かなり美味しそうなスイーツの数々が、所狭しと並んでいた。

そして室内を満たす紅茶の香りは、微かに鼻腔をくすぐり、心を落ち着かせる。

この光景を見て、誰がここを軽音部の部室だと思うだろうか……？

「っていうか……、軽音部だったんですね……」

確かにそう言われてみれば、ドラムセットやらキーボードが置かれている。

そして壁に立て掛けられたケースの中には、きっとギターやベースが入っているのだろう。

にもかかわらず、今の今までここを軽音部の部室だと気づかなかつたのは、それらの楽器よりティーセットのほうが存在感を醸し出していたから……なのだろう。

「そうなんだよ！ だから、ピアノが弾けるなら是非、入部してほしいんだ！」

こちらの真意も気にせず、秋山先輩の語気が強まる。

（っていうか、本当に必死なんだな……）

「実は今年は新入部員が一人も入ってこなくて……」

軽音部の実情を告げる琴吹先輩の表情が、苦笑い気味になる。

（だからそんなに必死だったのか……）

「キーボードが二人になれば、アレンジも演奏も幅が広がるしな！」
どうやらピアノが弾けるというだけで、田井中先輩の期待値がかな

り上がっているようだ。

（そんなにハードルを上げないでくれ……）

「なんと！ 今ならお菓子食べ放題！ お茶もお代わり自由だよ！
」

平沢先輩が自信満々にドヤ顔を浮かべる。

（お菓子……？ お茶……？）

「もう唯先輩は喋らなくていいです」

相変わらず中野先輩は、平沢先輩には厳しい……。

（ホント、容赦ないな……）

「あずにゃんの意地悪」

そう言つて、また平沢先輩が中野先輩に抱きついた。

「まあ、あつちは放つという……」

「放つとくんですか……？」

（やっぱり“お約束”なのか……！？）

「どうかな？ 軽音部！」

田井中先輩の声に、秋山先輩も、琴吹先輩も、平沢先輩も、そして

中野先輩も、こっちを見つめてきた。

その様相はまさに凝視……。

「はぁ……」

しかし俺は気の利いたセリフどころか、気の抜けた嘆息しか口にできなかった。

しばしの沈黙が、部室の中を……、いや、六人の間を、支配している。

その静寂を打ち破ったのは、琴吹先輩だった。

「そうだ！ とりあえず、お茶はいかがかしら？」

「やったー！ お茶だ〜！」

「もう！ 唯先輩にじゃなくて、乾くんですよ！」

「てへへ……、分かってるよぉ〜。分かってはいるんだけど……」

そのまま平沢先輩の視線が、豪勢に彩られたテーブルへと向けられた。

「クッキーとマドレーヌもあるのよ」

琴吹先輩は、そう畳みかける……のだが。

「いえ、遠慮しておきます。ご馳走になったら、断りにくくなりそ

うなんで……」

その一言で、再び沈黙の空気が流れた。

だがその静寂を、今度は平沢先輩が打ち破った。

「じゃあさ、オミくんに私たちの演奏を聞いてもらおうよ」

平沢先輩はそう言うと、右手を思いきり上に挙げた。

「そうだな！ 私たちの演奏を聞いてもらおう！」

秋山先輩が賛同する。

「そうね、唯ちゃん、グッド・アイデアよ」

琴吹先輩も賛同する。

「おおーし！ じゃあ、みんなで演奏するぞー！！」

田井中先輩も賛同する。

「唯先輩も、たまには良いことを言いますね」

そしてどうやら、中野先輩も賛同したようだった。

「えへへ。あずにゃん、もっと褒めて」

「褒められてないぞー」

田井中先輩のツツコミに、再度、五人は賑やかになった。

（けど……、苦手だな……、こういつの……）

女の子が華やいでいると、どうにも居心地の悪さを感じてしまう。

「あの……」

だから俺は、つい強引に……、

「すみません……。今日は失礼します！」

そう言つて頭を下げると、逃げるように部室を飛び出した。

*

きっかけは他愛もないことだった。

入学式の前夜、突然腹痛が俺を襲った。

合格発表の日に知った驚愕の事実。

新生、女子百九十七名に対し、男子三名。

元々、中学の時も、女子と接することは苦手だった。

奥手……と言えは聞こえはいいが（そうでもないか？）実際は緊張してしまふという、言わば只の引っ込み思案なだけだ。

男子に対してはそうでもないが、女子に対してはその人見知りが出

てしまうということは、もしかしたら逆に自意識過剰なのかもしれない。

まあ、そんな性格なものだから、中学時代の悪友たちからは、やれ『選り取り見取りだな』とか、やれ『ハーレムだな』とか、とにかく冷やかされたが、当の本人は憂鬱以外の何物でもなかった。

そのせいの腹痛……なのだと思っていた。

緊張と不安から来るストレスが原因の、心因性の腹痛だと……。

だから『どうすることもできない』と諦め、我慢することにした。

痛みと格闘すること、数時間。

何とか寝入ることができたのは、既に明け方近くだった。

しかし再び激しい腹痛が俺を襲って来た。

しかも今度のは今までとは違っくらい強烈な痛み。

『もしかしたら、俺はこのまま……』

頭の中を巡る楽しかった想い出の数々。

後になって思い返せば、あれが“走馬灯”なのかも思ったが、この時はとにかく悶えることしかできず、朝方異変を察した母さんが呼んだ救急車で、俺は病院に搬送された。

病名は“急性虫垂炎”……俗に言う“盲腸”だ。

ただ俺の場合、この時には既に腹膜炎を併発しており、そのまま入院を余儀なくされた。

要は、ストレスは一切関係なかったわけだ。

そんなわけで、新入生方々が入学式に出て、新しいクラスで、和気藹々、悲喜交々な高校生活をスタートさせている間、俺は病院のベッドから窓越しに、散りゆく桜の花びらが舞う景色を眺めていたのだった……。

もちろん見舞いに来た中学時代の悪友たちからは、一頻りバカにされたのは言うまでもない。

二週間程が過ぎた頃、無事に退院し、遅ればせながら高校生活をスタートさせたのが、つまりは今日だったというわけだ。

ところが俺の他にいるはずの二人の男子は、それぞれ一組と三組。

俺は一年五組だから、見事なまでにバラバラにされたことになる。

しかもクラスメイトとなった三十九名の生徒たちは、当然の如く皆女子。

二週間という時間は、女子が仲の良いグループを作り、親睦を深めるには十分な日数だった。

そんな中へ今更、初対面で飛び込んでいくなど、俺には無謀で無茶で無鉄砲なことこの上なく、よって今日一日、一人で過ごす羽目となってしまった。

放課後、他の生徒たちは皆、クラブ活動に勤しむ中、特にやりたいクラブのない俺は、早々に帰宅するはずだったのだが、何故か足を向けた先は、人気のない校舎だった。

“第三音楽室”という名札が掛けられた部屋には、ひっそりと、まるで人目を避けるかのように、一台のグランドピアノが鎮座していた。

何でだろう？

ただ吸い寄せられるように、引きつけられた。

蓋を開け、鍵盤に触れてみる。

ちゃんと音は鳴った。

椅子に座り、適当に弾いてみた。

調律も問題はないみたいだった。

『おまえもか……』

そう呟いた理由は、自分でも解らない。

気づいたら俺は、そのピアノを弾いていた。

“気球に乗ってどこまでも”

想い出の曲だ。

ピアノの音だけが響く世界へと導かれる。

鍵盤を見ているはずなのに、視界が白に染められていく。

まるでそれは、俺とピアノ……それ以外を全て排除したかのような世界だった。

夢中で、だけど無心で弾いた。

『もう二度と、ピアノは弾かない』

四年前に誓ったその言葉なんて、跡形もなく忘れ去るくらいに……。

我に返ったのは、そんな世界を打ち破る規則正しい音だった。

その音が拍手だと気づいたのは、一瞬間が空いてからのこと。

音楽室の入り口に立っていたのは、いかにも“お嬢様”然とした女子生徒。

胸の前で、リズムカルに両手を叩く。

拍手をする姿すら、どこか上品な趣があった。

その後、半ば強引に腕を引かれ、音楽準備室へと連れて来られた。

中学時代、三年間バスケットに熱中し、引退した後ですら一日もトレーニングを欠かさなかった俺が、その腕を振り切ることも、立ち止まり抵抗することも敵わないほどの腕力で……。

そして先程の勧誘へと繋がることになるのだ。

*

翌朝……。

リビングに併設されている部屋の、片隅に置かれているアップライ
トピアノが目映る。

あれから四年……。

『もう二度と、ピアノは弾かない』

そう誓って四年……。

だけど俺は昨日、その誓いを破り、ピアノを弾いた。

ふと昨日のことを思い出しながら、そのピアノの蓋に触れてみる。

塵や埃などが全く落ちていないのは、今も尚、母さんが小ママに手
入れをしているからだろう。

蓋を開け、椅子に座り、鍵盤を押してみる。

想像どおりの音が響いた。

どうして、こんな感覚に陥ったのだろうか……？

気づくとまた、俺はピアノを弾いていた。

曲目は勿論、昨日と同じ“気球に乗ってどこまでも”だ。

ピアノの音色が、再び俺を音符の世界へと誘う。

俺はそれに抗うことなく、意識を委ねる。

真っ白い中、ただピアノの音色だけが響き渡る世界。

「あらゝ、タツくん！ ピアノを弾くなんて、珍しいのねゝ」

だが、そんな母さんの暢気な声に、急速に現実へと戻された。

「ただの気まぐれだよ……」

素っ気なく、そう返したのは、ピアノを弾いている姿を見られなくなかったからかもしれない。

「そうなんだゝ、残念……。けどタツくん、もっとピアノ弾けばいいのに。トーコちゃんがいた頃は、よく一緒に弾いてたじゃない」

「昔の話だよ。それにいいかげん“タツくん”って呼ぶなよ」

「はいはい」

“残念”と言ったわりには少しも残念そうな口調ではなかったが、それでも少しは気にかけていたのかもしれない。

「それにしても、ちゃんと調律してあるんだな」

「うん！ いつトーコちゃんが帰ってきてもいいようにね」

「『いつ帰ってきてても』って……」

「何年経っても寂しさには慣れないものね……」

「もう四年だ……」

そう言うと、その次に続く言葉を拒むように、俺は食卓に着いた。

*

桜高の校舎は、一階に一年生の教室が一組から五組まで並んでおり、一年五組の教室の隣に二年一組の教室がある。

二年生の教室は、二組以降は二階にあるのに、なぜか一組だけが一階にあるという、何とも不思議な構造をしていた。

だから一年五組の俺が、休憩時間に廊下でばったりと、二年一組の中野先輩に会ったとしても、それはさほど珍しい現象ではないだろう。

「孝臣くん！」

そう呼ばれて、反射的に声のしたほうを振り向くと、そこに中野先輩がいた。

もともと、昨日が初登校で、しかもクラスメイトが全て女子という状況の俺には、“孝臣くん”などと下の名前で呼んでくる女子生徒に心当たりはなく、故に声の主にも大方の予想はついてはいたのだ

が……。

中野先輩は、昨日、他の軽音部の先輩たちと一緒にいる時も、一際背が低いと思っただが、たぶん俺と並んだら二十センチは違うかもしれない。

「はい。中野先輩ですよ。何か……？」

用件は解っているくせに、あえてそう聞いてみる。

「中野先輩だなんて他人行儀だろ。 “梓先輩” でいいよ。私も先輩たちのことは、そう呼んでるし」

（他人行儀って……、他人じゃん……）

「はあ……。まあ、善処します……」

とりあえず、そう言ってお茶を濁した。

「ところで昨日のことなんだけど……」

昨日のこと……それは言わずもがな、軽音部への入部の件だ。

「はあ……」

「考えてくれたかな？」

「軽音部への入部……ですよ。」

またしても解っているくせに、そう聞いてしまった。

「うん！　どうかな？」

中野先輩は、相変わらず優しく微笑んでいる。

そんなに笑顔だと、正直断り辛い。

（もしかして、それも作戦か……！？）

「まだ考え中です……」

だからか、そう答えるだけで精一杯だった。

「そっかー。まあ、私も去年、入部したばかりの頃は悩んでたもん
な」

そう言うと、中野先輩は腕を前で組み、少し大袈裟に「うんうん」
と頷いてみせた。

「悩んでた……んですか？」

「うん。私ね、小四の頃からギターをやっていて、高校ではバンド
活動をバリバリやりたかったの。新歓ライブで先輩たちの演奏を聴
いて、すごい感動したから、理想どおりのバンド活動ができると
思って入部してみたら、ろくに練習もしないでお茶ばかり飲んでる
んだもん。最初はあの、まったりとした空気に馴染めなかったんだ
よね」

何だかとても感慨深げだ。

「つていうか、“最初は”なんですね……？　じゃあ、今は？」

「あっ！　今も勿論、全面的に認めているわけじゃないんだよ。ただね……」

「ただ……？」

「この一年、先輩たちと一緒に演奏してきて思ったの。どんなにお菓子ばかり食べていても、どんなにお茶ばかり飲んでいても、どんなにお喋りばかりしていても、それでも私は先輩たちと一緒に演奏をしている時が一番楽しいんだって……！」

そう言いきった中野先輩の顔は、それまでの笑顔の中でも、特に……嬉しそうだった。

「それが中野先輩が軽音部にいる理由……なんですね」

「うん。孝臣くんも、だから一緒に……」

「一緒に……？」

「うん。一緒に演奏を試してみれば……」

「もしかして『楽しい』って言うんですか？」

「だって、ピアノ好きなんですよ？」

（好き……？　ピアノが……？）

そんなこと考えたこともなかった。

「何で……？ 何で、そう思っんですか？」

「だってピアノが上手だったって……」

「中野先輩が聴いたわけではないでしょ……」

「けど、ムギ先輩がそう言ってたから……。ムギ先輩は子供の頃からピアノを習っていて、コンクールで入賞したこともある人なの。だから、それほどの人が『上手だった』って言うくらいだもん。きつと凄く上手なんだろうなって……」

「けど……」

「けど？」

「けど、もし仮に俺が琴吹先輩が認めてくれるくらいの腕前だったとして、だからといってそれで好きだとはかぎらないでしょ？ “好き”と“上手”は全く違いますよ。好きだからといって必ずしも上手になれるわけではないし、上手だからといって好きでそれをやっているとはかぎらない」

「それはそうかもしれないけど……」

「だから俺がピアノを好きだという根拠にはならない……と、俺は思います」

「それは……」

「それに先輩たちと一緒に演奏をすることが楽しいっていうのなら、

俺が入部するよりも、五人で演奏していくほうがいいんじゃないですか？」

だがその後の言葉が出てこないのか、中野先輩が唇を噛み、そのまま俺たちの間には沈黙が流れた。

しばしの静寂……。

「私もね……」

最初に口を開いたのは、中野先輩のほうだった。

「私もね、今までは今年いっぱい五人でもいいって思ってたの。

新入部員が入らなくて落ち込んでいた時、友達から言われたんだ。

『軽音部は五人が結束して見えて、外からは入り辛いんじゃないかって。それを聞いて、部外の人たちからそんなふうにも思ってもらえるような、強い絆を築けているんだって思えて、凄く嬉しかったの』

「だったら尚更……」

「けどね、不思議なんだけど、そんなふうと考えていたはずなのに、昨日ムギ先輩が孝臣くんを連れて来た時、やっぱり嬉しかったんだ……。私にも後輩ができるんだって思ったら、やっぱり嬉しくて……」

気持ちを確認するように、いや、むしろ気持ちを絞り出すように、中野先輩は言葉を紡いでいく。

だけど俺は、その言葉に返せるような言葉は持っていないくて、再び

二人の間を沈黙が流れた。

そしてそれを打ち破ったのは、次の授業開始を告げるチャイムの音だった。

「じゃあ、次の授業がありますんで……」

そう断り、背中を向けた。

その背中に中野先輩の声が届く。

「それでも私は、あの先輩たちと一緒に演奏をすることが好きだし、好きだから一年前より少しは上達してるって思ってる。孝臣くんは『好きだからといって上手になれるわけではない』って言ったけど、やっぱり好きじゃないと上手にはなれないよ！」

そんな叫びに、俺は呟くように言葉を返した。

「好き“だった”かもしれないよ……」

「えっ!?!」

しかしその後、中野先輩からの言葉は聞こえてはこなかった。

*

『タツくん、上手に弾けたね』

ぼんやりと浮かぶ懐かしい笑顔。

あれは……。

（姉さん……？）

その女性が、幼い男の子の頭を撫でている。

（それじゃあ……、あの子は俺か？）

子供の頃、姉さんは、俺がピアノを弾くのを、こうしていつも笑って見ていてくれた。

そして一度も間違えずに最後まで弾けると、ああして頭を撫でてくれた。

それが嬉しくて……。

また姉さんに頭を撫でてほしくて……。

そして、姉さんに褒めてもらいたくて……。

あの、姉さんの笑顔が見たくて……。

俺は一生懸命、ピアノを練習したっけ……。

“ 気球に乗ってどこまでも ”

姉さんが好きだと言ったから、俺も好きになった曲。

その曲を弾くと、特に喜んでくれた。

俺と、姉さんの、大切な、大切な、思い出の曲だ。

この光景は、もう二度と見ることはできないけど……。

どんなに望んでも……。

どんなに願っても……。

どんなに祈っても……。

もう二度と還ってはこないけど……。

でも……、だからこそ……、もう少しだけ……、この目に焼きつきたい。

もう少しだけ……。

後もう少しだけ……。

『乾！』

突然、名前を呼ばれ、と同時に、目の前の世界が徐々に白く霞んでいく。

『乾！』

（誰だよ？ 俺の名前を呼ぶ奴は！）

『乾！』

(うるせえよ！)

『乾孝臣！』

(頼むから静かにしてくれよ！)

姉さんと、幼き日の俺の、姿が消えていく……。

『乾孝臣！』

(うるせえよ！)

『乾！』

(うるせえって！)

「乾！」

「うるせえって言うてんだろぅが！！」

思わずその場に立ち上がると、その勢いで椅子が音を立てて倒れた。

しかしその後は、静寂が辺りを占めていく。

俺に視線を集めるクラスメイトたちの顔は皆、驚愕もしくは恐怖の表情だ。

(やつちまった……か？)

まさかの夢オチ……。

しかも俺の前には、いかにも怒りを噛み殺しているかの表情の教師が一人……。

古文担当の堀込先生だ。

今年は三年生の学年主任をしているらしいが、その情報は今の状況では全くの余談であり蛇足だ。

「ほう。俺の授業中に居眠りをした挙げ句、『うるせえ』とは、いい度胸だな。乾！」

「えつと……、これは……、その……、不可抗力といいますが……」

「不可抗力？ その言葉を今ここで使うのは適切ではないな。どうやら乾には国語の補習が必要なようだ」

「えつ！？」

「いや、補習の前に先ずはお説教だな。というわけで、昼休みに職員室へ来なさい」

「ええー！！」

「仮にも教師に対し暴言を吐いたんだ。それくらいの覚悟はしておくんだな」

「覚悟……！？」

（最悪だ……）

*

「失礼しました……」

有り難いお説教を聞き流し……拝聴し、頂垂れながら職員室を後にする。

「はあ」

（ホント、最悪だ……）

「とりあえず購買にでも行くか……」

弁当を持ってきていない俺は、昼食にはパンを買っしかない。
大幅なロスタイムがあったせいで、かなり出遅れた気がする。

「急がなきゃ……」

「オミくん!」

予想外の呼ばれ方に若干驚きつつ、その声のほうを振り向いてみる。

「琴吹先輩……」

見ると、そこにいたのは昨日、俺を軽音部の部室まで連行した張本人だった。

「琴吹先輩だなんて他人行儀だわ。そうだ! “ムギ先輩” ってど

つかしら？ 梓ちゃんも、そう呼んでくれてるし」

まるで頭の上で大きな電球が“ピカリ”と光ったかのように、上向きにした左手の平を右手で作った握り拳で“ポン”と叩きながら提案してきた。

「ええ〜と……。とりあえず善処します……」

（つて、またこのフレーズか……）

そもそも他人行儀も何も他人なわけだから、問題はない気もするが、それが“軽音部ルール”なのだろう。

「それで昨日の件なんだけど……」

「入部……の件ですね？」

「ええ！ どうかしら？」

その笑顔は、やはり屈託がない。

「今、考え中です……」

と、結局今度も断ることができず、保留を告げる。

どうやら俺は、自分で思っている以上に優柔不断らしい。

十五年生きてきて、新しい発見だ……。

（嬉しくねえけど……）

「きつとね、オミくんも楽しいと思うの」

胸の前で手を合わせ、琴吹先輩は本当に楽しそうな表情を浮かべる。

「はあ……」

しかしそんな時も、俺は気のない返事しかできず……。

「あつ、そういえば……」

気まずいので、とりあえず話題を変えてみる。

「琴吹先輩は、何で軽音部に入ったんですか？」

本当はそんな理由なんて興味はなかったが、上手く話題を入部の件からはぐらかして、そのままこの場を立ち去ろう……。

そんな思惑からだった。

「私が軽音部に入部した理由？」

「ええ。中野先輩に聞いたんですけど、琴吹先輩は子供の頃からピアノを習っていて、コンクールで賞を貰ったこともあるって」

「そうなの。だから今、キーボードを弾いてるのよ」

「けど、たとえば合唱部なら、ピアノ伴奏ができるなんて重宝がられるんじゃないですか？」

「オミくん、凄い！」

すると今度は胸の前で合わせていた手を“パチン”と叩き、感嘆の声を上げた。

（琴吹先輩って、こんなキャラだった……？）

上品なイメージとは裏腹に、意外と感情が表に出易い人なのかもしれない。

「私もね、最初は合唱部に入るつもりだったの！」

「ええっ！　そうなんですか！？」

適当に振った話題が的中して、少々驚いた。

（けど……）

「だったら尚更、何で軽音部へ？　同じ音楽でも、方向性は全く違うような……」

「うん。合唱部の見学に行ったら、たまたま部屋を間違えちゃって、そこが軽音部だったの。その時はりっちゃんと澪ちゃんしかいなかったんだけど、二人のやり取り……というか、掛け合いが面白くて。私、楽しい人たちと過ごしたかったから『このクラブなら楽しい高校生活を送れるかも』って思ったの！」

「楽しい……ですか？」

（どこかで聞いたようなフレーズだな……）

「そうよ！ “楽しい”よ。その後、唯ちゃんが入って四人になって、何とか廃部を免れたの。この学校って、部員が四人未満だとクラブとして認めてもらえないから……」

（四人未満なら廃部……？）

「だったら来年、先輩たちが卒業して中野先輩だけになったら……」

「新入部員が三人入らなければ廃部になっちゃうわ」

（だからか……）

「だから俺を……？」

「えっ？」

「だから俺を入部させたがっていたんですか？」

俺が入れば、とりあえず来年の新入部員は二人いればいいことになる。

去年の新入部員が中野先輩一人。

今年の新入部員がゼロ。

だとすると来年の新入部員の最低人数が二人になるか三人になるかは結構大きな差と言えるかもしれない。

「勿論、それも否定はしないわ」

「それも……？ 他にもあるってことですか？」

「泣いていたから……」

そう言った琴吹先輩の表情に、ついさっきまでの屈託のないものから一転するような暗い影が射した。

しかしそれでも笑顔を作ろうとしていて、だけどそれが余計に……辛かった。

「泣いていた……？」

誰が……？

いつ……？

どこで……？

なぜ……？

「昨日、オミくんが第三音楽室でピアノを弾いているところへ、私、居合わせたでしょ……」

俺は琴吹先輩が拍手をくれるまで、その存在には気がつかなかったが、おそらく俺が弾いている間、ずっと聴いていたのだろう。

「あの時ね、オミくんが弾くピアノの旋律が、泣いているように聞こえたの……」

「ピアノが……泣く？」

「ええ……。何だか寂しい気持ちを振り払うかのような、そんな悲しい音に……」

あの時のことを、俺は覚えてはいない。

いや、記憶にないというよりも、ただ、夢中で無心だったから……。

それでも、もし本当にそう聞こえたというのなら、それはもしかしたら、姉さんのことを思い出していたのかもしれない。

「だからね……」

何も言えない俺を気遣うかのように、琴吹先輩が更に言葉を続けた。

「私たちと一緒に演奏すれば、きっとオミくんのピアノも楽しくなるんじゃないかって思ったの……」

「一緒に演奏すれば楽しい……？」

「ええ。去年、梓ちゃんが入部してくれて、四人だった軽音部が五人になった。そうしたら四人の時よりも、もっともっと楽しくなった。だからオミくんも入ってくれば、五人の時よりも六人で演奏すれば……。そうしたら今よりも、もっともっと楽しくなると、私はそう思ったの！」

そしてまた、琴吹先輩の表情に、屈託のない笑顔が戻った。

「結局、琴吹先輩も中野先輩と同じことを言うんですね……」

「梓ちゃんと同じこと?」

「軽音部の皆と一緒に演奏している時が一番楽しい。だから一緒に演奏しよう……って」

「ふふ……。そう、梓ちゃんが……」

そう言って笑った琴吹先輩は、何だか嬉しそうだ。

「けど俺は……」

「ねえ、オミくんはピアノ嫌いなの?」

「えっ!?!」

「ううん。ピアノじゃなくてもいい。本当は何でもいいの。音楽とか楽器とか演奏とか。そういうの、オミくんは嫌いなのかな?」

(嫌い……? 音楽を……?)

そんなこと考えたことがなかった。

いや、そうじゃない。

本当は考えないように努めていたんだ。

なぜ……?

「怖かったからだ……」

「えっ！？ 怖い……？」

「えっ！？」

どうやら無意識に声に出していたみたいだ。

「あっ、いや……」

「怖かったの？」

「…… かもしれません。ピアノを弾いても楽しくないとか、ピアノを弾くことが好きではないとか、そんなことを自覚してしまったらどうしようって考えたら……」

「大丈夫よ！」

相変わらずの屈託のない笑顔が、俺に向けられる。

「大丈夫？ 何がですか？」

「オミくんのピアノは泣いていたけど、けどそれは決して、嫌いとか、楽しくないとか、そんな音ではなかったわ」

そうはつきりと言われて、思わず唇を噛み締めた。

「ただ悲しくて、寂しくて、そして……」

「そして……？」

「焦がれてる」

「焦がれてる？」

「それが何に対してか、誰に対してか、私には解らない。だけど、もしかしたらオミくんは、本当は解っているんじゃない？」

（見透かされている……）

そう思った。

琴吹先輩は、きっと本能的に、俺の心の中の、更にずっとずっと奥を、感じているのではないだろうか？

そんな気がした……。

だから……。

「すみません……。俺、購買に行くんで、これで……」

そう一方的に会話を終わらせて、琴吹先輩に背中を向けた。

これ以上、話していたら、心が壊れてしまいそうだと思ったから……。

「ごめんなさい！ オミくん、パンを買いに行かなくちゃいけないかったのね」

慌ててそう謝られると、正直バツが悪い。

「失礼します……」

だからそう言い残し、俺は逃げるように立ち去った。

*

（最悪だ……）

残っていたパンは揚げパンと食パン。

しかもジャムやマーガリンの類いは全て完売。

なので仕方なく、揚げパンと食パン、それにコーヒー牛乳を買った。

牛乳は嫌いだから……。

（明日からは母さんに弁当を作ってもらおう……）

小学校が給食、中学校が弁当……だったから、高校は学食にしよう
と決めていた。

まあ、細やかな憧れって奴だ。

ところが桜高には学食がなく、その代わりに購買でパンとジュース
各種を売っていた。

だからそこを利用しようと、弁当は断ったのだけど。

（登校二日目で、早くも挫折……か）

買ったばかりのパンとコーヒー牛乳の入った紙袋を片手に、俺はいつもの場所へと向かうとした。

いや、いつもの場所っていうのも、当然今日で二日目なんだけど……。

「オミ！」

まさかとは思ったけど、今度は田井中先輩と遭遇だ。

（まったく……。何かのフラグなのか、これは？）

「どうした？ 浮かない顔をして」

「いいえ、べつに。田井中先輩こそ、パンですか？」

「田井中先輩だなんて何だか“アレ”だな」

「“アレ”？ “アレ”って何ですか？」

「えっ！？ “アレ”は“アレ”だよ！ だから私のことは“律先輩”でいいぞ！」

と言いながら、何故か田井中先輩はサムズ・アップをしてくる。

「善処します……って、もしかして“アレ”ってのは、他人行儀のことじゃないでしょうね？」

「おお！ それだよ、それ！ 他人行儀だろ！！」

（だから何でドヤ顔！？）

人からの受け売りを自信满满で、しかも聞いた相手に使うなんて…。

よほどの大物か……？

（もしくはただの……）

「今、何か失礼なこと考えなかったか！？」

「えっ……、エスパー！？」

「認めるのかよ！」

「すみません……」

「そこは謝るところじゃなくて、否定するところだぞぉ」

田井中先輩はそう言うと、まるで悪戯っ子のように笑った。

しかし“名字”他人行儀”という図式がここでも……なんて。

（やはり軽音部ルールなのか、それとも女子ってそういうものなのかな……？）

「ところで、田井中先輩もパンなんですか？ もう揚げパンと食パンしか残ってないですよ」

「えっ！？ オミ、まさかパンを今頃買いに来たのか！？」

「今頃……？」

「バカだな、オミは。いいか、購買は昼休みともなれば戦争なんだぞ！ 四時間目が終わったら速攻ダッシュ！！そして並み居る人の群れを掻き分けて、やっと目当てのパンが買えるんだ！ 今頃来たって、遅い遅い」

「はあ……。じゃあ、田井中先輩は目当てのパンが買えたんですか？」

そう聞くと、またもやドヤ顔をした田井中先輩は、手に持っている紙袋を開け、その中身を見せに来た。

中に入っていたのは、三色サンドとチョコメロンパン……所謂“デッパン”だ。

（何だ？ この敗北感は……）

「しょうがないな」

そう言うと、田井中先輩は自分の紙袋の中から三色サンドを取り出すと、俺に差し出してきた。

「今日は特別だぞ。オミの揚げパンと交換してやる」

「えっ！？ マジで……？ あっ」

またしても心の声が口について……。

しかし揚げパンを取り出しながら、ふと疑問が湧いてきた。

「田井中先輩、まさか『パンを交換してやるから、軽音部に入部しろ』とか言わないですよね？」

「あのな。おまえの中で私は、いったいどんなキャラになってるんだよ」

あからさまに“やれやれ”という表情だ。

「それならいいんですけど……。じゃあ、お言葉に甘えて」

そう言つて、それぞれの取り出したパンを交換した。

「けど、田井中先輩は軽音部に入部しろって言わないんですか？」

「んー！？ 言つてほしいのか？」

「いや、べつにそういうわけでは……」

「まあ勿論、オミが入部してくれるなら嬉しいし、それは軽音部の部員、皆が望んでいることだけだ。でもさ……」

「でも……？」

「オミの気持ちが一番大切だろ？」

「俺の気持ち……？」

「そう！ オミの気持ち。いくら私たちが勧誘して、無理矢理入部

させたとしても、オミがそれで楽しくなかったら意味がないからな」

「俺が楽しくなかったら意味がない……」

「そう！ オミがどうしたいのか……それが一番大切！！」

「じゃあ……」

「んっ？」

「じゃあ、もし俺が『軽音部には入部したくない』と言えば、諦めてもらえるんですね？」

「勿論！ だけどさ……」

「だけど……？」

「私はね、もしオミが私たちと一緒に演奏してくれたら、私たちも、そしてオミ自身も、きっと楽しいって確信してる。だから決める前に、実際に私たちの演奏を聴いて、そしてできれば私たちと一緒に演奏をして、それから決めてほしいって思ってるよ」

「結局、田井中先輩も、中野先輩や琴吹先輩と、同じことを言うんですね……」

「梓とムギ？」

「二人にも言われたんです。『皆と一緒に演奏している時が一番楽しい。だから一緒に演奏してほしい』って……」

「そつかー！ 梓とムギがね」

何だか田井中先輩の表情が、とても嬉しそうだ。

「けどさ！」

「けど……？」

「それは梓やムギ、そして私だけでなく、澪や唯も同じことを言うと思うぞ」

そう言っただけで、田井中先輩は悪戯っ子のように笑った。

「でも俺は、ピアノを弾いても楽しいと思えるかどうか……」

「それでも弾いていたんだろ！」

「えっ！？」

「本当にピアノが嫌いなら、弾くことすらしないはずだ！ だけどオミは、ピアノを弾いたんだろ！」

「それは……」

「一回だけでいいんだ。私たちと一緒に演奏をして、それでも楽しくないって言うのなら、もう何も言わない。だからせめて、やる前から否定や拒絶をしないでほしいんだ」

「田井中先輩……」

田井中先輩にこの言葉を使うのは二回目だ。

だけど、今度は少しニュアンスが違つかもしれない。

いや、そこに込められた意味や想いも、あるいは……。

だけど俺は、あえてこの言葉を使った。

「善処します……」

*

昼休み、昼食を摂る場所といえば、大抵は教室だ。

仲の良いグループで、机をくっつけ合い、椅子を持ち寄り合い、話に花を咲かせながら食べる。

俺のクラスは、俺以外の生徒は全て女子。

そんな中へ自分の机や椅子を持って行って、輪の中に入るなんてこと、俺にできるはずもない。

かといって、そこで一人、ポツンと自分の席に座って食べるなんて、いくら何でも切なすぎる。

故に俺は、一人で昼食を摂っても切くない場所を探した。

中庭、体育館、その裏、その他各特別教室。

そして行き着いた先が、ここだった。

なぜ、もっと早く思い至らなかったのか、自分でも不思議だったが、それでも辿り着いたのだから良しとしよう。

そこは屋上だ。

昨今の学校では、いろいろと事故に至る可能性を危惧して、閉鎖しているところが多いと聞く。

しかし桜高ではそんなことはないらしく、常時開放されていた。

そのわりに利用する人も少ないみたいで、良い穴場を見つけた……と、喜んだのが昨日のこと。

それに味をしめて再び今日、来てみたのだが……。

確かに前兆はあった。

この流れから言えば、こういう展開も然るべきなのかもしれない。

屋上へと出る扉を開いてみると、そこには一人の女子生徒が立っていた。

秋山澪先輩だ。

（さすがに声をかけないわけにはいかないよな……）

「あきや……」

そこまで言いかけて、ふと考えた。

この流れは……。

名字で呼ぶ 他人行儀だと言われる 名前で呼べと要求される 他人なんだから他人行儀でいいじゃん しかし言葉にはできない 善処しますとお茶を濁す

そんな展開が、さすがに四度目となると容易に想像がつく。

（もうこのくだりメンドーだから、名前で呼んでやるか……）

「零先輩！」

「ふえっ！？」

しかし当の本人は予想外な程に驚いたようだった。

「乾くんか……。突然、男子の声で名前を呼ばれたから、びっくりしちゃったよ。乾くんは異性に対しても、普通に名前で呼べちゃう人なんだな……」

（えっ！？ 他人行儀で良かったのかよ……）

「あっ、いえ……。これにはいろいろと理由がありまして……。えっと……、秋山先輩！ 秋山先輩ですよ……」

何とか取り繕うように笑ってみる。

するとさっきまで苦笑い気味だった秋山先輩の表情も、幾分柔らかいものへと変わった。

「秋山先輩はここで何をしているんですか？」

見たところ、俺みたいに昼食を摂るというわけではないみたいだった。

「うん、詞を書いているんだ」

そう言って、持っている大学ノートを指で指した。

「軽音部って、オリジナルやるんですか？」

これは俺の先入観だが、作詞や作曲をして、オリジナル曲を演奏するなんて、プロやプロを目指す人たちがすることだと思っていた。

ましてや高校生でそんなことができるなんて……。

「私たちの場合、基本的にオリジナルだよ。ムギが作った曲に、私が詞をつけるんだ」

秋山先輩は、そう言って、やはり笑った。

ゼロから一を、無から有を、生み出すことは至難の技だ。

俺なんて、いくら琴吹先輩から腕を認められていたとしても、所詮はただピアノを弾いたに過ぎない。

遠い昔、知らない誰かが作った曲を、そいつが指定したとおりに弾く。

ただそれだけだ……。

けど、この人たちは更にそのずっと先を歩いている。

自らの足と、自らの意思で……。

「凄い……ですね」

それは本当に正直な気持ちだった。

「へっ！？ すっ……、凄くなんかいい……。ただ好きでやっているだけなんだから」

「けど俺なんて、ピアノを弾くかどうかだけで迷っているっていうのに……」

凄く小さなことで悩んでいる。

そう思えてならなかった。

けどもつと情けないことは、そう思っているはずなのに、それでも尚、答えを出せないことだった。

「凄いか凄くないか、それは自分が決めてもいいと思うな」

「自分で……？」

「他人から見ても、それが凄いことでも、大したことじゃなくても、自分がどう思うかが大切なんだと私は思うんだ」

「自分がどう思うか……ですか？」

(ついさっき聞いたようなセリフだな……)

「うん。乾くんにとっては、ピアノを弾くっていうことは、凄く大きな、意味のあることなんだろう？ それは乾くんには解らないことだし、だから他人がどう思うのかなんてことには意味がないんだよ」

「軽音部への入部の件も……ですか？」

その言葉に、秋山先輩も優しく微笑んだ。

「もし今も悩んでいて、それでも答えを出せないでいるのなら、私たちの演奏を聴いてほしいな。それで一緒に演奏したいとは思えないっていうのなら、それは仕方がないことなんだよ」

「それは諦める……と？」

「だって一番大切なのは乾くん自身の気持ちだろ！」

『オミの気持ちが一番大切だろ？』

(そうだ、秋山先輩の言葉は、さっき……)

「ふっ！ ははは……」

思わず笑いがこぼれてしまう。

一瞬怪訝そうな表情を浮かべた秋山先輩が理由を聞いてきたが、俺

の笑いはなかなか収まらなかった。

「同じだったから……」

「同じ……って？」

「秋山先輩が言ったこと。田井中先輩が言ったことと全く同じだったから」

「律と同じ……？」

「田井中先輩も、秋山先輩と同じように、俺の気持ちが一番大切だ
って言ってくれたんです。それがあまりにも同じだったから……」

「そうか、律が……」

秋山先輩の表情が、また柔らかいものへと戻った。

「田井中先輩とは以心伝心なんじゃないですか？」

少しからかい気味に聞いてみる。

「付き合いが長いだけだよ、腐れ縁だ」

そう言った秋山先輩の表情は、今日見た中で一番嬉しそうな笑顔だった。

「もし良かったら一度でいいから……」

だから、そう言う秋山先輩にも、田井中先輩に言った言葉と同じ言

葉を伝えた。

勿論それは、田井中先輩に言った時と同じ気持ちで。

「善処します！」

*

昨日の放課後は人気のない第三音楽室でピアノを弾いて……軽音部の人たちと出逢った。

そして今日の放課後は、昼休みにも来た屋上で時間を潰すことにする。

時間を潰さなくてはいけないくらい暇なら、それこそ何か部活をすればいいことなんだけど……。

どのクラブに入ったとしても、そこは女子ばかりなわけで気後れしてしまう。

他の男子二人はどうしているのか？

というより全く顔を合わせたことすらなかった。

フェンス越しに階下を見下ろしてみる。

グラウンドを走るのは陸上部だろうか？

緑のジャージの群れに、青のジャージを着た人が並走している。

ここ桜高では、学年毎にジャージ、上履き、制服のリボンの色が分かれている。

今年は三年生が青、二年生が赤、そして一年生が緑だった。

ちなみに男子はリボンの代わりにネクタイが緑だが、今は一年生しか男子がいないため、今年度はあまり意味をなしていないと言えるだろう。

つまりは先程の陸上部は、緑のジャージの群れが一年生であり、それに並走している青のジャージの人が三年生ということになる。

他にもここからは、様々な運動部の活動を見渡すことができる。

ソフトボール部、テニス部、サッカー部……。

他にも、柔道部や剣道部、バトミントン部、バレー部、卓球部、バスケ部、水泳部、バトン部、茶道部、珠算部、美術部、華道部、ホラー研究会、妖怪倶楽部、オカルト研究会……。

どのクラブも当たり前のように新入部員を迎え、当たり前のように来年もまた続いていくのだろう。

そんな当たり前のことすら叶わなかったクラブもあるというのに……。

（せめて男子が後二人いれば、男子バスケット部を創設できる可能性もあるってもんなのにな）

それもまた、叶うことのないこと……なんだけど。

「オミくん、見つけ〜！」

満面の笑顔なのは、新入部員候補を見つけたからなのだろうか？

きっと入部してくれる一年生なら誰でも良かったはずなのに。

誰にも来てもらえなかったクラブ。

だから、たまたま見つけた『ピアノが弾ける一年生』に、この人たちは必死になるのだろうか？

だからそんな俺に対して、その笑顔を向けてくるというのだろうか？

「ほら、オミくん！ 早く行くよ〜！」

そう言っただけの腕を強引に掴み、無理矢理引っ張って行こうとする。

まるで昨日の琴吹先輩みたいに……。

「ちょっと待ってくださいよ、平沢先輩！」

平沢唯先輩だ。

ただ平沢先輩は、琴吹先輩のような腕力はない。

故に俺でも抵抗することはできた。

「平沢先輩！ いったい俺をどこに連れて行く気……」

「唯でいいよ！」

「いや……、呼び方とかじゃなくて……」

「私、もうすでにオミくんのこと“オミくん”って呼んでるし！」

（つてか、それはそもそも平沢先輩発信だし……）

「ほら、早く！」

「早くつて……。まさか軽音部の部室に連れて行くつもりじゃないでしょうね？」

「ピンポーン！ 正解！！」

平沢先輩はそう言って、人差し指をこちらに差し出すように立てる。

「俺はまだ入部するって決めたわけじゃないですよ」

「私ね……」

だけど平沢先輩は、そんな俺の言葉を聞いてか聞かずか、言葉を続ける。

「私、本当は軽音部を辞めるつもりだったんだ」

「えっ！？」

「オミくんは中学の時はバスケットだったんだよね？」

「はい……」

「楽しかった？」

「まあ……。当時の俺にとっては生活の中心でしたから。苦しい思いも、辛い思いも、悔しい思いも、たくさんしましたけど……。それでもやっぱり大好きでした」

「私にはね、そう言えるものがなかったんだ。中学の頃の話だよ。だからね、高校に入ったら、何か新しいことを始めようって思ったの！ 大好きって胸を張って言えるようなことを」

「それで軽音部に？」

「うん！ 二年前の、ちょうど今頃だったな。でも最初は軽音部って“軽い”音楽だと思ってたから、口笛とか吹いてるクラブだと思ってて……」

「何ですか？ そのやる気のないクラブは？」

「あはは……。オミくん、和ちゃんと同じこと言ってるぅ」

（つていうか“和ちゃん”って誰だよ！？）

「それでね、カスタネットでもできればな。なんて思って入部したの！」

「カスタネット……！？ まあ、平沢先輩には似合う気もするけど……」

「あはは……。また和ちゃんと同じこと言った!」

(だからいったい“和ちゃん”って誰!?)

「けど入部したらギターしなくちゃいけないって知って……。私、ギター弾けないし、他の楽器もできないから、それで入部するの辞めようと思ったんだ」

「けど、結局は入部したんですよね?」

現に今も軽音部部員だし。

「うん! りっちゃんと漣ちゃんとムギちゃんが私のために演奏してくれて、それが凄く楽しそうで、私もやりたいって思ったの!」

「もしかして昨日、俺に演奏を聞かせようとしたのも、それが理由だったんですか?」

「あずにゃんもね、私たちの新歓ライブを聞いて、入部してくれたんだ」

「だから先輩たちの演奏を聴いたら、俺も入部する気になると……?」

「うん!」

自信満々……そう言いた気な程の満面の笑みだ。

「俺は、誰かと一緒にピアノを弾く気はないですよ」

「えっ！？ 何で？ ピアノ嫌いなのか？」

「今は……、解りません……」

「今は……？」

そう、“今は”だ。

昔は、幼い頃は、姉さんがいた頃は、好きだった。

「俺のピアノは全て、姉さんから教わったものです」

「お姉さんがいるんだ？」

「八歳年上で、子供の頃からピアノを習っていて、コンクールで入賞したりして。自慢の姉でした」

「そのお姉さんにピアノを教わってたのか？」

「はい……。俺のピアノの思い出は、だから姉さんとの思い出です。四年前、姉さんがいなくなってからは、俺はピアノに触らなくなりました。昨日までは……」

「じゃあ、昨日ピアノを弾いたのは四年振りだったのか？」

「はい……。姉さんがいなくなってから振りでした」

「そうだったんだ……」

「怖かったんです……」

「ピアノを弾くことが？ 何で？」

「俺は姉さんに褒めてもらいたくてピアノを弾いていたから。姉さんがピアノを弾くことが好きだったから、だから俺も好きになったから。だから……」

「だから……？」

「姉さんがいない今、ピアノを弾いて“楽しい”って感じなかったらどうしようって……。嫌いになってたらどうしようって……。もしそうならいたら、姉さんとの思い出ごと、俺は……」

「大丈夫だよ！」

「大丈夫……？」

（何が？ 何が大丈夫なんだ？ 何を根拠に、何を大丈夫だと言っているんだ？）

だけど平沢先輩の表情は、相変わらず自信満々で、そして満面の笑顔だった。

「私たちがいるもん！」

「えっ！？」

「私たちが絶対に、オミくんがピアノを嫌いにならないようにする！ オミくんがピアノを弾いて“楽しい”って思えるように、私たちがするから！」

「平沢先輩……」

「唯でいいよ!」

そう言った平沢先輩は、右手をそつと差し出した。

それは『一緒に行こう』と言っているような……、そんな手だった。

「何で……? そんな自信満々に言えるんですか……?」

今度は差し出した右手を見つめ、平沢先輩の表情が優しい微笑みへと変わった。

「私もね、お姉ちゃんなの。私には憂っていう妹がいるんだけど、今この学校の二年生なんだ。私は憂が大好きだし、憂も私を大好きだって言ってくれる。だから解るの! もし私が憂の前からいなくなつたとしても、憂は私との想い出を否定するようなことはしないって! 私が好きだった音楽や、いつも私にしてくれていた料理とかを、嫌いになつたりはしないって!」

「何で……、そう思えるんですか?」

「それはね、私は憂が大好きだし、憂も私を大好きだからだよ!」

「大好き……だから?」

「そう! だからオミくんがお姉さんのことを大好きなら、きっとお姉さんが好きだったピアノを、オミくんが嫌いになれるわけないんだよ!」

（無茶苦茶だ……）

根拠も曖昧で、独り善がりで、説得力も何もあつたもんじゃない……。

だけど……。

なぜだろう……。

信じてみたい……。

今はただ、そう思えてならないのは……。

「大丈夫！ きつとオミくんはピアノが大好きだよ！ だから私たちと一緒に演奏したら、絶対に楽しいよ！」

そう言つて再び差し出された平沢先輩の右手を、俺は思わず、今度は自然と左手で握っていた。

「さあ！ 行こう！」

走り出す平沢先輩の後ろを、追い駆けるように着いて行く。

振り払うことも、立ち止まることも、きつとできる。

だけど今は、したくはなかった……。

ただ言われるままに……。

いや、違う……。

もしかしたら、俺はもう既に、こうなることを望んでいたのかもしれない……。

*

「で……、なぜにこういう状況になってるんですか？」

部屋に入って行くなり、机を四つくっつけた簡易のテーブルに着かされた。

そのテーブルの上には、昨日と同じく高価なティーセットが置かれている。

見るからに美味しそうなケーキと、上品な香りが漂う紅茶を差し出され、そんな俺を五人の女子生徒が取り囲む。

「来てくれて、有り難う」

秋山先輩は、そう言って優しく微笑む。

「ようこそ、軽音部へ」

琴吹先輩は、楽しそうに紅茶を淹れる。

「私は信じてたよ」

田井中先輩は、わざとおどけてみせる。

「入部……で、いいんだよね？」

中野先輩は、そう恐る恐る聞いてくる。

「勿論だよ。ねえ、オミくん！」

平沢先輩は、相変わらず自信満々だ……。

そして俺の、次の言葉を、皆が待っている。

もう後戻りはできない。

（はっきり言おう）

はっきりと……、言わなくてはいけない。

「俺は……」

五人が一斉に唾を飲む。

視線が……少し痛い。

「やっぱり俺は、ピアノは弾きません」

そう断言すると、皆の表情が一様に曇る。

「だから……」

それでも俺は、言葉を続ける。

「キーボードで良かったら、入部させてください」

信じてみよう。

信じてみたいと思う。

先輩たちの言葉を。

そして、姉さんと過ごした日々を……。

「やあつたあゝ！」

「やあつたあゝ！」

「やあつたあゝ！」

「やあつたあゝ！」

「やあつたあゝ！」

俺の一言で、先輩たちが喜び合う。

万歳をする人、抱き合う人、頬をつねり合う人……。

（入部……するんだな、俺）

少し照れたように、だけど嬉しさを隠せずに、意識的に俯いて、俺は小さく、本当に小さく、笑った。

#2 それぞれの景色

今日、ついに軽音部に入部してしまった。

結果的には良いように丸め込まれた感も否めないが、それでも入部すると決めた以上、もう後戻りも中途離脱も許されない。

ただ、ピアノには姉さんとの思い出が詰まっている。

だから、いくら軽音部に入部したからといって、人前では弾きたくない。

だから担当はキーボードにすると決めた。

軽音部には既に、琴吹先輩というキーボーディストがいるが、ツイン・キーボード編成というのも、幅の広い演奏ができて面白いかもしれない。

なんて言うのは建て前で、本当の理由は、練習にしろライブにしろ、ピアノを持ち運びするのは、なかなかの肉体労働だ。

いや、それで報酬を得るわけではないから、“労働”ではないが…。

だからキーボードを担当することにした。

まあ、キーボード自体は経験ないが、ピアノなら多少は自信があるから、さほど苦労はしないと思うし。

（多分……だけど）

だが、キーボードを担当するならするで、一つ問題がある。

どんなに名だたるキーボーディストも、必ず最初に訪れたであろう
第一関門。

それは……キーボードを手に入れるということだ。

さすがに楽器がなくては、バンドなんてできるわけがない。

そう思つて、財布の中を覗いてみる。

（無力だ……）

貯金箱を開けてみる。

（やっぱり無力だ……）

これではキーボードどころか、キーホルダーくらいしか買えないだ
ろっ……。

（いや、買わないけど……）

そもそもキーボード一式がどのくらいするのかも、皆目見当がつか
ない。

（とりあえず明日にでも、楽器店に行つて、値段だけでもチェック
するか）

ただどのみち、予算の都合だけはつけておかなくてはなるまい。

となると頼みの綱は……。

（我が家の財務大臣だな）

*

「あらタツくん！　ちょうど良かった。今ちよつとご飯ができたところだったの」

確かにリビングのテーブルには、まるで何かのパーティーでも始まるかのようなご馳走が並べられていた。

（つていうか、二人でこれだけ食う気が……）

「タツくんがまたピアノを弾く気になったのが嬉しくつて、ちよつとはりきりすぎちゃった」

（はりきりすぎちゃったじゃねえよ！）

「つていうか、タツくんはやめろよ！」

「はいはい」

本当に嬉しそうだ……母さんは。

「たださ、ピアノは弾かないぜ……」

「えっ！？　ピアノを弾くんじゃないの？」

「いや……、確かに軽音部に入部したとは言ったけど、ピアノを弾くなんて言ってないだろ？」

「そうなんだ。残念……」

「でさ、ちょっと相談があるんだけど……」

「何々？ タツくんからの相談ならお母さん、頑張っちゃうわよ！」
そう言って母さんは力瘤を両腕に作るような仕草をするが、やはり
か弱そうだ。

「軽音部でキーボードを担当することになったんだけどさ……。キーボードを買うための予算をね……」

そこまで言いかけた時、母さんは何かを思い出したように「あっ！」
という声を上げ、おもむろに奥の部屋へと駆けて行った。

理由は解らないが、とにかくその後を追ってみる。

すると奥の部屋の押し入れから何やかんやと物を出し始め……、
してわりと大きめのケースを取り出した。

「これって……」

（まさか……！？）

「トーコちゃんが高校生の時に使っていた物なんだけど……」

そう言って開けられたケースの中に入っていたのは、まぎれもなくキーボードだった。

「確か付属の機器もこのへんに……」

それから探しては組み、探しては組みと、約十分。

出来上がってみれば、立派なキーボードが一式組み上がってしまった。

これではアンプでもあれば、もう言うことはないだろう。

「しっかし知らなかったな。姉さんが高校生の時、キーボードをやっていたなんて」

「これは学校で使うことが多かったから、殆ど学校に置きっ放しだったしね」

とにかくこれで第一関門はクリアした。

「じゃあ、念のために明日にでも楽器店にメンテナンスをお願いしておくわね」

「ああ、頼むよ」

そう普段と変わらないトーンで言葉を返してみたが、やはり幾分興奮しているのが自分でも解った。

*

翌日……。

昼休み、相変わらず屋上で昼食（今日からは母さんの手作り弁当だ）を摂っていると、母さんからメールが来た。

昨日のキーボードは、明日の午後には調整も終わり、我が家へと帰ってくるとのこと。

自分でも抑えられないほど嬉しかったからか、だからこの日の放課後は部室に一番乗りしてしまった……。

（俺って、こんなキャラだったっけ……？）

まあ、一番の後輩だし、先輩たちより早く部活に来るのは自然なことだろう。

せっかく早く来たのだし、新入部員らしく掃除でもしようかと思っただが、何気に部室も倉庫も綺麗に整頓されている。

（やっぱ、女子ばかりだし、そういうところは気がつくんだろうな）

棚に並んでいる漫画と、倉庫の入り口のカエルの置き物はどうかと思っただけ……。

（まあ、整頓はされてあるし、拭き掃除くらいはするかな）

特にここでは毎日のようにティータイムが繰り広げられているとのことなので、塵や埃などを拭き取っておくのは衛生上必要なことだろう。

雑巾とバケツを用意し、テーブルや棚、サッシなどを拭いていく。すると、ふと部屋の片隅に存在感を露にする水槽に目が止まった。

「カメ……？ スッポン……？」

どちらにせよ、なぜ軽音部に爬虫類が……？

まるで我が家同然と、優雅にゆったりと泳いでいる。

（しかし……）

考えてみると、つくづく軽音部の部室らしくない室内だと思う。

今あるドラムセットやアンプなどがなければ、ちょっとした喫茶店として通りそうだ。

「カメ……？ スッポン……？」

もう一度、水槽を覗き込むが、いまいち解らない。

「トンちゃんだよ！」

突然ドアが開き、平沢先輩の声がした。

「あつ、お疲れ様です……って、トンちゃん？」

「スッポンモドキっていうカメの仲間だよ」

平沢先輩の後ろから顔を出した中野先輩が、そう補足した。

「カメなのにスッポンモドキって……。スッポンだってカメなのに……。何だか可哀想な奴だな……」

「可愛いでしょう！」

「えっ！？」

（可愛い……？）

「えっ！？ 可愛いよね？」

俺の反応に、平沢先輩は予想外とでもいうような表情を返してくる。

「可愛いよね！？ あずにゃん！」

「私に振らないでください！」

中野先輩も困惑気味だ。

「けど何で部室に？」

「ああ、それはね」

「こんにちは」

「こんにちは」

平沢先輩の言葉を遮るようにドアが開かれ、秋山先輩と琴吹先輩も入ってきた。

「あら、オミくん早いよね」

「一年生は授業が終われば、掃除くらいしかありませんからね」

「あれ？　そういえば部屋が綺麗になってないか？」

先に来た平沢先輩や中野先輩より早く、秋山先輩が気づいた。

もともと俺の手には未だに雑巾が握られているわけだし、さほどの推理力が必要なわけでもないが……。

「早く来たので拭き掃除をしていたんですけど、それでこのカメを見つけて」

「オミくん！　カメじゃなくてスッポンモドキだよ！」

平沢先輩がドヤ顔で解説を入れてくるが……。

（スッポンモドキもカメなんだけどな……）

でもここは、先輩の顔を立てて言わないことにする。

「いや、そんなことよりも、何で部屋に？」

「ああ、そうだったね！」

さっきまでの会話を思い出した平沢先輩が、スッポンモドキが部屋にきた経緯を話してくれた。

倉庫の整頓をしていたら顧問のギターが出てきて、しかもそれを売

って部費の足しにしろと言われ、売りに行ったら五十万円なんていう多額の紙の束と交換され、それをくすねようとしたらバレ、何か一つだけ好きな物を買ってあげると言われ、買ってもらったのがこのスッポンモドキ……トンちゃんだと。

「だからね、トンちゃんはあずにゃんの後輩なんだよ！」

平沢先輩が嬉しそうにそう言うと、中野先輩も「もう！」なんて照れながらも嬉しそうにそのスッポンモドキに目を移した。

（って……、あれ？）

「待ってくださいよ……。そのスッポンモドキが中野先輩の後輩ということは、俺と同期ってことですか？」

（へっ！？ スッポンモドキが同級生……？）

「ホントだ〜！」

「いや、平沢先輩！ 笑い事じゃないですよ！」

（いや……、待てよ……）

「どうしたの？ オミくん」

突然黙った俺を不思議そうに琴吹先輩が見つめる。

「実際、俺が入部したのは昨日だし、むしろこのスッポンモドキのほうが、ちよつとだけ先輩ってことになるんじゃないあ……」

「おおー！」

「おおー！」

「おおー！」

「おおー！」

四人の声がハモった……。

「トンちゃんはオミくんの先輩だね！」

（だからなぜ、平沢先輩はそこでドヤ顔なんだ！？）

しかし今更気づいた驚愕の事実だ……。

「はあー、トンちゃん先輩、か……」

「トンちゃん先輩はさすがにおかしいでしょ？」

「けどトン先輩だとブタみたいですよ」

「ううーん……。確かに鼻もブタみたいだけど……」

「ああ、言われてみれば」

「けどやっぱりトンちゃん先輩はおかしいから、普通にトンちゃん
でいいんじゃない？」

「そうですね……。まあ、先輩だけど同級生つてことで、トンちゃん
で……」

と、中野先輩との話し合いの末、呼び名は“トンちゃん”に決まっ

た。

しかし平和だ……。

「あつ、そうだ！」

今度は琴吹先輩が何かを思いついたようだ。

「これを機会に私たちのことも名前で呼んでみたらどうかしら？」

いつもの屈託のない笑顔で、そう俺に提案してきた。

「けど、先輩に対して名前で呼ぶなんて……」

「けど梓ちゃんだって、そう呼んでるわよ」

「そうだね！ それは良い考えだよ！ ムギちゃん、頭良い」

「私も孝臣くん……オミくんから“梓先輩”って呼ばれたいです！」

俺はちらつと秋山先輩を見てみた。

秋山先輩は少し恥ずかしがっているようだが、しかし反対はしないようだ。

今ここにはいない田井中先輩も、昨日は同じことを提案していたし。

（満場一致かよ……）

気づくと、秋山先輩を除いた三人は、待ち構えるような視線をこち

らへと送っている。

「解りました……。それじゃあ、唯先輩！」

「おお！ オミくんが唯先輩だつて」

「梓先輩！」

「先輩……になつたんだ、私……」

「紬先輩！」

「ダメよ、オミくん！ “紬先輩”じゃなくて“ムギ先輩”よ！」

（ダメ出しされた……）

「けど、先輩に対してそんな馴れ馴れしい呼び名でいいんですか？
しかも俺、男だし……」

「後輩に男も女もないわ！ さあ、思いっきりどうぞ」

「じゃあ……、ムギ先輩！」

「ああ……、ありがとう！」

（けど、後輩でも男と女はありますよ……）

そう思ったが、やっぱり口には出さないのでおっつ……。

（最後は……）

「漣先輩！」

「ひっ！？」

「漣先輩？」

「ああ……、ごめん。やっぱり男性から名前で呼ばれるのはドキッとするな……」

そう言うと、やっぱり顔が赤らんでくる。

さぞかし、そうとう恥ずかしいのだろう。

「やっぱり秋山先輩のほうがいいですか？」

無理強いは良くないし、俺自身も先輩を名前で呼ぶのはやはり失礼な気がする。

こんなふうに先輩たちのほうから望まれなければ、先輩を名前で呼ぶなんてことは絶対にしないだろう。

特に俺みたいな運動部出身の者は……。

「いや！ いいんだ！」

ただ秋山先輩は、俺の申し出を、少し考えて拒んできた。

「私だけ名字っていうのも寂しいし、やっぱり名前で呼んでくれ」

「解りました、漣先輩！」

そう言うと、優しく頷いてくれた。

「その代わり……」

「その代わり……？」

「私も乾くのこと、皆と同じように“オミくん”って呼んでもいいかな？」

「ダメです！」

「えっ!？」

「漣先輩は俺の先輩なんだから、“くん”なんて付けないでくださいよー！」

「じゃっ、じゃあ……」

（な……、何だ……!?!）

漣先輩の顔が見る見る赤くなっていく。

恥ずかしそうに、少し俯き気味に、そして……。

「オ……、オミ……」

「うっ！」

（かつ、可愛い……）

「可愛いね〜。こっちを見てるね〜」

とりあえずお互いの呼び名も決まり、和気藹々とする中、唯先輩は水槽の中を浮遊するトンちゃんを見て、うつとりとしている。

その姿はまるで、孫を愛でるお婆ちゃんのような。

「とにかく唯先輩！ 飼うと決めた以上、途中で放り出したらダメですからね！」

「そうだな。梓の言うとおり。最後まで責任を持って面倒を見ないとな」

というか、唯先輩は余程信用されていないみたいだ。

「まあ、でも確かに生き物ですからね〜。餌だって毎日やらないといけないし、土日も誰かが来ないといけないし、夏休みとかの長期の休みには誰かの家に持って帰る必要もあるかもだし、何より水槽の掃除もマメにやらないといけないし」

挙げていけばキリがない。

生き物を飼うということは、その命を預かるということだ。

当然、その責任は重い。

「ギー太より手がかかるね〜」

「あつ、餌が足りなくなったら言つてね」

「餌つて、家でカメでも飼つてるんですか？」

「ええ。クサガメとか、ミナミイシガメとか、ミシシッピーニオイガメとか……」

「エキスパート！」

「エキスパート！」

「エキスパート！」

「エキスパート！」

そんな他愛もない話で盛り上がる。

（やっぱり、平和だな……）

と、その時だった。

そんな穏やかな空気を、一瞬で破壊するかのような大きな音が、俺たちの鼓膜に直撃した。

見ると、けたたましくドアを開けた田井中……律先輩が、なぜか半泣きで立っている。

手にはノートパソコンとディスクを持って……。

「どうしたんだよ？ 律！」

「もうドラムやだ〜！〜！」

「はあ〜？」

律先輩の突然の爆弾発言に、漣先輩は呆れたような声を上げる。

そして、唯先輩は梓先輩と、俺はムギ先輩と、それぞれ顔を見合わせた。

「ドラム嫌だつて……？」

「すまん！ 嫌だとは言い過ぎた！」

（即答……！？ っていうか、本当に嫌がつてんのか……？）

「とにかく律！ 説明しろよ。どうということなんだ？」

漣先輩からそう聞かれ、律先輩は「これを見よ！」と、ノートパソコンの画面をこちらへと向ける。

律先輩曰く、生徒会で撮った軽音部の活動記録ということらしい。

その少し暗めの画面には、中央にステージがあり、三人の女子生徒にライトが当たっていた。

「これは一年の時の学園祭だ！」

律先輩はそう説明する。

「私、見ました。漣先輩の……」

「うおお〜い！ やめろお〜！！」

何かを思い出したように口を滑らせた梓先輩を、漑先輩が必死で止めた。

「一年の……ってことは二年前の学園祭ってことですか？　漑先輩、何かあったんですか？」

梓先輩の発言を聞けば、気になるといのが本能というものだろう。

「ライブが終わってステージ袖に帰る時にね……」

「こらっ！　唯！　それ以上は喋るな！　オミも詮索しないでくれ
！！」

さっき俺のことを“オミ”と呼ぶのに、あれだけ恥ずかしそうにしていた漑先輩が、もはや自然な流れでその名前を口に出している。

つまりは、よっぽどの“黒歴史”ということなのだろう……。

（この話題は忘れてあげよう……）

「っていうか、私が言いたいのはそこじゃねえ！」

自分の言いたいことが伝わらないからか、律先輩は膨れっ面（といっても、芝居がかってはいたが……）になる。

（あれっ！？）

「律先輩が一年の時のってことは、まだ梓先輩が入る前ですよ？　何で三人しか映ってないんですか？　これ、真ん中が漑先輩です

よね？ で、向かって右が唯先輩で、左がムギ先輩。律先輩が映っていないんですね」

「そのとおりだ、オミ！」

と、さも『我が意を得たり』とでも言わんばかりに、律先輩の聲が大きくなる。

「それだけじゃあないんだよぉ」

そしてそう言つて、次々とディスクを交換していく。

「これが去年の新歓の時！ これが去年の学園祭！ そしてこれが今年の新歓！」

確かに律先輩の主張のとおり、画面に映る軽音部のライブ映像には、律先輩の姿は殆どなく、時々ライトによって光るオデコのみが、その存在を表していた。

「ライトが当たってないんだな……」

澪先輩がそう分析すれば、

「ドラムは一番後ろですからね」

梓先輩がそう同調する。

「あつ！ 足下が映ったわ」

ムギ先輩が新たな発見をすれば、

「今、オデコが光った!」

唯先輩も負けじとフォロー(?)する。

しかし唯先輩のフォローは、律先輩から、オデコを押さえながら「うるせえ」と一喝されてしまったが……。

こちらに背を向け、部室の隅っこで膝を抱えて座り込み、シクシクと泣く(やはりどこか芝居染みてはいるが……)律先輩に、しかしとある疑問が頭に浮かんできた。

そしてそれは、他の先輩たちも同じだったようで、皆で顔を見合わせ、それから梓先輩が代表するかのように口を開いた。

「あの、それで……?」

つまりは『だから、どうしたの?』ということだ。

「他の楽器がやりたい……」

そして律先輩の口からは、本日二度目となる爆弾発言が飛び出した。

「ちょっと待てよ、律! 律がドラムやらないと、誰がドラムやるんだよ!?!」

しかしその答えに、律先輩は口笛を吹くだけだった。

(まあ、ちゃんと吹けてないけど……)

「それに律、ドラム以外のチマチマした楽器は嫌だと言ってなかったか？」

そう湊先輩は、呆れたように言うのだが……。

（まさかそんな理由で、律先輩はドラムを選んだのか……？）

楽器を選ぶ……そこには人によって違いこそあれ、それぞれの理由があるものだ。

俺はもともピアノが弾けるということで軽音部にスカウトされたわけで、だから自然とキーボードが担当に決まったわけだが、そもそもピアノを弾くきっかけとなったのは姉さんの存在だった。

故に俺が今、軽音部のキーボード担当となった起因は、姉さんだとも言える。

しかし、それにしても……。

（チマチマした楽器が嫌だからドラムって……）

ある意味、律先輩らしいといえば、らしいかもしれないけれど……。

そして湊先輩の先程の言葉に反応した律先輩の口からは、本日二度目の爆弾発言が飛び出した。

「たまにはとっ替えっこしようぜ、楽器！」

（何を言ってるのやら……）

しかし律先輩のその発想力には脱帽する。

よくそんなことを思いつくものだ……。

まあ、それは悪い意味で……だけど。

しかしその律先輩の発案に、目を輝かせて賛同する者が約二名……。

言わずもがな……。

「それ良い！」

唯先輩と……、

「面白そう！」

ムギ先輩だ。

そして二人の反応に、ただ見つめるだけの梓先輩と、思わず反応してしまふ澪先輩。

どうやら世論は律先輩に傾いたようだった。

「それじゃあ先ずギターをやってみなよ！」

そう言つて唯先輩は、自分のギターを差し出す。

しかしそこから、唯先輩のミニコントが始まり、それが一頻り終わるや、そこに梓先輩も加わって、ギター講習会が始まった。

（やれやれ……）

俺はテーブルの周りに置かれている椅子の一つに着くと、とりあえず傍観することにした。

梓先輩が先ず最初にした曲は……。

（ふわふわ……？）

そのネーミング・センスに自分の耳を疑った。

そういえば昨日、漣先輩から、軽音部はライブではオリジナルを中心に演奏し、そのオリジナルの全てはムギ先輩が作った曲に、漣先輩が詞をつけるのだと聞いた。

つまりはその“ふわふわ”なんていうフレーズも、漣先輩が考えた……ということなのだろう。

（何だか、他の曲のタイトルを聞くのが怖い気がするな……）

それにしても……。

律先輩一人に対し、梓先輩と唯先輩が二人がかりでギターを教えているのだが、その教え方の差が少し面白い。

技術的なことを、理論的に教える梓先輩と、感覚的に教える唯先輩……と、そんな対比だ。

そんな律先輩たちを尻目に、漣先輩は「どうせすぐに飽きるだろう」と言っ、俺の隣の椅子に腰かけた。

いつの間にかムギ先輩も、お茶の準備を始めている。

そして俺はといえば、無意識のうちに、左手で右腕を握り、梓先輩が口になっているコードを押さえていた。

ちなみにこのコードは“E”らしい。

（意外に難しいな……）

たかだか一つのコードを押さえるくらいで、指が釣りそうになる。

見ると、澪先輩やムギ先輩も、そのギター講習会に見入っていた。

それは二人とも、梓先輩の「もっと背筋を伸ばして!」という声に、思わず反応して背筋を伸ばしたくらいに……。

「それじゃあ、次のコードに行きましょう!」

梓先輩も気持ちに乗ってきたようだ。

「これがまた、難しいんだよね」

唯先輩も楽しそうだ。

しかし当の律先輩からは、本日最後の爆弾発言が飛び出した。

「ギター無理かも……」

「早っ!」

「早っ！！」

「早っ！！」

「早っ！！」

「早っ！！」

そして大仰に「おみそれしました」と言いながらギターを返す律先輩と、「いえいえ」とそれを受け取る唯先輩。

そしてその後の、唯先輩の「ギター、お帰り」と言いつつギターを大切そうに、そして愛おしそうに抱き抱える姿に、律先輩はどこか微笑ましそうな笑みを浮かべた。

もつともその時俺は、そんなほのぼののシーンを見ながら、ギターに名前を付けていた唯先輩の独特のセンスに驚いていたのだが、やはりそれも口に出すことはしなかった。

*

翌日の放課後。

俺は昨日から日課となった部活へと向かう。

（俺が軽音部なんてな）

今更ながら、中学時代はバリバリの体育会系だった俺が、音楽系の部活に入るだなんて、きつと中学時代の友達が聞いたら驚くことだろう。

何せ今は、自分自身が驚いているのだから……。

もつとも俺の担当楽器であるキーボードが手元に来るのは、今日の夕方だ。

この時間なら、もう家に届いているかもしれないが、俺が家に帰らないことには再会できるはずもなく……。

故に今日までは、楽器なしでの部活となる。

（軽音部の活動に楽器なしってのもどうかと思うけどさ……）

しかし昨日も結局、律先輩の“ギター教室”騒ぎで練習どころではなかったし、何よりその後は、ゆったりまったりなティータイムが始まったので、実は全く不便は感じなかった……。

（それもそれでどうなんだろう……）

そういえば、先輩たち五人が組んでいるバンドの名前は“放課後ティータイム”だという。

言い得て妙というか、ぴったりのネーミングだ。

（それがぴったりなのも、それはそれでどうなんだろうか……）

「乾くんはいるかしら？」

そんな不毛なことを取り留めもなく考えているところに、名前を呼ばれ、ふと声のほうへと反応した。

声をかけてきたのは、どうやら女性教師のようだ。

俺のクラスでは授業を受け持っていないため、直接の面識はないが、見るからに優しそうな先生という印象を受ける。

（きっと、こういう女性のことを“美人”というんだろうな……）

なんてことを思わず考えてしまうほどに……。

「あつ！ はいはい！ 俺です！」

慌てて返事をして、鞆を手に、先生の待つ教室の出入り口へと駆け寄った。

「あなたが乾孝臣くんね」

優しく微笑むその表情からは、大人の女性を感じさせるような魅力がある。

決して軽音部ではお目にかかれないようなタイプだろう。

（まあ、比べること自体アンフェアか……）

「何ですか？ 先生」

「乾くん、軽音部に入部したのよね？」

「あつ……、はい……」

なぜ今、この状況で軽音部の話題が出てきたのか不思議だったが、それはその先生が持ってきた一枚の紙を見て理解できた。

“入部届”

一番上にそう書かれてあるその紙は、文字どおり入部届だ。

つまりはそれを未提出な俺は、現段階では『自称・軽音部部員』に過ぎず、この入部届を提出する必要があるということだ。

そしてその入部届を、なぜわざわざこの先生が持って来てくれたのかも、その後の言葉で全てが納得となった。

「私は軽音部顧問の山中さわ子です。この入部届にクラスと名前、それとできれば入部の動機を記入してもらえる？」

「ああ、はいはい。それじゃあ今から部室に行きますんで、そこで書きますね」

そう告げると、先生もちょうど部室へと向かうところだったということで、そのまま二人で一緒に行くこととなった。

「まあ、ピアノが弾けるの？」

「はい。といつても、きちんとレッスンを受けたわけではないですが……」

「そう。でもムギちゃんとのツイン・キーボードも楽しくなりそうですね」

「けど今はまだ楽器がないから、部室へ行ってもお茶を飲んでるだけなんですけどね……」

「あらゝ、私も大好きよ！ ティータイム！」

「はあ……」

（いや、顧問にまで楽しみにされてて、本当にいいのだろうか……）
そんな他愛もない話題を話しているうちに、あっという間に部室に到着した。

「お疲れ様でゝす」

「皆、来てるゝ」

各々が挨拶をし部室に入ると、中には唯先輩、ムギ先輩、梓先輩の姿があった。

相変わらず、まったりお茶をしてはいたが……。

「あつ、そうだ。入部届」

テーブルに着き、さつき貰った紙を出す。

その間、ムギ先輩は黙々と……いや、嬉々としてお茶の準備をし、俺と先生のところへと運んでくれた。

昨日も一杯目は、先輩にお茶の準備をさせるなど気が引けたが、それがムギ先輩の言わば趣味みたいなものだと言って、二杯目以降からは、あえてムギ先輩に任せるようにしている。

要は人をもてなすことが好きだということらしい。

（何か、うちの母さんに似ているな……）

そんなことも考えたが、いくら何でも母親と比べるのは、ムギ先輩に対して失礼な話だ。

「おっ！ オミくん、それなあに？」

唯先輩が興味津々といった様相で、俺の入部届を覗き込んできた。

「入部届ですよ。唯先輩だって、一年の時に書いたでしょ？」

「ふえっ！？ そうだったかな？ 覚えてないやあ」

唯先輩はそう言って、「エヘ」と笑う。

（いや……、書いてないと入部できないんだけど……）

今の俺がその証拠だ。

「えっと……、一年五組、乾孝臣と……。後は入部の動機か」

結局、俺は何で軽音部に入ったのだろうか？

（勧誘されたからか……？）

それも先輩たち全員に……。

いや、そうではない。

俺が軽音部に入った理由。

それは……。

「楽しそうだったから」

言葉にすると、何とも貧弱な表現となった。

しかし俺はその言葉を、言葉にはできない気持ちを込めて選んだ。いろいろと複雑な気持ちではあるが、今はその一言が、むしろ一番それを端的かつ的確に表しているように思える。

入部届を覗き込んでいた唯先輩が、その言葉を読んでニタツと笑う。梓先輩も、唯先輩に釣られるかのように、それを見て「ふふっ」と笑みをこぼした。

「なになに！？」

その二人の反応に好奇心を抱いたからか、ムギ先輩も給仕する手を休めて入部届に目をやった。

「あら」

そしてその声を漏らすと、「うふふ」と……、やはり笑った。

「ちょっと！ 三人して人の入部届を見て笑わないでくださいよ！」
だから、ほんの少しの反抗を試みた。

勿論、語気は弱いものだったが……。

「だあゝつてえゝつ」

「そんなこと言われても」

「ねえゝ」

そう言つて三人は顔を見合わせ、また笑つた。

「はい、先生！ 書きましたよ！」

これ以上、笑い者にされては敵わないと、早々に入部届は提出し、ムギ先輩が淹れた紅茶に口をつけた……。

「あら、ふふふ……」

（先生にまで……）

笑われてしまった。

しかしケーキを頬張りながら笑う先生の目は、どこか俺の心の中を見透しているかのようにも感じる。

それは大人故の経験からなのか、それとも教師故の経験からなのか……。

少なくとも、そんな経験をしてきたが故の笑み……のように思えた。

「というわけで、今日はキーボードをするぞぉー！」

昨日と同じように、勢いよくドアを開け、開口一番に律先輩はそう宣言する。

そして律先輩の後ろには、やはり昨日と同じように呆れた顔で着いてきている澪先輩の姿があった。

「輝け！ りっちゃん作戦”まだやってるの〜？”

（何だよ、その怪しい謳い文句のような作戦は……？）

「やっぱ輝いてないとダメかもしれない！」

その唯先輩の言葉を受けてなのか、律先輩はそう言葉を続けた。

そして「さわちゃんを見よ！」と言いながら、先生を指で指す。

当然、いきなり名前を呼ばれた先生は困惑した表情を浮かべたが、フォークに突き刺さったケーキはちゃっかりと口に入れた。

「最近のさわちゃんは、担任になってからというもの、肌はツヤツヤ、髪はサラサラ、笑顔はキラキラって、何かどんどん輝いていってるだろ！」

律先輩の言葉に、先輩たちの視線が先生に集中する。

しかし先生は、そんな視線さえ満更でもない様子で受け流し、わざと足を組み替えると、頬杖について、さっきまでよりも更にセクシ―な笑みを作った。

「いやゝ、担任になってからというものの、教壇というステージに立つ機会が増えて、見られることが多くなったから、それだけ輝いていくのかも……」

その作り笑いが、一段とドヤ顔になる。

「それで今日はキーボードってわけ？」

（それでって！？　今、何かキーボードに結びつくような話題があったか……？）

唯先輩の発言は本当に脈略がなく発せられる。

すると律先輩は無言でキーボードの鍵盤を押した。

「ああゝ、今『ピンポン』だってえゝ」

（当たってたのかよ！）

「けど律先輩、楽譜は読めるんですか？」

梓先輩の問いかけに、律先輩はまたもや無言でキーボードの鍵盤を押す。

「あつ！　今、“大丈夫”って!!」

（だから唯先輩は何で解るんだよ！？）

「はあゝ、今度は“ムギちゃん”って!!」

「言った！ 言った！」

（今度はムギ先輩まで……。だから何で解るんだよ！？）

「なぜ解る！？」

律先輩の弾く音色が、半ば“イントロクイズ”のような状態になつてしまい、しかしそれを唯先輩とムギ先輩が当てていくため、心の中で呟いた言葉が、漑先輩の弦きとシンクロした。

律先輩はキーボードが余程気に入ったのか、様々な音色を弾いていく。

「キーボードって、いろんな音があって面白いな」

なんてことを言いながら。

（いろんな音……か）

ふと隣を見ると、さっきまで呆れた顔をしていた漑先輩が、うずうずしているように見える。

「なあ、ムギ！ 私にも……」

（あっ！ 立ち上がった……）

見えるんじゃない、本当につずつずしていたようだ。

しかし、そんな漑先輩を見て、ニヤリと笑う律先輩。

「りっ！ 律！ そういうのはやめような」

律先輩と漣先輩……端で見ている限りでは、何があったのか解らないが、お互いに頼つぺを揉み合い始めた。

きつと二人の間でしか解らない何かを感じ取ったのだろう……。

「ねえ、りっちゃん！ ベースはやらないの？」

唯先輩が思いついたように聞いてきた。

確かに昨日はギター、今日はキーボード……とくれば、次は漣先輩のベースの番だろう。

しかし……。

「ベースはダメ！」

即座に漣先輩が拒絶した。

いつもは冷静なイメージの漣先輩らしからぬ必死な様相で……。

「何で？」

それでも唯先輩は理由が解らないからか、今度は漣先輩にそう聞いてきた。

「ベースは……私」

そして漣先輩は、ポツリポツリと語り始める。

「ベースは私……。ベース以外はやりたくないし……。ベースじゃなきゃ嫌だし……。低くて深い音色とか……。目立たずに皆を支えている感じとか……。皆のパートに合わせてベースのラインを考えるのも好きだし……。決して目立たず……。かといって皆の音に埋もれてしまわないような……。そんなベーシストでありたいって……。いつもそう……。思ってる……。」

「解ってるよー！ だから漣のベースには手を出さないのさー」

いつもより多弁になった漣先輩は、律先輩の返答に、意識が現実に戻ったかのように、急に真っ赤になって俯いた。

「語りすぎた……。」

そう呟いて……。

「妬けますな、田井中殿」

「言っな、言っな」

そんな漣先輩を横目に、唯先輩と律先輩の掛け合いが続く。

けど、漣先輩はベースに対し、そんな信念と誇りを持っている。

俺はベースがどんな楽器なのか、イメージすることしかできないが、確かに漣先輩が言ったような“目立たず皆を支える”楽器なのかもしれない。

「私、漣先輩のベース大好きです！」

「私も。ベースって、漣ちゃんそのものって感じ」

そして梓先輩とムギ先輩は、そんなベースのイメージが、漣先輩と重なるようだった。

昨日は唯先輩と梓先輩を見て、ギターの演奏を、感覚的に捉えている唯先輩と、理論的に捉えている梓先輩の、二人の対比が面白いと思ったが、そうであるが故にこのギタリストは良いコンビなのかもしれない。

そして今日の律先輩と漣先輩……。

律先輩のドラムが大黒柱なら、漣先輩のベースは言わばその土台であり、礎だと言えるのかもしれない。

ふとムギ先輩を見る。

梓先輩と談笑しているムギ先輩を見て、ふと思う。

唯先輩と梓先輩のギタリスト・チームのように……。

律先輩と漣先輩のリズムセクション・チームのように……。

俺とムギ先輩のキーボーディスト・チームもまた、これから良いコンビになっていけるのだろうか……。

（まあ、それはこれからの俺しだいってことかな……）

「ちょいと、この子は固まったまま、いつまでそうしてるんだい？」

まだ固まったまま微動だにしない澁先輩を挟んで、唯先輩と律先輩のミニコントが繰り広げられる。

（楽しそう……か）

そして俺はついさっき、入部届に書いた入部の動機を思い出した。

（あながち間違っではないのかもな……）

ふと、そんなことを考えながら……。

*

「ジャ〜ジャジャ〜ン！」

家に帰るなり、珍しく俺を出迎えた母さんに、上機嫌でリビングへと連れて行かれた。

そこには今日、調整を終えて、完全復活を果たしたキーボードが存在感を醸し出している。

『どう？』とでも言いた気に、満足そうな笑みでそのキーボードを紹介するような手振りをする母さんだが、そもそも外見が変わったわけではないので、そこまでの真新しさは感じない。

しかしやはり、自分のキーボードと正対してみると、抑揚していく気持ちは隠せそうもないみたいだった。

「それとね、もう一つ！ お母さんからタツくんにプレゼントが
りまゝす！」

そう言つて母さんが取り出したのは、キャスター付ハードタイプの
キャリングケース……このキーボードを持ち運びするためのものだ。
よくよく考えてみれば、キーボード一式なんて、ざっと見繕つても
十五キロ前後はあるだろう。

とてもじゃないが、毎日担いで学校を往復するのは無理がある。

故に、このカートは非常に有り難い！

もつともそう考えると、あのキーボードを毎日抱えて登下校するム
ギ先輩の怪力……いや、力持ちっぷりは、やはり相当なものだと言
える。

（とりあえず、ムギ先輩だけは怒らせないように気をつけよう……）
そう決意した。

（……と）

「ありがとう！ 母さん！」

「うん！ 喜んでくれて、お母さんも嬉しいわ。それとキーボード
用のアンプも一緒に買ったから。多分明日の放課後には学校に届く
と思うわ」

(マジで……か?)

『一つじゃねえのかよ』というシッコミは、この際、忘れよう……。

これはまさに、嬉しいサプライズだ。

「そうか……、これで……」

明日、このキーボードを学校に持って行けば、その時からやっと……俺の軽音部としての活動が“本当に”始まるんだな。

「やっと、始動だ……」

その生まれ変わったキーボードを撫でていると、ふと心の声が口から漏れ、「何か言った?」と聞き返された母さんに「何でもないよ」と咄嗟に取り繕った。

でもきつと、今の俺は母さんから見ても、有頂天に浮かれている滑稽な様相に見えることだろう。

「別にいいさ……。楽しそうだから……」

そして今度は、はつきりと口について言葉が出てしまい、思わず目が合った母さんから顔を逸らし、俺は……照れたように笑った。

*

翌朝、昨日届いた、俺の新たな相棒であるキーボードを手に、意気揚々と学校へ向かう。

職員室で部室の鍵を借りようとしたが、既に貸し出し中とのこと、そのまま部室へと向かった。

部室にいたのは、律先輩を除く先輩たちだ。

考えてみれば、先輩たちも楽器を持って帰るため、楽器を置きっ放しで帰る律先輩以外は、毎朝楽器を置くために、部室に来なくてはいけないのだ。

なので今日からは自然と、毎朝顔を合わせることとなる。

「まあ！ 新しいキーボードが来たのね！！」

そう瞳を輝かせたのはムギ先輩だ。

挨拶をしながら部室へ入ると、先輩たちの視線も、自然と俺の手に引かれているキャリングケースに集まった。

「新しいというか……。姉さんのお古なんですけどね」

そう言っ、ケースを開け、キーボードを取り出す。

先輩たちは皆、興味津々だが、中でもムギ先輩の食いつきっぷりが半端じゃないのは、きっと同じキーボーディストだからだろうか？

「CX-3……。オミくん、これってお姉さんが使っていたものなのよね？」

「はい。姉さんが高校時代って言ってたから、今から七年くらい前ですね」

(っっていうか、それにしても興奮し過ぎでは……)

「どうしたんだ？ ムギ……」

澤先輩もムギ先輩の興奮ぶりに疑問を感じたようだ。

「私の使っているキーボードは“TORITON Extreme”っていう機種だけど、それと一番相性が良いのが、オミくんの“CX-3”だと言われているの」

「ええっ！？ そうなんですか？」

「ライブにおいてキーボードが求められる音色は、基本的にピアノ、オルガン、ストリングスの三つなのね。で、“CX-3”は言わばオルガンだから、私のキーボードと組み合わせれば、この三つが揃うことになるの。そもそも“TORITON Extreme”は、パワフルなロー・サウンドとアナログの質感が持ち味んだけど、それには“CX-3”のような、ハモンドオルガンより明るくライトな音が出せるキーボードとの組み合わせがピッタリなの！ それに“CX-3”のサウンドは、ギター・サウンドに埋もれにくいっていう利点があるから、私たちのようなツイン・ギター編成のバンドにもぴったりだと思うわ。それからね……」

それから……朝の一時は、ムギ先輩による“キーボード講座初級編”が始まった。

が……、正直言って、俺は途中から着いて行けてはなかったが……。

(まあ要は、俺のキーボードは、ムギ先輩のキーボードとは相性が

抜群に良いってことだな)

それなら何にしても良かった。

これも姉さんがあのキーボードを残してくれたおかげだ。

まあ、本人はそんなことまで意図していたわけではないんだけど。

(けどもしかしたら、姉さんが高校時代に組んでいたバンドもツイン・キーボードだったのかもしれないな……)

そんなことを考えつつ、教室へと向かった。

今日の放課後にはアンプも送られてくるっていうことだし、いよいよ今日から軽音部として活動ができる。

ただ一つだけ……。

唯先輩が可笑しなことを言っていた。

『お姉さんの形見があって良かったね!』

(形見……? 何でキーボードが形見……?)

*

放課後、部室へと行ってみると、唯先輩が何やら不穏な動きをしていた。

という大袈裟だが、既にセッティングされてあるキーボードやら

ドラムやらを移動させていたのだ。

普段、練習の時には、向かって左から、漑先輩、唯先輩、梓先輩と並び、梓先輩の後ろにムギ先輩、そして一番後ろに律先輩と並ぶ。

だから今後、練習の時、俺のキーボードは漑先輩の後ろに置かれるのだろう。

もともと、DVDで確認したライブでは、ムギ先輩のキーボードは漑先輩の後ろに配置されていたから、その時は俺のキーボードは梓先輩の後ろに配置されることになる。

どちらにせよ、唯先輩と漑先輩がバンドのボーカルである以上、その二人にギターの梓先輩を加えた三人が前衛、そしてキーボードのムギ先輩とドラムの律先輩に新たに俺を加えた三人が後衛という配置が、見た目や音のバランス的にも、一番しっくりとくる。

にもかかわらず、今、唯先輩が一生懸命やっていることは、律先輩のドラムを一番前へと動かす作業だ。

（っていうか、打楽器を一番前って、音を取りにくいんじゃないか？）

周りを見てみると、漑先輩は呆れた顔で、ムギ先輩は心配そうに、そして梓先輩はきょとした表情で、それぞれ事の成り行きを見守っていた。

「ういゝす！」

そこへ律先輩と山中先生が揃ってやって来た。

「って！ 何やってるんだよ！？ 唯！」

（そりゃー、驚くわな……）

「あつ！ りつちゃん！」

律先輩を出迎える唯先輩の表情は満足気なものだったが、当の律先輩は困惑気味に苦笑いを浮かべていた。

しかし唯先輩は、そんな律先輩の表情にはお構いなしに話を進めていく。

「私ね、考えたんだけど、やっぱたまには席替えだよ！ 席替え！」

つまりはセッティングを替えていたのは、どうやら席替え………ということだった。

唯先輩の提案に渋々、皆が配置に着く。

前衛に左から漣先輩、律先輩、唯先輩。

後衛は唯先輩の後ろに梓先輩、その左にムギ先輩と、更に左に俺。

さぞやバランスの悪い配置だろう。

山中先生も少し考えたようだったが、やはり妥協はできないようだった。

結局、皆から反対され、楽器は全て元の配置へ。

それを見て、山中先生も今度は「やっぱり、こうよね」と納得したようだ。

無論、皆も「そうですよね」と言葉も心も同じだった。

「もしかして、りっちゃん寂しい？」

「へっ！？ いや、別に……」

「そうだ！ アイコンタクトを取ろう！」

また唯先輩の奇妙な提案が始まった。

「さあ、皆！ 寂しがっているりっちゃんのために、アイコンタクトを取ってあげるよ！」

そう促され、律先輩をバックに、律先輩から見えて左から、ムギ先輩、梓先輩、唯先輩、澪先輩、俺の順番に並んだ。

「さあ！ 行くよ！ ジャカジャカジャンジャンジャカジャンジャカハイ！ ジャカジャカジャンジャンジャカジャンジャカハイ！」

唯先輩の合図で『ハイ！』のところで、皆一斉に律先輩に向かって振り向いた。

「どう？ りっちゃん！？」

「いや……、気持ちは嬉しいんだけどさ……。私は別にそんな気持ちじゃあ……」

「ダメだよ！ りっちゃん！ りっちゃんの悩みは私たち皆の悩みだよ！」

「いや……、だからさ唯。私は別に悩んでなんか……」

「りっちゃん！ 一人で悩んじゃ嫌だあゝ！！」

「ああゝ！ もう！ と言えば解ってくれるんだよゝ」

唯先輩は必死だが、律先輩は的外れな心配に、困惑すること頻りだった……。

ただ一つだけ確かなことがある。

それは……。

（今日も練習しないのね、たぶん……）

*

翌朝は、楽器を置きに来た唯先輩、ムギ先輩、梓先輩の三人と部室で顔を合わせた。

「ところでオミくん、キーボードのほうはどう？」

梓先輩の問いかけに、しかし俺はあまり良い返事はできなかった。

正直、ピアノにはそこそこ自信もあったし、だからキーボードくらいなら……と、高をくくっていたけど、意外にこれが違っていて驚

いた。

「つまりは勝手が違うんですね……」

「勝手？」

「ええ。ピアノは、いかに表現豊かに演奏するか、今あるものをベ
ースに更にその上を目指せるか。対してキーボードは、新しいアレ
ンジや新しい音を作るにはどうすればいいか、他人とは違う自分ら
しい音は何かを追い求める。そんな違いですかね……」

「何だか難しいな……」

俺の説明を聞いて、梓先輩も頬を掻きながら苦笑いを浮かべるだけ
だ。

確かに、キーボードを弾いている時の、ピアノを弾いている時とは
違う違和感を、言葉で伝えるのは結構難しい。

「それは至高性と創造性の違いじゃないかしら？」

そう助け船を出してくれたのはムギ先輩だった。

「至高性と創造性？」

今度は唯先輩が疑問を口にする。

「ピアノが“ナンバー・ワン”を目指す楽器なら、キーボードは“
オンリー・ワン”を目指す楽器って感じ」

「ああ！ その表現、ぴつたりです！！」

俺が言葉にできなかった気持ちを、ムギ先輩はいとも簡単に言葉に
してしまう。

言わばそれが、キャリアの差……いや、もしかしたら、スキルの差
と言えるのかもしれない。

そして前日よろしく、ムギ先輩の“続・キーボード講座初級編”が
始まった。

やっぱり途中から、俺の頭はキャパを越えたけど……。

ただ解ったことは、その“オンリー・ワン”こそが、キーボードを
演奏する醍醐味なのだったことだった。

*

「やあゝつぱドラムだよなゝつ！！」

その日の放課後、珍しく律先輩はドラムに着き、スティックを握る。
どうやら唯先輩曰くの“輝け！ りっちゃん作戦”は、無事に終了
を迎えたようだった。

俺はワケも解らず、ただ首を傾げるだけだったが、他の先輩たちは
皆一様に笑顔だった。

だが、本当に律先輩の心情の機微を理解しているのは、実は零先輩
だけなのかもしれない。

「だと思った。昨日、キース・ムーンのDVD観たって言うてたから」

「キース・ムーン？」

唯先輩は首を捻るが、どうやら知らないらしい。

「ムギ先輩、キース・ムーンって誰ですか？」

「えっ！？ 確か……、ザ・フーのドラマーじゃなかったかしら？」

「ザ・フー？」

「ザ・フー？」

やはり疑問形で言葉を繰り返すのは俺と唯先輩だ。

「そう！ ザ・フーのドラマー。律の憧れのドラマーなんだ！」

（憧れ……？）

律先輩にも、憧れのドラマーなんて人がいるのだと思うと、少々不思議な感覚を憶える。

以前、『他の楽器は、指先でチマチマしていて嫌だ』と言っていたので、本当にそれがドラムを選んだ理由なのだと思っていたが、実は憧れ、そして目指すドラマーがちゃんとしたのだ。

湊先輩がベースに対して信念と誇りを持っているように、律先輩もまた、ドラムに対して同じ気持ちを持っているのかもしれない。

「あつ！ 私その人、知ってます！ 確か“変人”って呼ばれてた人で、家を爆竹で燃やしたり、自分のドラムを壊したり。そういえば、ザ・フーのボーカルはキース・ムーンのせいで耳が悪くなったとか……」

「ふえ〜！ ボーカルがあ〜？ あずにゃん、怖いよ〜」

「いえ！ 私じゃなくて、キース・ムーンがですよ！」

（梓先輩……、台無し……）

「いや……、私もそこは懂れてないから……」

律先輩も苦笑いだ……。

「でもさ！」

しかし律先輩は言葉を続け、それに従い段々と表情も明るくなっていく。

「私、どんなに目立たなくても、どんなにライトが当たんでも、デコや足しか見えなくても、それでもここで、皆の背中見て、力一杯ドラムを叩くのが……大好きだ！！」

そう言った律先輩の顔は、眩しいくらいキラキラで、そして……輝いていた。

（“輝け！ りっちゃん作戦”か……）

唯先輩のつけたネーミングも、あながち間違いではなかったのかも
しれない。

「うん！ ドラムは、やっぱりりっちゃんだよ！」

その唯先輩もまた、最高の笑顔でそれに答える。

「演奏する時、後ろを振り向くと、りっちゃんが明るい声で元気に
スティック鳴らして合図してくれるでしょ。それを聞いたら『や
るぞおっ！』って気持ちになるんだあ」

演奏を始める時、大概はドラマーが合図を送る。

つまりは、ドラム担当である律先輩の合図によって、演奏が始まる
のだ。

（このメンバーにとって、律先輩は最高のドラマーってことなんだ
ろうな）

「それとね、私、りっちゃんのおかげで解ったことがあるんだ！」

（解ったこと？）

「同じバンドでも、皆それぞれ見ている景色も、考えてることも違
うって！ けどね、それでも皆で演奏すると……」

「一つになるんだよな！！」

唯先輩の言葉に、律先輩が続く。

そして律先輩の言葉に、皆の笑顔が明るくなった。

「あつ！ それとね……」

その後、おずおずとムギ先輩が手を挙げた。

「私も、新しい曲ができました」

つまりは作曲をした……と。

（何気に凄いことする人だな……）

「あの時、りっちゃんが私のキーボードをたくさん喋らせてくれたから」

「あの時ので!？」

「あの時ので!？」

思わず驚嘆の声を上げると、思いつきり湊先輩と被ってしまった。

「とにかく早く聞かせてくれよ!」

律先輩がそう急かす。

「私も早く、聞きたい！ 聞きた〜い!」

唯先輩のテンションも上がる。

「私も聞きたいです!」

そして梓先輩もまた、嬉しそうだ。

ムギ先輩はにこりと笑い、自分のキーボードに着くと、ハミングをしながら、自作の曲を弾いた。

（すげえ……）

正直、律先輩の“イントロ・ドン！”のメロディーからどんな曲が生まれたのかと思ったら、意外に……いや、これはかなり良い曲だ。

「これ、ムギちゃんの弾き語りにしたらどうかな？」

唯先輩のその提案に、律先輩も、澪先輩も、梓先輩も、顔を見合わせ、そして微笑む。

ムギ先輩の弾き語り……。

（俺は今、凄い瞬間に立ち会っているのかもしれない……）

大袈裟なようだが、本気でそんなことを考えた。

「じゃあ、澪！ 歌詞頼むな」

（そっか……。作詞は澪先輩の担当だったっけ……）

この曲に、どんな歌詞が乗るのか。

それをどんなふうアレンジするのか。

（楽しみになってきた）

今は、そんな気持ちだ。

*

長椅子に座って、漑先輩が歌詞を考える。

その隣では、ムギ先輩も一緒に考えていた。

俺たちは、いつものテーブルに座り、先程ムギ先輩が淹れてくれた紅茶を飲む。

今日のおやつはラスク。

蜂蜜を塗って食べると尚、美味しい。

歌詞を考える漑先輩に、ムギ先輩は『タイトルだけは考えてあるの』と告げた。

そのタイトルは……。

（やっぱり“お茶”なんだな……）

それもまた、ムギ先輩らしい……いや、軽音部らしい。

「オミくんも、キーボードは大切に使わないとね!」

俺の隣では唯先輩が、ラスクをかじりながらそう言ってきた。

「はあ……、まあ……」

「お姉さんの形見だもんね！」

「こら！ 唯！ 少しは気を遣えって！」

「そうですよ、唯先輩！ そういうことは……」

「ちょっと待ってくださいよ！」

この前からの唯先輩の発言の違和感が何となく察してきた。

「もしかして……、皆の中では俺の姉さん、死んだことになってます？」

「えっ！？」

「えっ！？」

「えっ！？」

（やっぱりそうか……）

「だってオミくん、『四年前にいなくなった』って」

会話が噛み合わないのか、三人の表情がきょとんとしている。

「えっと……。俺の姉さんは生きてますよ……」

「えっ！？」

「えっ！？」

「えっ！？」

再び、声を合わせて驚く三人。

「姉さんは四年前に結婚して、それで家を出て行っただですよ。で、姉さんの旦那さんって人が、もともと納豆菌の研究をしていた人で、アフリカの食糧難の地域に納豆を普及させるために、NGO所属の研究員としてアフリカに行ってるんです。それで姉さんも着いて行っただんですが、向こうに行ったら十年は帰ってこれないってことで……」

と、話してみたが、三人は既に着いて来れてはいないみたいだった。

（ムギ先輩の“キーボード講座”の時、俺もこんな感じだったのかな……？）

「とっ、とにかく！ 姉さんは生きてますから！ 元気いっぱいですから！ 五体満足ですから！」

そう断言すると、三人の顔は、やっと胸を撫で下ろしたような表情に変わった。

「ま……、まあ、ラスク食べようぜ！ ラスク！」

律先輩の一言で、再びティータイムが始まる。

「ラスクに蜂蜜を塗ると美味しいね」

唯先輩は嬉しそうに、そう言う。

「何でも組み合わせっちゃうか、コンビネーションっちゃうか、そういうのが大切なんだよな！」

それが深い意味を持たせての発言であってほしい……と、願うようなことを、律先輩が言う。

……。だけど……。

（いや……、マジで……、うめえな……）

ラスクを取る手が止まらない。

「あつ！ 唯先輩、口の周りが蜂蜜だらけですよ」

見ると、唯先輩は口の周りを蜂蜜でベタベタにしている。

「へへへ。オミくん、拭いてえ」

唯先輩はそう言って、俺に口元を近づける。

「なっ！？」

（っていうか、照れんじゃなか……）

「もう！ 唯先輩！ オミくんが困ってるじゃないですかー！！」

結局、梓先輩がハンカチを取り出し、唯先輩の口元を拭き始めた。

「これはこれで良いコンビかもな」

律先輩が、そう小さく呟いたのが聞こえ、思わず律先輩を見返した。

律先輩は、俺の視線に気づくと、「だろ？」とでも言いた気な笑みで気持ちを返す。

だけど、そんな律先輩を見て、俺は……、

（律先輩と漣先輩も、なかなか良いコンビですよ）

そんな気持ちを込めて、小さく笑った。

そして……。

「んん〜！ ちょっと休憩しようか〜」

背伸びをしながら、そう漣先輩に声をかけるムギ先輩に目をやった。

唯先輩と梓先輩のように、律先輩と漣先輩のように、俺もムギ先輩と……そんなコンビになれるだろうか。

（あっ！）

つい視線を外すのを忘れ、ムギ先輩と目が合った。

ムギ先輩は優しく微笑む。

その笑みは、まるで『大丈夫だよ』とでも言ってるみたいで、とても……暖かった。

*

「ところで律先輩。今日、山中先生は……？」

「オミ、今日はそっとしておいてやってくね……」

「はあ……」

#3 その先の彼方

「失礼しました……」

そう言うと、軽く頭を下げ、俺は職員室を後にする。

そしてその足で、そのまま部室へと向かった。

軽音部に入部して一ヶ月が経とうとする今日……。

俺は先輩たちに、ある重大なことを告げなくてはならない……そんな状況に陥ってしまった。

職員室に寄つて来たため、既に部室では先輩たちによるティータイムが行われている。

相変わらず、練習よりもお茶とお菓子、そしてお喋りを優先するその光景は、もはや見慣れたものと化していた。

『やる時はやるんだよね』

いつか先輩たちのことを評して、梓先輩がそう言っていた。

一年も一緒にいる人の言葉なので、そこは信じることにしたのだが、やはり不安がないわけではない。

とはいえ、そう言うものの、このメンバーの中で演奏に一番不安があるのは、実は俺自身であるということも、客観的に自覚しているつもりだ。

故に、たとえ部活で練習できなくても、家では毎日、自主練は欠かさない。

もつとも梓先輩の言ったことが本当に真実なら、きつと自主練なんてそんなこと、先輩たちは当たり前のようにやっているのだろう。

そう考えると、自然と自主練にも力が入る。

先輩たちとの技量の差……それこそが練習への一番のモチベーションに繋がるものだから。

しかし今回は、結果的にそのモチベーションが裏目に出てしまった。

いや、少なからず……というか、大いに予想はしていたが、高校生ともなると『やっちゃった！ てへっ』なんて笑ってすましてくれるほど、世間は甘くはなかったのだ。

*

「というわけで、俺は今日から暫くの間、軽音部を休部します」

部室に入ると、挨拶もそこそこに先輩たちにそう告げた。

「ふえっ！？ ななななな何でえっ？」

フォークにケーキが刺さったまま、唯先輩が叫んだ。

「あっ！ ゆっ、唯先輩がお茶ばかり飲んで練習しないからですよ」

梓先輩が慌てて唯先輩を咎める。

「ええ〜！？ それなら皆だつて〜」

確かに今、唯先輩を咎めた梓先輩の右手にも、ティーカップが握られている。

しかも猫の柄が描かれたピンクの可愛いティーカップだ。

ちなみにそれは梓先輩専用のカップであり、自分専用のカップを持っているのは梓先輩だけだ。

「もしかして私の持つてくるお菓子が口に合わなかったから!？」

そう口走るムギ先輩の表情が一気に青冷めていく。

(つていうか、軽音部休部の理由にお菓子つて……)

俺はムギ先輩の中で、どれだけ食いしん坊キャラなんだろう。

「とにかくオミ、理由を聞かせてくれないか？ 私たちに原因があるなら直していくから」

至極、まともな反応を返してきたのは澪先輩だった。

しかし原因なんて……。

「先輩たちに原因なんてないですよ」

「じゃあ何なんだよ！」

律先輩の語気も強まる。

五人が固唾を飲んで俺を見つめる。

そんな先輩たちに、俺は一枚の紙切れを提示した。

A4サイズのその紙の、右上に赤いインクで書かれてある数字に、先輩たちの視線は注がれ、そして……嘆息した。

「つまりは……、オミは今回の中間試験で数学が赤点だった……と？」

律先輩は呆れた口調でそう確認してくる。

その赤いインクで書かれた数字は“12”。

桜高では、試験で三十点に満たない点数は赤点と呼ばれ、追試験を受けなくてはならない決まりだった。

「まあ、端的に言えば……」

そして俺は、そう一言だけ律先輩に返した。

「あつ、そうか！ 校則では追試に合格するまでは部活動禁止だもんね」

何かを思い出したように唯先輩が呟いた。

「唯先輩、詳しいですね」

それを聞いた梓先輩の言葉に、しかし唯先輩は急に慌てふためく。

「えっ！　べべべ別に詳しくなんかはないよ！」

「ああ、懐かしいな。そう言えば唯も一年の時に……」

「みみみみ澪ちゃん！　ストロップ！　ストロップ！」

唯先輩はまるで、澪先輩の口を塞ごうとする勢いだ。

「しっかし意外だな」

「えっ！？　律先輩、何がですか？」

「いやゝさゝ、オミは勉強とか得意な人かと思ってたからさゝ。まさか赤点とはな」

「数学は苦手なんですよ。分数の割り算で躓いて以来、ずっと……」

「分数の割り算でって……。それ小学校じゃん！　しかも数学じゃなくて算数じゃん！」

「けど、分数なのに分母と分子をひっくり返すとか、しかも割り算なのにそれを掛けるとか、何かおかしいでしょ！？」

きつとこれは、いたいけな子供たちを騙そうとする文科省の陰謀だ……などと付け加えた頃には、律先輩だけでなく、他の四人からも冷やかな視線を送られていた。

「なあ、他の教科は大丈夫だったんだよね？」

漣先輩が心配そうに、そう聞いてくる。

「当たり前です。俺、こう見えても数学以外では赤点取ったことないんですから！」

漣先輩の心配を払拭しようと、他の答案用紙も並べて見せた。

その行動が、漣先輩の心配を払拭するどころか、他の先輩たちにまで伝染する結果となったのは、果たしてどの答案も赤いインクで書かれてある数字の十の位が“3”だからなのだろうか？

「なあ……、オミ……。これって全部、赤点ギリギリなんじゃあ……」

「何言ってるんですか、律先輩！ “赤点”と“赤点ギリギリ”の間には、深くて広い溝と、高くて厚い壁が立ちはだかっているんですよー！！」

そう力説してみたものの、皆の呆れたような苦笑いは収まることはなかった……。

「よし！ こうなったら特訓だ！」

暫しの間の後、律先輩が勢いよく立ち上がると、そう宣言した。

「このままオミが休部となると、それは私たち軽音部の活動にも支障を来すからな！」

「うん！ そうだね、りっちゃん！！ 私たちでオミくん勉強を教えてあげよう！」

（軽音部の活動に支障を来しているのは、俺の休部より習慣化されたティータイムのほうなんじゃあ……？）

しかしそこはあえて、口にはしなかった。

まあ、唯先輩に勉強を教わることができるのかどうかは、逆に心配だが……。

*

「で……、何で俺の家に行くんですか……？」

その後の律先輩の提案で、急遽決まった“オミくん休部脱出大作戦（唯先輩命名）”を、俺の家ですることが決定した。

俺としては部室で十分だと思ったが、律先輩の提案に唯先輩も賛同し、更に『いきなり押しかけては迷惑だ』と言う零先輩の発言に梓先輩が賛同したものの、最終的にはムギ先輩の『面白そうね』という天真爛漫な笑顔で、律先輩の提案は可決されてしまった。

ちなみに、そこに俺の投票権は初めから存在すらしていなかったが……。

ただ、もともと俺は『家から近い』という理由から桜高を受験しただけあって、学校から家までは比較的近い。

軽音部のメンバーの中では、たぶん一番近いかもしれない場所なので、学校帰りに寄って行くにしても、皆の帰宅経路には然程の支障も与えないだろう。

しかも俺の母さんは、自他共に認める“もてなし好き”であり“世話好き”なので、突然大人数で押しかけたとしても迷惑がるところか、逆に嬉々として張り切ることだろう。

故に澪先輩の主張は、実は我が家では杞憂以外の何物でもないと言える。

なんてことをつらつらと考えているうちに、我が家へと到着した。

俺を先頭に、五人が興味津々といった表情で着いて来る。

「ただいま」

玄関を開け、靴を脱ぐ。

「孝臣いゝ！ おかえり」

その声に、思わず反応するように咄嗟に顔を上げる。

いつも返ってくる母さんの声とは明らかに違う。

しかし決して聞き覚えのない声ではなく、懐かしく、そして焦がれた声だった。

視線の先に映ったその人は、紛れもなく……。

「姉さん！」

体より先に気持ちの前へと進む。

それはきつと、こんな感じなのだろうと、どこか冷静に考えている自分がある。

いや、客観的に冷静であろうと意識しなければ、俺は我を忘れ、取り乱していたに違いない。

それはまるで、飼い主を見つけて、大仰に尻尾を振る飼い犬のように……。

靴を脱ぐことさえもどかしく感じ、文字どおり脱ぎ捨てる。

そして姉さんの元へと駆け寄った。

「どうして！？ 何で！？ 後六年は帰って来ないって！？ なのにどうして！？ いつまでいるの！？ 当分はいるんだよね！？ ずっといるんだよね！？」

姉さんの手を両手で握り、一気に捲し立てた。

もはや既に『客観的に冷静に……』なんていう意識は欠片も残ってはいなかった。

「ちょっと！ ちょっと！ 孝臣ってば！ そんなにいつぺんに聞かれても答えられないよ。それに、あっちはいいの？」

そう言った姉さんの指す指の先には、俺たち姉弟の感動の再会を、

呆然と見つめる先輩たちの姿があった。

「ああ、すみません。紹介します。この人は俺の……」

「どうも、初めまして！ 孝臣の姉の瞳子です！！」

俺が紹介をしようとした後を引き継ぐように、姉さんはそう自己紹介をした。

「ああ、姉さん。こちらの人たちは……」

「なあ、孝臣……」

今度は姉さんに先輩たちを……と、思った矢先、しかし姉さんは俺の肩を抱き、耳打ちしてきた。

「な……、何？」

「おまえももう高校生だ。私の知っている泣き虫で甘えん坊だった頃のおまえじゃない。言わば今のおまえは、大人の階段を一步、また一步と昇っている途中の……そう、まさに“男の子”から“男性”になるうとしている時期だ」

どうも姉さんの言い回しがまどろっこしく、その真意を掴みかねる。

「つまり、今のおまえが女性に対して興味や好奇心を抱いたとしても、それは自然なことだし、私だっておまえの恋愛を応援したい気持ちはある。だけどな……」

何だか雲行きが怪しくなってきたような気がする。

「一度に五股をかけるならかけるで、せめてデートは一人ずつとするのが礼儀ってもんだぞ！ 複数の女性と付き合うなら、相手の女性には他の女性の存在を気づかせない。それが男の優しさであり、そういう相手に対する配慮が恋愛には不可欠なんだ」

（この姉は……）

だいたい耳打ちするならするで、せめて俺にしか聞こえない声で喋るべきなのに、姉さんの声は先輩たちをドン引きさせるのには十分な大きさだった。

（他にもツツコミたいところは満載なんだが……）

先ず訂正すべきことは、間違いなくこれだろう。

「あのさ、姉さん。こちらの人たちは、俺の部活の先輩たちだよ」

「先輩……？」

「そう！ 俺、高校では軽音部に入ってるんだ。で、その先輩たち」

俺がそう紹介すると、先輩たちも一人ずつ自己紹介を始めた。

「桜高三年、田井中律！ 軽音部の部長でドラムやってます！」

「同じく三年の秋山澪です。ベースしてます」

「二年の中野梓です。ギターしてます」

「あつ！ 三年の平沢唯です！ 私もあずにゃんと同じくギターです！」

「ちょっ！ 唯先輩、こんなところで、あずにゃんって言わないでくださいよ」

「三年でキーボードの琴吹紬です」

「で、俺も一応、キーボード担当なんだ」

先輩たちが声を揃えて「よろしくお願いします」と言った後、ついだという感じでそう付け加えた。

「あれ！？ そういえば、桜高って桜が丘だよね？ あそこは確か女子高じゃあ……？」

「いや、それは去年までで、今年から共学になったんだよ。だから俺は男子生徒の一期生なんだ」

またいらぬ誤解を与えまいと、即座に答える。

「そっかー！ いくら女性に興味あるからって、女子高に入って『女の中に男は自分だけ』なんていう選り取り見取りなハーレム状態を期待していたわけではないんだね」

（姉さん……）

我が姉ながら、発想が中学生の時の同級生たちと同じだったことが悲しい……。

もっとも『女の中に男は自分だけ』という状態は、あながち間違っ
てはいないのだが……。

（それは黙っておこう……）

「けど、お姉さんは確かアフリカに行つて、十年間は帰つて来な
いはずじゃあ……？」

そういえば、姉さんのことを先輩たちに話していたと、梓先輩の疑
問を聞いて思い出した。

「あら、嬉しい！　もしかして孝臣つてば、学校でも私のことを話
してるのかな？」

そう言つて俺を見る姉さんの視線が……ちょっとイラッとする。

「あはははは……。冗談よ！　冗談！　孝臣つてば、期待どおりの
反応なんだもん。相変わらずあんたをからかうのは楽しいわ！」

そんな俺を見て、姉さんは大笑いだ。

「な……、なあ……、オミ……」

律先輩が口元に手を当てて、いかにも内緒話でもするかのように俺
を呼んだ。

「何かさ、おまえの話から想像していたお姉さんのキャラと実際の
キャラの間に、激しくギャップを感じるんだが……」

確かに律先輩の言うことも、もつともなことだろう。

当の俺ですら、今の姉さんを見て『そういえば、姉さんはこんな人だったな』と思い出したくらいなのだから……。

「律先輩。その答えを端的に言うなら、つまり『想い出は美化される』ということです」

「ああ……」

「ああ……」

「ああ……」

「ああ……」

俺の答えに、律先輩以外の四人も嘆息した。

「で、姉さん！ 本当にどうしたの？ 確か後六年はアフリカにいるはずじゃあ？」

「実はね〜」

そして姉さんは、ニヤニヤと笑いながら、お腹を擦り、そして……

「できたんだよ！ 赤ちゃんが！！」

「ええっ！」

つまりは妊娠したため、安定期に入るのを待つて帰国したということだった。

アフリカで出産して育児をするのは、やはり日本人には難しく、ま

たどのみち日本に帰ってくるのが解っているなら一足早く帰国し、日本で出産・育児をしながら旦那の帰りを待つことにしたのだという。

その旦那も、当初の十年という期間から、二年程早く帰って来れそうだったのも、帰国を決めた要因だったことだった。

そうなれば後四年で旦那も帰国することとなるため、それまでは実家である我が家で暮らすことにしたのだという。

（そっか……。今日からまた、姉さんと暮らせるんだな……）

「オミくん、何だか嬉しそうだね」

「なっ！」

唯先輩の発言に、途端に他の先輩たちもニヤニヤとし始めた。

「で、その先輩たちが、今日はまた何でお揃いで？」

「俺が数学で赤点取って追試を受けるっていうんで、勉強を教えてくれることになったんだよ」

「ふん。まあ、あんたは子供の頃からバカだったしな」

「なっ！ 自分の弟を捕まえてバカって言うな！」

「はいはい」

しかし空返事をする姉さんも、どこか楽しそうだ。

とにかく、これ以上はろくな展開になりそうもない。

「ささ、早く俺の部屋に行きましょう……」

そう言つて、先輩たちを促し、階段を昇る。

「あつ、そうだ！ 孝臣！」

階段を昇りきる手前まで来たところで、階下から呼び止められた。

「何？」

「今晚、何を食べたい？ 孝臣の好きなもの作ってあげるよ」

（俺の好きなもの……）

「じゃ……、じゃあ……、クリームコロッケ！」

「OK！ 任せといて！ 先輩諸君も食べて行つてね！」

そう言つと姉さんは、右手の親指と人差し指で“OK”の形を作り、ニヤリと笑つた。

*

「それじゃあ先ず、試験範囲はどこなんだ？」

部屋の真ん中に置かれたテーブルを囲むように、零先輩とムギ先輩、そして梓先輩が、俺の両隣と真つ正面に座る。

唯先輩と律先輩は、何やら部屋の中を物色し始めたが、今は放置しておくことにする。

「えっと……、範囲はここから……」

「オミくん、そこ目次」

「いや、ここじゃなくて、こっちのページから……」

ムギ先輩に指摘されるも、教科書を開いただけで、既に拒絶反応を起こしていくのが解る。

「まず“(x7+)(x-1)≡9”の左辺を展開すると“x2+6x-7≡9”となる」

「この漫画、前から読みたかったんだよね」

「次に右辺を左辺に移項して“x2+6x-7-9≡0”だから“x2+6x-16≡0”となる」

「何かオミくんのDVDってバスケばかりだね」

「で、足して“6”で掛けて“-16”となる組み合わせは“8”と“-2”だから“(x+8)(x-2)≡0”とくくれるだろ」

「おっ！ このゲームって出たばかりじゃね？」

「掛けて“0”になるってことは、どちらかが“0”だから、“x≡-8”か“x≡2”ということになるんだ」

「オミくんの中学の卒アル見つけ〜！」

「……、解ったかな……？」

「すみません……、漣先輩……。気が散って、全く……」

「卒アルだつてえ〜！ 私も見たいい〜っ！」

「だあ〜っ！ おまえら〜、静かにしろ〜！」

漣先輩の講義の後ろで、トレジャー・ハンターのように部屋中を漁る唯先輩と律先輩に、遂に漣先輩の雷が落ち、そして律先輩の頭には本当に雷が落ちた。

頭に大きなたんこぶを作り、「何で私だけ……？」と涙目の律先輩の隣では、唯先輩が「うわあ〜」という声を上げながら、そのたんこぶをつついている。

「あつ、そうだ！」

そこにムギ先輩が両手を叩き、さも名案を思いついたかの如く提案してきた。

「ねえ、唯ちゃん、りっちゃん。せっかくだから下に降りて、お姉さんたちのお手伝いをしない？」

まあ、要は……

（体の良い厄介払いか……）

「おっ！ ムギ！ それは名案だね」

だが、意外にも律先輩はその提案に食いついてきた。

「おっ！ りっちゃん、やる気だね。それなら私も本気を見せちゃうぞぉー！！」

そして唯先輩までも……。

「そういえば、私たちの食事も用意してくれるって言ってましたし、私たちもお手伝いしたほうがいいですね。それにオミくんの勉強なら、澪先輩がいれば大丈夫だし」

きつと梓先輩は本当に気を遣ってそう言ってくれたのだろう。

結局、ムギ先輩の提案が通り、俺の部屋に俺と澪先輩を残し、四人は階下へと降りて行った。

「ごめんな、オミ。ギャラリーが騒がしくって……」

それは唯先輩と律先輩のことなのだろう。

「まあ、元と言えば、俺が赤点を取ったことがそもそもの原因ですから……」

一応、そうフォローを入れておく。

「そうだな。赤点で休部だなんて、こんなことは、これっきりにしてくれよ！」

「はは……、善処……、します……、たぶん……」

だが断言は避けた……。

それからひたすら勉強に集中した。

いや、漣先輩と二人っきりのマンツーマンだし、集中せざるを得ない雰囲気だったということもあり……。

ここまでしてもらって、気を散らすわけにはいかなかった。

ただ、漣先輩の教え方はすこぶる解り易く、少なくともこの一ヶ月間の数学に関して言えば、『なぜこの程度が解らなかったのか』と不思議に思えるくらいだった。

最初の頃こそ、『早く時間が進まないものか』と、時計ばかり見ていたが、気づくと時計を見ることすら忘れるほど勉強に集中しており、時間の流れすら最早気にはなくなっていた。

だからドアを叩くノックの音で、初めて夕食の時間になったことを知ったのだが、それはどうやら漣先輩も同じなようだった。

とはいっても、実際に進んだのは僅か数ページだったが……。

「漣ちゃん、オミくん。ご飯の準備ができたよ」

入ってきたのはムギ先輩だった。

そのムギ先輩の報せを合図に、今日の勉強会は一先ず終了となる。

「オミ、どうかな？少しは解りそう？」

階段を降りながら、漣先輩が心配そうにそう聞いてくる。

「いや……、正直な話、漣先輩の教え方、すげえ解り易いですよ！俺、漣先輩が先生だったら、絶対に赤点なんて取らないのに」

そんな言葉がつらつらと口をついて出てきたが、それはお世辞ではなく本心からだった。

「まあ、そうは言っても、まだ試験範囲の半分もいつてないんだけどな……」

「けど、この調子なら試験範囲くらいクリアーできそうな気がしてきました！」

「だったらせめて、“絶対に赤点なんて取らない”じゃなくて、“絶対に百点を取ってみせる”くらいの意気込みは口にしてほしいけどな」

そう言つて、漣先輩は悪戯っ子のように「ふふふ」と笑う。

漣先輩のそんな笑顔を見るのは、もしかしたら初めてかもしれない。そんなことを考えると、無意識に顔が熱くなるのを抑えられなかった。

「ま……、まあ……、それはこれからしだいってことで。だから、これからも宜しくお願いします！ 漣先輩！」

「えっ！ こっ、これからもって!？」

「これから追試まで、毎日教えてくれるんでしょ？ それだけの日数に澪先輩が合わされば、追試なんて余裕ですよね！」

自分でもわざとらしいと感じながらも、意識的にそう意気込む。

澪先輩は「ふう〜」と溜め息を一つ吐き、「やれやれ」といった表情を浮かべながら、それでも……、

「じゃあ、明日からはもっと厳しくいくからな！」

そう言っただけ、悪戯っ子のように笑った……。

*

「この子が孝臣が好きだった横田千鶴ちゃん。でもこの千鶴ちゃんは、孝臣の親友の木崎知弘くん……、あっ、木崎くんはこの子ね、この木崎くんのことが好きで、孝臣に木崎くんとの仲を取り持つてほしいって相談してきたの」

(……………?)

「結局、孝臣は自分の気持ちは封印して、千鶴ちゃんと木崎くんの仲をくつつけたのね。それで二人は付き合うことになったんだけどさ……」

(……………?)

「実はこの千鶴ちゃんの親友の清水春美ちゃん……、あつ、この子ね、春美ちゃんは。この春美ちゃんが孝臣のことを好きだったわけ」

(……………?)

「で、今度は千鶴ちゃんが、この春美ちゃんと孝臣をくつつけようと仲を取り持ち始めたの」

(……………?)

「けど孝臣は、千鶴ちゃんへの気持ちを断ち切れなくて、春美ちゃんをフツたわけ」

(……………?)

「けどさ、千鶴ちゃんにフツた理由を問い詰められても、答えることなんてできないじゃん！」

(……………?)

「それで結局、孝臣は千鶴ちゃんに……」

「姉さん!!」

リビングのドアを開けようとしたところで、何やら姉さんの声が聞こえ、暫く聞いていたが、どうやらその話題は俺に関するところでもない話のようだった。

ドアを開け、姉さんに詰め寄ってみると、姉さんの他に唯先輩、律先輩、梓先輩が頭をつつき合わせており、その中心には俺の小学校

の卒業アルバムがあった。

どうやら俺が勉強に勤しんでいたまさにその時間、唯先輩が俺の部屋で見つけた中学の時の卒業アルバムを話の発端とし、小学校の時の卒業アルバムを探しだし、その想い出話……いや、暴露話に興じていたということらしい。

「何で姉さんは、そう口が軽いんだよ！」

「その口の軽い私に、自分の恋心を泣いて相談してきたのは、いったいどこの誰だよ」

「うっ！」

思わず言葉に詰まる。

「あっ！　そういえば子供の頃のおミくんって、どんな子だったんですか？」

こういうことに興味津々なのは、意外にもいつもムギ先輩だ……。

「さつきは『泣き虫で甘えん坊』って言うてましたよね？」

そして梓先輩は、余計なことを思い出す……。

「うーん……。まあ、一言で言うと『外弁慶の内地蔵』ってやつかな」

「『内弁慶の外地蔵』じゃなくて？」

澪先輩も話題に乗ってきてしまった……。

「そう！ 『外弁慶の内地蔵』だね。友達の中ではガキ大将みたいなタイプでさ。自分の友達が苛められてたりすると、相手がどんなに年上だろうと向かっていくような無茶なところがあつてね。一度なんか、小学生のくせに、友達をカツアゲした高校生三人を相手に一人で向かっていったこともあつたっけ」

「それでどうなつたんですか？」

遂には、唯先輩の目が輝きだした……。

「まあ、それで高校生たちをやつつけてれば漫画の主人公みたいに武勇伝の一つにでも挙げられたんだけどね……。当然、ボッコボコにされて帰って来たよ」

そう言つて笑いながら、姉さんは俺の肩を叩いた。

「けど……、外ではそんな無茶で無謀な無鉄砲だけど、家では私の後ろをいつも着いて回るほどの甘えん坊でさ。あの時だつて『悔しい』って泣いて、私の胸にすがりついたもんさ」

「姉さん！ もういいよ！！」

これ以上の暴露は、俺の沽券に関わる……。

まあ、沽券なんて最初からないけどさ……。

「オミ、男だね」

律先輩に言われると、なぜだかバカにされた気持ちになる。

「けど、何だか才ミらしいよな！」

澪先輩の中の“俺らしさ”って何なんだろう……？

「とっ、とにかく！ もうその話はいいですから、ご飯にしまし
う！ ご飯に！」

無理矢理に会話を終わらせ、食卓に着くと、テーブルの上には俺が
リクエストしたクリームコロッケが大皿二つにてんこ盛りにあり、
他にも母さんの自慢の手料理の数々が所狭しと並べられていた。

「さあさあ！ せっかくのご馳走なんだから、熱いうちに食べちゃ
いましょう！」

そう言って、半ば強引に皆を席に着かせる。

「それじゃあ、いただきます！」

そして両手を合わせ、待望のクリームコロッケに箸をつけた。

しかし……。

(……………？)

「ん？ どうした？ 孝臣」

「このクリームコロッケって、姉さんが作ったの？」

「えっ？ 何で？」

「うん……、何か姉さんのクリームコロッケの味とは少し違うような……」

「あっ！」

そこまで疑問を口にしたところで、梓先輩が声を上げた。

「そっちのお皿のほうは、私が作ったクリームコロッケだ！」

「あっ、どうりで……」

（つて……、えっ！？）

急に梓先輩の顔が曇り始めた。

「あっ、も……、もしかして美味しくなかったかな……？ わ……、私……、クリームコロッケはあんまり家でも作らないから……、だから……」

「いやっ！ 美味しいです！ 美味しいですよ！」

そう慌ててフォローをするが、梓先輩の表情は曇ったままだった。

もちろん俺は『姉さんの作るクリームコロッケとは味が違う』と言いたかったわけで、だからと言って梓先輩の作ったクリームコロッケも美味しいことに変わりはないのだが……。

律先輩が、唯先輩が、ムギ先輩が、そして澪先輩が、それぞれ梓先

輩と姉さんのクリームコロッケを食べ比べ始めた。

そして四人は、顔を見合わせる。

「正直、こう食べ比べてみても、私にはお姉さんのクリームコロッケと梓のクリームコロッケの、味の違いが解らないんだけどな……」

「うん！ 私もりっちゃんと同じだよ。二つとも凄く美味しいし！」

「そもそもレシピは同じなんだから、作る人が違っててもあまり変わらないはずだし……」

「私もそう思うな……。梓のクリームコロッケも、お姉さんのクリームコロッケと同じくらい美味しいよ」

つまりは、四人には解らない程、二つのクリームコロッケの味の差はないということらしい。

「すみません、梓先輩……。俺が変なことを言っただけに……」

「あつ、そんなこと……。オミくんは何も……」

「梓ちゃん！」

その梓先輩の言葉を遮って、姉さんが言葉を挟んできた。

「それじゃあ、私のクリームコロッケと梓ちゃんのクリームコロッケの、味の違いを教えてあげようか？」

「味の違い……？」

「そう！ 味の違い！」

「何なんだよ、姉さん？」

「ふっふん！」

そしてなぜか、姉さんは得意顔になる。

「いい、梓ちゃん！ さつきムギちゃんが『あまり変わらない』って言ったけど、実は“あまり変わらない”というのは“同じ”というわけではないの。“あまり変わらない”というのは“殆ど同じ”という意味。つまりは“少し違う”ってことね」

「少し違う……？」

姉さんの言葉に釣られるかのように、梓先輩が復唱する。

「じゃあ、その“少し”って何なんだよ？」

姉さんの、わざと焦らしているかのような言い回しに、俺はその先を急がせた。

「その“少し”の差っていうのはね、それは“想い出”だよ！」

「想い出……？」

「そう！ たとえ全く同じ物のように見えても、想い出があるかないかで、愛着の度合いって変わるものでしょ？」

「あっ！」

姉さんの言葉に、梓先輩は何か気づいたかのような声を上げた。

しかし他の四人は未だ要領を得ない表情をしている。

「ねえ、あずにゃん。どういうこと？」

「ああ……、そうですね……。たとえば唯先輩の場合、同じレスポ
ールでも、ギー太とそれ以外のギターでは、見た目が同じでも愛着
の度合いが違うってことですかね……」

「ギー太以外のギターは嫌だよぉ」

梓先輩の説明に、唯先輩も理解したのか、しかし悲痛な叫びを上げた。

「つまり、俺にとっては姉さんのクリームコロッケには想い出がある
分だけ美味しく感じる……ってこと？」

（何だか、こじつけみたいじゃね？）

「まあ、そういうことだね。だからさ、梓ちゃん！ これからも
孝臣と、楽しい想い出をたくさん作ってあげてよ、ね！」

「ちょっ！ 姉さん！」

予想外の姉さんの発言に慌てて口を塞ごうとしたが、しかし当の梓
先輩は腫れ物が引いたかのような、すっきりとした笑顔で「はい！」
と返事をした。

「あつ！　もちろん、他の先輩諸君も、うちの孝臣をよろしくね！」
姉さんがそう言つと、先輩たちも皆、一様に笑顔でお互い顔を合わせ合つた。

*

夕食が終わると、春先とはいえ既に日も暮れていた。

さすがに女の子だけで家路に着くのは危ないからと、姉さんからの言いつけで、先輩たちを送つて行くことになった。

とはいえ、五人共……というわけにはいかないのです、律先輩と澪先輩は分かれ道まで、ムギ先輩は駅まで、そして唯先輩の家を経由して、梓先輩の家まで、という経路で送つて行くことになった。

もつとも、もともと先輩たちからは遠慮されていたし、特に澪先輩は『送つて行く時間があるなら今日の復習でも』という気持ちだったらしく、しかし結局最後は姉さんの得意な、強引な押しの一手によつて、受け入れざるを得ない状況となった。

『その代わり、寝る前までには今日の復習をやっておけよ！』

逆に俺は、澪先輩からそう言いつけられる始末ではあつたが……。

「いっやゝ、けど、オミのお姉さんって面白い人だったなゝ」

と言う律先輩に「律先輩とは似た者同士かもしれないねゝ」と返し、

「ちゃんと今日の復習をやるんだぞ！」

と、澪先輩からは本日何度目かの念押しをされ、

「明日も美味しいおやつを持って来るから、頑張りましょうね！」

と言うムギ先輩に、『やっぱり俺は、ムギ先輩の中では食いしん坊キアラなのか……？』と思ったが、口には出さず、

三人と別れ、そして唯先輩の家に着いた。

「寄って行きなよ」

そう言う唯先輩だったが、思いの外、我が家に母さんと姉さんが長く引き留めてしまったがため、今回は遠慮し、梓先輩を送って行くことにする。

「せつかく憂もいるのにいゝ！」

「憂……？」

「ああ、唯先輩の妹で、私のクラスメイトだよ」

「あつ！　そう言えば、前に唯先輩から聞きましたっけ……？」

なんていうやり取りの末、そして今は梓先輩と二人つきりだ。

「あ……、あのね……、オミくん……」

それまであまり口を開かなかった梓先輩が、俺と二人つきりになるや、その声をかけてきたのは、もしかしたら二人になる時を待っていたのかもしれない。

何か、先輩たちがいると言いだせないような……。

「オミくんに聞きたいことがあるの……」

だけど俺には、梓先輩からそう改まって話をされるような理由は思いつかず、ただ「はい」としか返事ができなかった。

「オミくん、軽音部に入ったこと、後悔してない？」

「えっ!？」

思わず、そんな声を出してしまったのは、梓先輩の言葉が全く予想だにできないものだったからだ。

「今日ね、オミくんの部屋に行って思ったの。オミくんの部屋にあった漫画や雑誌、DVD、ゲーム……その殆どがバスケット関連ばかりだった。机の上にあった写真立て……あの写真は、中学時代のバスケット部のチームメイトだね？　もしかしたらオミくんは、まだバスケットに未練があるのかなって……」

「未練……?」

「そう、未練……。学校では男子の数が少なくて、バスケット部を創ることができなくて、それで軽音部に入っただけ、本当は今でもバスケットが好きなんじゃないかって……、そう思ったの」

俯いて、真っ赤になりながら、絞り出すように、梓先輩はそう言った。

しかし俺は、そんな梓先輩の真意を図りきれず、ただ黙って、返す言葉を探していた。

「来年になれば……、今年は無理だったけど、来年になれば、新入生に男子がたくさんいるかもしれないし、そうしたらバスケット部を創ることだってできるかもしれない……。その可能性だってあるのに、私たちに半ば強引に誘われて軽音部に入って、後悔してるんじゃないかって……。うっん……。今はしていなくても、そのことが現実的になった時、いずれは後悔する日が来るのかもしれないって……。だから……。だからね……。だから……」

しかし、そこで言葉は止まった。

きつと今までの帰路、ずっと考えていたのだろう。

もしかしたら、俺が怒るかもしれない。

もしかしたら、俺が傷つくかもしれない。

もしかしたら、その言葉に同意して、それを理由に、俺が『軽音部を辞める』と言いだすかもしれない。

そんな不安と葛藤しながら、それでも勇気を振り絞って、問いかけてきたのだろう。

軽音部でも一番身体の小さい梓先輩だけど、それでも今は、いつもより更に小さく見える。

それが何だか、悲しくて、せつなくて、そして、そんな思いをさせてしまったことが、何より悔しかった。

「顔……、上げてください」

だから、その声をかけた。

とにかく今は、いつもの梓先輩に戻ってほしかったから。

そしてそのために、今の俺にできること……それは、偽らざる気持ち、ただ伝えることだと、そう思ったから。

「梓先輩、俺は今でもバスケットは好きですよ」

「やっぱり……」

「けど……」

「けど……?」

「じゃあ……、逆に質問です! もし学校にギターを扱うクラブがなかったとしたら、梓先輩ならどうしてました?」

「えっ!?」

「学校ではギターができないとしたら……?」

「べつ、別に……。学校でできなくても、メンバーを探してバンドを組むとか、学校の外でバンドを組むとか、いろいろとギターを続

ける方法はあると思うよ……」

「ですよ。それはバスケットと同じです」

「……………！？」

「別に学校でバスケット部を創れなくても、だからってバスケットを嫌いになる理由にはならないし、これから続けていく方法はいくらでもありますよ。実は週末とか、たまに中学の時の仲間と一緒にストリート・バスケットをしたりしてるんですよ」

「そっ、そうなの！？」

「だから軽音部に入ったことを後悔する理由なんてないんです。それに……」

「それに……？」

「梓先輩は、自分たちが強引に俺を軽音部に入れたって思っているかもしれませんが、俺に言わせれば、それは梓先輩の自惚れですね」

「なっ！？ うっ、自惚れって……？」

「確かに軽音部入部のきっかけをくれたのは先輩たちの強引なお節介でしたけど、だけど軽音部に入部しようと決めたのは、あくまでも俺の意思ですよ！そこは見てくぶらないでください」

そう言って、俺は……、笑ってみせた。

「オミくん……」

そう言った梓先輩が真っ赤になった顔を両手で擦ると、その次にはもう、いつもの笑顔を取り戻していた。

「ごめん、オミくん！ 私、変なこと聞いちゃったね」

「この際だから、はっきり言わせてもらいますけど、たとえ先輩たちから何を言われても、俺は卒業まで軽音部を辞めるつもりはありませんし、それは紛れもなく自分の意思ですから！」

「うん！ ありがとう……」

「そこは“ありがとう”じゃなくて“よろしく”でいいんじゃないですか？」

そして梓先輩は、「ふふっ」と吹き出した後……、

「うん！ そうだね！ オミくん、これからもよろしくね！……」

そう言って、いつものように、笑った。

「よしっ！ 俺もキーボード、頑張りますよー！ 早くライブしたいですもんね！……」

「オミくん！ キーボードより、まずは追試のほうを頑張んなきゃね！」

「ははは……、善処……、します……」

いつもの梓先輩は、やっぱり厳しかった……。

*

翌日から、漣先輩による“追試対策”が始まった。

前日の“乾家訪問”に味を占めた唯先輩と律先輩が、今日も俺の家に行きたがったのだが、さすがに連日は迷惑だと漣先輩が諭し、今日からは部室で勉強することとなった。

勿論、母さんや姉さんは、先輩たちの訪問が連日になるうが、迷惑がるどころか益々張り切るだろうことは想像に難くないが、逆にそれが漣先輩に気を遣わせることになったのでは申し訳がない。

それに俺自身、これ以上、姉さんから“暴露話”という名の爆弾を投下されては堪らないということで、ここは強固な姿勢を見せ、この現状を勝ち取ることができたのだ。

静まり返った部室に、シャーペンがノートの上を滑る音が響く。

カリカリ……、カリカリと……、小さく、そして小気味良く……。

「皆、どこに行ったんでしょね〜」

漣先輩から休憩を言い渡され、縮こまった感のある身体を目一杯伸ばした後、さつきから全く姿を見せない他の先輩たちについて、そう訊ねた。

ちなみに今飲んでいる紅茶は、普段のムギ先輩の淹れ方を見様見真似で俺が淹れたのだが、ムギ先輩の淹れた紅茶の味には程遠く、内

心愕然とした……。

「ムギが気を利かせて、皆をどこかに連れていったんじゃないかな」
漣先輩は、そう答える。

こんな時、自分以外で気を遣えるのは、ムギ先輩しかない……と、
漣先輩は考えているのだろう。

（まあ、同感な気もするけど……）

「あつ！　ところで……」

「ん……！？」

「ほら、俺が入部した日の昼休み。漣先輩、屋上で作詞をしてるって言うてましたけど、あの歌詞はあれからどうなったんですか？」

「ああ、あれなら……」

そう言っつて、ルーズリーフから一枚抜き取り、俺の目の前に置いた。

「あつ、もうできてたんですね！」

「うん！　今はムギがアレンジしているよ」

「アレンジ……？」

「そう。うちはムギが作った曲に私が詞をつけるって言ったけど、主にベースとギターのパートは私がアレンジして、キーボードとド

ラムはムギがアレンジしているんだ」

「へえ〜！」

「特に最近、オミが入部して以来、他の曲もキーボードを二人編成にアレンジし直しているから、もう少し時間がかかるんじゃないかな……」

（アレンジし直すって……）

「やっぱ、先輩たちって何気に凄いですよね」

「えっ！？ なっ、何だよ、突然！」

その瞬間、澪先輩の顔が、みるみるうちに真っ赤になっていく。

けど、それは本当にそう思う。

「だって、曲を書いて、詞をつけて、アレンジまでするって。それに澪先輩と唯先輩は、ライブでは楽器を弾きながら歌まで歌うわけだし」

ゼロから一を生み出すことは、一を百まで大きくすることより、遥かに難しく、そして苦しい。

だから、曲を作るムギ先輩も、詞を作る澪先輩も、その作業は誰にだってできるものではない。

「やっぱ、凄いです！ 先輩たちは……」

「オミ……？」

「俺、入部して以来、キーボードの練習してるけど、練習すればする程、感じることもあるんです」

今、練習している曲は、“ふわふわ” “ふでペン” “ホツチキス” “カレー”の四曲だ。

放課後ティータイムの初期のオリジナルで、入部早々にムギ先輩がツイン・キーボード・バージョンにアレンジしてくれたものだ。

「感じること……って何？」

「今はムギ先輩が曲を作ってくれるし、澪先輩が詞を書いてくれる。ライブでは澪先輩と唯先輩がボーカルをしてくれる。けど来年、先輩たちが卒業したら、今度はそれを梓先輩と二人でやっていかなくちゃいけないんだなって……」

「来年……か」

「ええ、来年です。正直そう考えたら、まだ今はキーボードの練習だけで手一杯なのに、プレッシャーなんですよね……」

「けど来年まで、まだ時間があるじゃないか」

「時間なんて……、あつという間ですよ。俺、今のままだと、来年絶対に梓先輩の足を引っ張ってしまいそうで、不安なんです……」

「オミ……」

こんなこと言うつもりはなかった……。

しかし今は、時間が経てば経つ程、先輩たちの背中を見失いそうになる。

そんな気がしてならなかった……。

「オミ……、私だって不安だよ」

「澪先輩が……？」

「うん……。ライブの時、私はいつだって緊張と不安で、ステージから逃げ出したいと思ってる。私が人前で演奏するなんて未だに信じられないし、ましてや歌まで歌うなんて、もう私のキャパを完全に超えている」

「けど今までだって、ちゃんとできているじゃないですか」

俺は知っている。

澪先輩が……一年の学園祭では、喉が枯れた唯先輩に変わってボーカルを務めたこと。

そして、二年の新歓では歌詞を、同じく学園祭ではギターを、それぞれ忘れた唯先輩の変わりにボーカルを務めたこと。

（つてか、唯先輩って本番になると、何かやらかすキャラなのか……？）

何にせよ、澪先輩は自分のことをそう過小評価するが、周りからす

ると十分にその責は果たしている。

「たとえ澪先輩が自分のことをどう思っているか、俺から見たら、やっぱり凄いです！ だから今は、先輩たちの背中が俺の目標ですね」

そう言うのと、ついさっきまで真つ赤だった澪先輩の顔には、またいつもの優しい笑みが戻っていた。

「そうか……。私たちの背中が目標か……。だったら私たちも頑張らないといけないな……」

「頑張る……ですか？」

「ああ、頑張る……。だ。オミに目指してもらえような背中を見せてあげられるよう頑張らないと……」

「はは……。それじゃあ、いつまで経っても追い抜けないじゃないですか！」

「勿論、追いつかせるつもりはないよ。踏ませやしないよ、影すらも……。ね！」

そう言うって、わざとお道化た澪先輩の微笑みが、いつものキャラとは違っていて、それが可笑しくて……。二人で声を上げて、笑った……。

「でも俺は幸せですよね」

「えっ！？ 何で？」

笑いすぎて流れる涙を拭いながら、漣先輩が訊ねる。

「目指したい目標とか、負けたくないライバルとか、そういうのって願っても手に入るわけではないでしょ。それなのに俺にはすでに目指したい目標があるんだから」

「ありがとう……」

「けど……」

「けど……?」

「俺だって、いつまでも『後ろを着いて来る後輩』ってポジションに甘んじる気はないですからね! いつかきつと、先輩たちからも一目置いてもらえるような仲間ライバルになってみせますから!」

言葉にしてみると、一際大袈裟に聞こえるが、不思議なことにそれが今は、二人の間には自然と馴染んでいくように感じた。

「私だって負けないよ!」

そう返したのは漣先輩も、きつと俺と同じ空気を感じていたからだろう。

「俺、これからもキーボード頑張りますよ!」

そして俺は、そう自らを鼓舞してみせた。

しかし漣先輩からは……、

「いや……、先ずはキーボードよりも追試を頑張ってくれ……」

と、苦笑いされてしまったが……。

*

追試までの期間、毎日のように放課後は部室で勉強だった。

勿論、土日も図書館で……。

その間、ムギ先輩はずっと気を遣ってくれていたのか、唯先輩たちを部室から遠去けてくれたおかげで、澪先輩による勉強会も、思いの外捗った。

たぶん一生のうちで、こんなにも勉強（しかも数学の）をしたのは初めてかもしれない。

そう思えるほど頑張った自覚はあるし、遂に迎えた追試が終わった今では、達成感すら感じていた。

（これで毎日の勉強から解放される……）

そんな本音も今日くらいは思っていただろう……。

たぶん……。

いつもの時間、いつものように、いつもの扉を開けると、そこには、いつものように先輩たちが談笑していた。

机の上には勿論、いつものようにティーセットとスイーツが並んで

おり、そしてその部屋中には、いつものように紅茶の甘い香りが漂っていた。

それは何から何までが、いつもの光景だった。

ただ、いつもと違ったのは、先輩たちの顔が緊張と不安で一杯な表情だったということくらいだろう。

「オミ！ どうだった！？」

俺は手に携えたA4サイズの紙を、先輩たちに提示した。

その紙の右上に、赤いインクで書かれてある数字に、先輩たちの視線が集まる。

そして……。

「うおー！ オミくん、すごーい！！」

唯先輩は叫び声を上げた。

「まあーったく！ 心配させやがってえー」

律先輩はホッとした表情で椅子の背にもたれた。

「けど、これでひと安心ね！」

ムギ先輩は満面の笑みで、両手を叩いた。

「でも本当に良かった……」

梓先輩は胸を撫で下ろしながら、脱力した。

「けど、オミも頑張ったもんな！」

そして澪先輩は、そう言っで、褒めてくれた。

その紙の右上に、赤いインクで書かれてある数字……それは“10”だった。

「つかしき、追試で百点なんて、まるで……」

律先輩はそう言っで唯先輩に視線を向ける。

「確かに、あの時と一緒にになったな……」

澪先輩もそう言っで、唯先輩に視線を……。

「こういつ偶然も……、面白いわね！」

更にはそう言っでムギ先輩までも……。

「ふえっ！？ なっ、何で三人して私を見るのおっ！？」

唯先輩は、慌てたように反論するが、既に顔が真っ赤になっていた。

「なあ、オミ。おまえ、まさか、追試の勉強に集中するあまり、今まで練習したキーボードを全て忘れちゃった……なんてことないよな？」

そして律先輩は、「イヒヒ」と笑う。

しかし俺には、その意図が解らず……、

「ちよつと、律先輩！ 俺はそんなにトボけたキャラではないですよ！ それじゃ、まるで『ギャグ漫画に登場する天然ボケキャラの主人公』みたいじゃないですか！」

そう言い返したのだが、その言葉に吹き出しながら、律先輩、澪先輩、ムギ先輩の視線が再び唯先輩に注がれた。

「ふえゝっ！ 酷いよぉゝ！ オミくゝん！！」

「えっ！？ なっ、何がですかっ！？」

慌てる唯先輩と、理解不能な俺、そして何かを察したような冷やかな表情の梓先輩を取り残し、律先輩、澪先輩、ムギ先輩の三人は、再び声を上げて笑った。

「けど本当に、赤点なんてもうこれっきりにしてくれよ！」

澪先輩がそう釘を刺す。

「大丈夫です！ あれだけ澪先輩から教わって、勉強の仕方というか、コツみたいなものは掴めましたから！ 今度から三十点くらいなら軽い！ 軽い！」

自信満々にそう返す。

「なっ！ 三十点だと赤点ギリギリじゃねえか！」

しかし律先輩から呆れたように、そう返された。

「何を言っているんですか、律先輩！ 昔、ある人がこんなことを言っただですよ。『赤点』と“赤点ギリギリ”の間には、深くて広い溝と、高くて厚い壁が立ち塞がっている』って……」

「……………、なあ……………、オミ……………、それ言ったの……………、おまえじゃん！」

そして俺は苦笑いをし、先輩たちは困ったような、それでいて嬉しそうな、そんな笑顔を浮かべた。

だけど今は、こんな緩い空気が心地好かった。

*

「ところで、俺が部室で勉強をしている間、皆さんは何をしていたんですか？」

その日の帰り道、ふと疑問に思い訪ねてみた。

そして、それに答えたのは律先輩だった。

「トーコちゃんところで、いろいろと面白い話を聞いていたのさ！」

（トーコちゃん……………？ って、もしかして……………？）

「オミが小五の時の横田千鶴ちゃんのこととは勿論、他にも小四の時

の片瀬麻奈ちゃんのこととか、小二の時の塚原百合ちゃんのこととか。あつ！それから、幼稚園の時のケイコ先生のこととか……」

「って！ やっぱり、トーコちゃんって姉さんのことですか！」

「いつやゝ、有意義に過ごさせてもらってたぜ」

そして、そう言いながら律先輩は、ドヤ顔でサムズ・アップをしてきた。

「姉さんのお喋りめ」

律先輩が、唯先輩が、ムギ先輩が、そして梓先輩までもが、何かを含んだように笑っていた……。

（もう絶対に赤点は取らないようにしよう……）

そう誓った……、それは十五歳の……、春の終わりの出来事……。

#4 それでもずっと

時計は残り時間が十秒を切ったことを伝えている。

俺の前には三人。

「孝臣！」

思いきりジャンプをし、その声の主を目で捉えるや、同じようにジャンプをして、俺の行く手を遮ろうとする目の前の三人の、更に頭上からボールを投げた。

身長百七十二センチ……バスケット・プレイヤーとしては決して高いとは言えないが、たとえどんなに背の高いプレイヤーが相手であろうと、空中を支配するのは俺のほうだ。

それが、ポイント・ガードとしての、俺のポリシー。

「トモ！」

俺の手から放たれたボールは、そいつらの頭上の更に上に伸ばされた両の手の、更に上を、弧を描くように通り過ぎ、チームのパワー・フォワードであるトモの手中へと、それはまるで吸い寄せられるように収まった。

「トモ！ 行け！！」

時計が示す残り時間が、一からゼロへと変わろうとしたまさにその時、トモはその手中のボールを、バスケットに向けてショットした。

と、同時にブザーが鳴る。

ブザービーター。

そのボールは、バック・ボードに当たり、更にリングでバウンドを
すると、そのままネットの中を通ることなく、リングの外へと落ち
ていった。

そしてその瞬間……俺たちの夏は終わった。

全国中学バスケットボール大会ブロック予選、三年連続一回戦敗退。

それが俺の中学校生活の全てだった……。

*

瞼を開けると、そこには暗闇が広がっていた。

徐々にその暗闇に目が慣れてくると、天井の木目を視認することが
できた。

（夢か……）

また、あの時の夢だった。

中学三年の夏、俺の最後となったバスケ公式戦。

俺がキャプテンとして率いた瀬野中学は、強豪と称された清峰中学
に、僅か一点差で敗れた。

全国大会への進出を悲願とし、厳しい練習を強いてきたその結果が一回戦敗退。

せめてもの救いは、俺たちを下したその清峰中学が、その後、全国大会で優勝したことだろうが、そんなことで慰められるほど、俺たちのバスケは陳腐なものではなかった。

（久しぶりだな……）

その大会の後から、よくその時の夢を見るようになったが、しかしここ最近はその回数も減っていた。

（最後に見たのは、いつだったろう……）

それはきっと、軽音部に入部する直前だったように思う。

軽音部に入部して以来、そんな夢なんて忘れていた。

（もう見ることもないって思ってたんだけどな……）

そんなことを考え、だけど次には、その考えを蹴散らすように再び布団を被り、そして瞼を閉じた……。

*

悪夢のような追試から一週間が過ぎた金曜日。

今日も今日とて、放課後の部室では“部活”という名のお茶会が繰り広げられていた。

「あゝ、皆さん。そろそろ練習しませんか？」

一応、お約束のように訊ねてみる。

「何言ってるんだ、オミ！ 私たちは来週から修学旅行なんだぞ！」

律先輩は、一本だけ立てた人差し指を、俺のほうにビシッと向け、
そう言い放った。

「それが……、何か……？」

今日からちょうど一週間後、来週の金曜日から二泊三日で三年生は
修学旅行へと出掛けていく。

それは勿論、桜高の生徒であるなら、直接は関係ない一・二年生で
も知っていることだ。

故に俺の質問は修学旅行についてではなく、当然、今日練習しない
理由と修学旅行との関係性についてだ。

「だからね、オミくん！」

そしてその問いに答えてくれたのは、唯先輩だった。

「私たちは来週、修学旅行で京都へ行くんだよ。でね、三日しか時
間がないでしょ。だからどう行動すれば、その三日で京都を満喫し
て、有意義に過ごせるか……について検討しているんだよ！」

そう言うと、唯先輩も律先輩に倣って人差し指をビシッと俺に向け

た。

二人して『うりゃうりゃ』とでも言ってるかのようにその人差し指を目の前に突き立て……かなりウザい。

なので、とりあえずそのウザい二本の人差し指を払い除けてみる。

「そういえば、先輩たちは皆、同じ班でしたっけ？」

その時、思い出したように梓先輩が訊ね、そしてそれに答えたのは、今度はムギ先輩だった。

「うん！ だから余計に楽しみよね」

「和が気を遣ってくれたんだ」

そしてムギ先輩の後に、澪先輩も続く。

（和……？ 誰だっけ？ 前に聞いたことがあるような気がするんだけど……？）

まあしかし結局のところ、俺が一人で反論したところで、修学旅行を前に浮かれモードの先輩たちには、何を言っても無駄だと悟り、それ以上は口を挟むことは止め、黙ってミルクティーを味わうことにした。

「よっし！ じゃあ、明日の土曜日は修学旅行の買い出しに行くぞおー！」

律先輩が拳を振り上げて、そう宣言する。

こんな時、真っ先に発案するのは決まって律先輩だ。

「おおっ！ りっちゃん、いいねえ〜！」

そしてその律先輩の提案に、真っ先に乗っかる唯先輩もまた、いつものこと。

一瞬で華やいだ表情になるムギ先輩は勿論、『やれやれ』と呆れたような表情を浮かべる澪先輩も、結局は律先輩の提案に乗っかるのだろう。

（まあ、それが軽音部なんだろうな……）

「あずにゃんとオミくんも行くよね？」

その後に続いた唯先輩の問いかけは、もはや『はい』という返事を期待しているかのようなトーンだった。

しかし……。

「修学旅行の買い出しなら、私たちは関係ないんじゃないか……？」

梓先輩の返答は、至極当然のものだったのだが……。

「いいんだよ。皆で行くほうが楽しいし〜。オミくんも行けるよね？」

どうやら今の答えで、梓先輩は行くことに決まっただけらしい。

でも俺は……。

「すみません……。俺はパスです。明日は先約があるんで……」

そう断った。

「ええ〜！ オミくん、来れないのお〜！！」

「何だよ、オミ！ ノリが悪いぞお〜！ 先約って何なんだよ！！」

途端に唯先輩と律先輩から責められる。

「何って……。明日は中学の時の友達とストバスやるんですよ。昨日、電話がきて、それで……」

「ストバス……？」

「ぶつとばす……？」

「いや、ストバスです！」

唯先輩とムギ先輩が、あり得ないような聞き間違い（しかも何やら物騒な……）をしてきたので、一応の訂正はしておくことにする。

「ストバスっていうのは、ストリート・バスケのことですよ。広義には屋外でやるバスケ全般を指すんですけど、バスケみたいに細かいルールに捕われないで、競技者間で自由にルールを設定できるっていうのが大きな違いですね。部活のバスケが勝つためのものなら、ストバスはバスケを楽しむためのもの……そんな感じですね」

そしてそう捕捉を加えた。

中学時代、部活を引退した後くらいから、当時の仲間たちで始めたもので、引退した三年生が部活に顔を出しては後輩たちも気を遣うだろうということ、近所にバスケット・コート二面を隣接した市立体育館があるということが、その大きな理由だった。

そして昨日、いつものようにトモから誘いの電話があっただが、いつもとは違い、その電話の相手……トモの様子が、真面目なというか、真剣なというか、そんな声だったことに、多少の引っかかりもあった。

トモ……木崎知弘は俺の幼馴染みであり、中学時代のバスケット部の仲間でもある。

今は、バスケットの名門・清峰高校に通っているのだが、バスケット部は同じ系列の清峰中学出身者でないと一軍入りは難しいと言われているらしく、他中学出身のトモなどは、バスケット部でありながらボールに触れるのは、ボール磨きの時くらいで、球拾いすらやらせてはもらえないのだという。

その日頃のバスケットに対する鬱憤から、特にここ最近、週末のたびにストバスに借り出される始末だった。

しかしかく言う俺も、バスケットは今でも趣味の一つであり、また先々週は追試の勉強のため、先週はその解放感から惚けて過ごしたため、ストバスも久しぶりということで、トモの誘いに一も二もなく飛びついた。

バスケットができない鬱憤は、俺のほうにも溜まっていたのかもしれない

い。

「まあ、先に約束があつたのなら仕方がないわね」

すかさずムギ先輩が、フォローを入れてくれる。

「そうですよ。それに、たまには女性陣だけでショッピングを楽しむのも良いんじゃないですか？」

だから俺も、そう返した。

「ええ〜！ オミくんは男性として意識してないから、そんなこと気にしないでいいのに〜！」

「えっ！？」

（それはそれで気にするだろ……）

唯先輩の天然爆弾発言（個人的主観による）に心の中でそうツッコミを入れ、再びミルクティーに口をつける。

その後も、先輩たちの修学旅行談義は続いたが、俺は既に明日のストバスに想いを馳せていた。

*

「紹介するよ。こいつは同じ高校のバスケット部一年の如月琢磨。覚えてるだろ？」

翌日、いつものように市立体育館へと出掛けた。

その体育館に隣接してある屋外コートで、ストバスをするためだ。

普段のメンバーは、元瀬野中学バスケット部が殆どだが、たまにメンバーの誰かが『同じ高校の友達』とかを連れて来ることもある。

だからトモが、同じ高校のバスケット仲間を連れて来たとしても、それは不思議ではない。

しかし連れて来た相手に問題があった。

「忘れるわけじゃないか！ 如月琢磨って、元清峰中学の四番だよな！？」

そうだ……。

去年の夏、俺にとっては最後のバスケット公式戦となった清峰中学とのブロック予選第一回戦。

その相手チームで四番を背負っていた男。

キャプテンでポイント・ガード……つまりはチームの司令塔。

それは俺と全く同じポジション。

そう、つまりは俺を打ち負かした男……。

それが今、目の前にいる如月琢磨だ。

「覚えていてくれて嬉しいよ」

如月はそう言って右手を差し出す。

「あつ、ああ……」

それ以上の言葉が出ず、機械的にその右手を握る。

「俺も君のことは忘れられないからね」

「俺のことが……？」

元清峰中学のキャプテンといえば、前年度全国優勝のチームを率いたチーム・リーダーだ。

「ああ、そうだ」

しかし如月はそう言うのと、真っ直ぐに俺を見据えている。

「冗談だろ？ おまえは日本一、俺は一回戦敗退。おまえの記憶に残る理由がどこにある？」

「確かに俺たちはブロック予選の一回戦で君たちを下した」

「はは……、はつきり言うね……」

「その後、俺たちは決勝リーグで優勝するまで、一度も敗けることはなかった」

「知ってるよ。毎日、朝刊のスポーツ欄は、おまえたちの話題で持ちきりだったからな」

もつともそれは、かなり誇張していたが……。

「けど、君たち程、俺を楽しませてくれたチームはなかった」

「楽しませてくれたチーム……？」

「ああ、そうだ。君たち以上に強いチームはなかったんだ。君たちは、偶々ブロック予選の一回戦で俺たちと当たったから、一回戦敗退になっただけで、俺たちと決勝で当たっていれば、ブロック予選二位。いや、あの試合だって紙一重だったし、もしかしたら決勝リーグに進んでいたのも……」

「よせよ！」

如月の言葉を遮るため、わざと大きな声を上げた。

「俺たちはブロック予選一回戦敗退。おまえたちは全国優勝。それが唯一で全てだ。試合に“もしかしたら”なんてのはない。それに、強いチームが勝つんじゃない。勝ったチームが強いんだ。だから敗けた俺たちより、勝ったおまえたちのほうが強かった。それが現実の事実なんだ！」

そう思わなければ、俺は結果を受け入れ、前へ進むことはできなかっただろう。

「解った！　ありがとう」

だが何故か、如月はそう言って、笑った。

如月の中でもあの試合は特別な想いとして、心に刻まれているのかもしれない。

もしそうだとしたら、あの頃の俺たちのバスケも、あながち間違いではないと言えるような気がした。

「さあさあ！ 顔見せはこのくらいにして、そろそろゲームやろうぜ！」

人数の関係で、今日のストバスは、ハーフ・コートの3on3に決まった。

とはいえ、如月以外は全員、元瀬野中学バスケ部なので如月にはハズレかとも思ったが、逆に考えれば、俺以外は現役の清峰高校バスケ部だった。

（まあ、イーブンか……）

そう自分の中で折り合いをつけ、ゲームは始まった。

*

月曜日の朝、いつものように部室へと向かう。

キーボードを置くためだ。

職員室に寄って鍵を借りようとしたのだが、既に鍵は貸し出し中だった。

こんなに朝早くから部室に来るのは、きっと梓先輩かムギ先輩だろ

う。

律先輩はそもそも楽器を置きっ放しなので、朝練でもしないかぎり部室に来る必要はない。

したがって、律先輩といつも一緒に登校する漑先輩も、部室に来るのは朝のショート・ホームルームが始まる前だろう。

唯先輩は……。

（まだ寝てんじゃねえかな……？）

腕時計で時間を確認しながら、『ふっ』と吹き出しそうになる。

本来ならそんな想像、失礼極まりない話なのだが、唯先輩に限って言えば、それなりにリアルに感じられたからだ。

まあ、逆に、誰よりも早く登校して、部室で一人、朝練をしている唯先輩なんて想像しにくいし、仮にそんな場面があったとしたら、目覚まし時計のセットを間違えたか、時間を見間違えたか……といったところだろう。

（なんていうほうが失礼極まりない話か……）

しかし部室のドアを開けると、やはりそこにいたのは梓先輩だった。

「おはようございますー！」

「あっ！ オッ、オミくん……。おはよう……」

（驚かせちゃったかな？）

急に声をかけたからか、梓先輩は明らかに驚いたような声を上げ、みるみる顔が真っ赤になっていった。

しかし二・三度、深く深呼吸をすると、赤みを帯びた頬も元に戻り、と同時に、真剣な表情を作った。

「オミくん！ 練習をしよう！！」

「あつ、はっ、はい……」

梓先輩の、まるで今にも掴みかかってきそうな勢いに圧されながら、思わずそう返事をする。

もともと、元々朝練をするつもりで、こんな早い時間に登校してきたわけだから、今から練習をすることに異存があるはずもなく、しかも梓先輩が練習に付き合ってくれるなら、それは有り難いことだった。

故に冷静に考えても、断る理由なんてなく、返す言葉は変わらないのだが……。

（何か、今日の梓先輩は危機迫ってるな……）

そんなことを考えながら、梓先輩のギターに併せてキーボードを弾いた。

いや、実際に併せてくれていたのは梓先輩のほうだったのだが……。

最近になって、放課後ティータイムの初期のオリジナル曲である“ふわふわ”“カレー”“ホッチキス”“ふでペン”の四曲に関しては、ムギ先輩から合格点を貰えるようになり、追試が終わったあたりから、新たに“いちごパフェ”を練習していた。

これも中間試験そっちのけで自主練をした賜物だ……なんて言うところ、先輩から絶対に怒られるだろうから、口にはしないことにする。

というわけで、今朝は梓先輩と、ツイン・キーボード・バージョンに生まれ変わった“いちごパフェ”を練習する。

ちなみにこの曲は、今年の新歓ライブで初お披露目された曲だ。

「ああ〜！ 二人だけズル〜い！」

久しぶりの練習に集中していた意識が、突然の声に現実へと引き戻された。

振り向くと、唯先輩とムギ先輩が、入り口に立っている。

「さあ！ 唯先輩！ せっかく来たんだから練習ですよ、練習！！」

梓先輩はそう言うと、唯先輩を急かす。

「梓ちゃん、今日はどうしたの？」

ムギ先輩も、梓先輩の様子に違和感を感じたのか、そう耳打ちしてきた。

確かに今日の梓先輩からは、いつもとは違う印象を受ける。

勿論、普段の梓先輩も、軽音部の中では澪先輩と並んで練習熱心なイメージだし、時には先輩たちに対しても物怖じせず、半ば強引に練習に持っていくこともある。

だから今日みたいな場面も、決して珍しい光景ではないのだが、何故か違和感を感じてしまう。

何だか無理矢理、自分を追い詰めようとしているような、そんな印象だ。

きつとムギ先輩も、今日の梓先輩からは、そんな印象を受け、それが違和感となっているのだろう。

「さ……、さあ……。俺が来た時にはもう……」

しかし、梓先輩に何があったのかなんて、俺に解るわけもなく、ムギ先輩と同じ違和感を感じている……というニュアンスだけを返事に込めた。

そしてそれは、更に後から来た澪先輩と律先輩も同じだったらしく、結局、今朝は時間いっぱいまで、みっちり朝練を行った。

俺にとっては、最近は自主練のみだったので、こうやってバンド練習ができたのは好都合だったし、できればこれからも部活はこうであってほしいと思うところだが……。

（梓先輩、無理してパンクしなきゃいいけど……）

唯一の気懸かりは、その心配だけだった。

*

朝のショート・ホームルームが終わり、銘々が一時間目の準備に取りかかる。

ちょうどその時、教室を出ようとしている担任に名前を呼ばれた。

見ると、廊下に出るよう手で合図をしている。

なので深くは考えず、指示されたまま廊下に出ると、担任の元へと駆け寄った。

「今朝、清峰高校のバスケット部コーチという人から電話があったぞ」

つまりはそれが担任の用件だったのだが、実はそのことは予め予想していた。

というのも一昨日、ストバスを終えた後、トモから頼まれ事をされたのだが、その内容が所謂“助っ人”だったのだ。

清峰高校バスケット部は、一軍の殆どが同じ系列の清峰中学からの進学組が占めている。

しかしそれは、外様を嫌う身内贔屓によるものでは決していない。

清峰高校は、清峰中学とともに、毎年全国大会上位の常連校だ。

故に、選手層も厚いのだが、一軍選抜において、そこには出身校は元より、学年や経験の長短は一切加味されない。

言わば完全なる実力主義なのだ。

にもかかわらず、一軍の殆どが清峰中学出身者ということは、それだけ清峰中学バスケット部のレベルが高いということになる。

その一軍が夏の大会を前に週末、遠征に出掛けるのだという。

と言っても行くのは二・三年生のみで、一年生は留守番ということだった。

というわけで、どうせ留守番なら、留守番組だけで試合をしようということになったらしい。

一軍に選抜された一年生対その他の一年生。

しかしそこはやはり、実力に差がありすぎるということで、俺に白羽の矢が立ったのだ。

いや、トモが勝手に俺に白羽の矢を立てやがった。

つまりはその実力差を埋めるべく、その他の一年生チームに入ってほしいというのが、トモの頼みだったというわけだ。

試合自体、身内で行う非公式のものであり、尚且つ現状の実力差では試合として成立しないらしい。

『けど俺でその差が埋まるのか？』

そう聞いた俺に、首を縦に振ったのは、一軍一年生チームの司令塔

である如月だった。

つまり如月がトモに着いてストバスに来たのは、俺を品定めするた
めだった。

そしてそのお眼鏡に見事叶った……というわけだ。

ただ、非公式とはいえ他校の練習試合に、全くの部外者が出場する
のは何かと問題がある。

なので、俺から二つの条件を出した。

一つは、トモや如月以外の全てのメンバーにも了承してもらうこと。

そしてもう一つは、きちんと責任者から学校を通して依頼してくる
こと。

その上で双方が合意したなら、俺からの異存はない。

トモも如月も、この条件に同意してくれたのだが、早速動いてくれ
たらしい。

清峰高校のバスケ部コーチは、一軍二・三年生の遠征に随行する監
督に代わって、留守番組の責任者を務めているとのことだった。

「で、乾。おまえはいいのか？」

担任にそう聞かれ、「約束ですから」と答えた。

トモと如月は、どうやら俺の呈示した条件を全てクリアしてくれ

たらしい。

それなら俺が、今更難色を示す理由なんてあるわけがない。

（約束だから……か）

本当は少し……いや、かなり興奮してきている。

何せ相手は一年生オンリーとはいえ、“あの”清峰高校の一軍なのだ。

加えて、相手チームの殆どは元清峰中学出身。

そしてこっちは、全て……とはいかないまでも、トモの他にも何人か瀬野中学出身者がいる。

去年の試合の再戦……という大袈裟だが、久しぶりに真剣に、そして全力でバスケットができることに、実は胸が高鳴り始めていた。

唯先輩たちに『部活のバスケットが勝つためのものなら、ストバスはバスケットを楽しむためのもの』なんて説明したが、そういう意味では俺にとっては久しぶりの“勝つためのバスケット”ということになる。

「じゃあ、宜しくお願いします」

担任を通して、向こうのコーチに返事してもらうことにし、教室へ入ろうと後ろを振り向くと、そこにはいつからか梓先輩が立っていた。

もつとも、俺の一年五組と、梓先輩の二年一組は、教室が隣同士な

ので、こうやって休憩時間に顔を合わせることも少なくない。

「オミくん、清峰高校に行くの？」

「えっ！？ あっ、ああ、ええまあ……」

質問の意図が解らず、ただ肯定だけを伝える。

「バスケをするために？」

「ええまあ……」

「そうなんだ……」

「梓先輩……？」

しかしその後、梓先輩からの言葉はなく、そのまま踵を返すと、俺に背中を向け、そして黙ったまま教室に入ってしまった。

*

放課後、掃除当番を終え、部室へと向かった。

普段なら一応、部室に行く前に職員室に寄って行き、鍵が貸し出されているか確認するのだが、掃除当番の日に限っては、先輩たちのうち誰かが先に部室に行っていることは明白なので、直接部室へと向かう。

すると部室のドアのところに人影が見えた。

梓先輩だ。

何故か中には入らず、立ち尽くしている。

「梓先輩！」

「ひいつ！」

なので声をかけたのだが、どうやらまた驚かせてしまったようだった。

「すみません、いきなり声をかけて……。驚かせちゃいましたね……」

「あつ……。う……。ううん……。そんなこと……」

しかしやはり言葉は続かず、俯いてしまった。

（何なんだろう……？）

「とりあえず中に入りましょうよ」

入り口に立ち尽くしていても仕方がないので、ドアに手をかけた。

「あつ！ オッ……。オミくん、ダメ！」

その次の瞬間、梓先輩はそう叫びながら、俺を引き留めようと腕を掴んだ。

しかし体勢が悪かったのか、俺は梓先輩に押された形でドアを開け

てしまい、そのまま二人して倒れるように中へと入っていった。

そんな後輩二人に驚いたのは、いつもの如くティータイム中の三年生四人だ。

「どうしたんだ！？ 梓！ オミ！」

澪先輩が立ち上がった。

「びつくりするだろ。静かに入って来いよ」

律先輩は既に気を取り直している。

「二人とも、ムギちゃんのお菓子を早く食べたかったんだよね」

唯先輩は……まあ、いつもの唯先輩だ。

「さあ、二人も早くこっちへ来て。今、紅茶を淹れるわね」

ムギ先輩も……やっぱり、いつものムギ先輩だった。

「やれやれ……」

ワケも解らず、『まあ、いつものことか』と開き直り、定位置へと座ろうとしたのだが……。

「練習です！」

梓先輩はそう言うと、強固な姿勢を崩さなかった。

「さあ、早く！ 皆さん、準備してください！」

その表情があまりにも切羽詰まっていたからか、普段なら何かと屁理屈をこねてティータイムを強行しようとする唯先輩や律先輩までも、素直に従った。

しかしそれは梓先輩の、普段とは明らかに違う迫力に気圧されたからであり、皆一様に首を傾げながらではあったのだが……。

「唯先輩！　そこでもう一度リフですよ！」

「律先輩！　サビが走り気味になってます！」

「オミくん！　一音間違えてたよ！」

梓先輩からの容赦ないダメ出しに、しだいに閉口していく。

『いったい梓、どうしちゃったんだよ……？』

律先輩が目でそう問いかける。

『何かあったのかな……？』

漣先輩も目でそう返す。

『朝も変だったよね……？』

ムギ先輩のそんな視線に、俺は小さく頷いた。

「どうしちゃったの？　あずにゃん！」

心配そうに唯先輩が梓先輩に駆け寄った。

「どうもしません！ 軽音部なんだから、バンド練習をするのは当たり前です！」

「けど梓……。あんまり根を詰めすぎると、パンクしちゃうぞ。そんなに無理をしなくても……」

「無理なんて……。そんな……。零先輩まで……」

梓先輩の表情が途端に泣きそうなそれになる。

唇を噛み、そして俯く。

唯先輩も、零先輩も、律先輩も、ムギ先輩も、そして俺も……。

梓先輩の心中が理解できず、それでもただ心配そうに見つめる。

「すみません……」

暫しの沈黙の後、梓先輩は小さくそう言うと、ギターを静かにスタンドに置き、部室を後にした。

しかし俺たちは誰も、梓先輩を追うことはできなかった。

いったい何がどうしたのか全く解らないまま、ただ時の流れだけが無情な程に緩やかに通り過ぎていった。

*

部室には既にオレンジ色の光が射し込んでいる。

時計の針は、いつもの下校時刻をとうに回っており、だけど俺は未だ部室から離れることはできなかった。

梓先輩は、あれから戻っては来ないのだが、一人残して帰るわけにはいかない。

『もう帰ってるかもしれないぞ』

律先輩からはそう言われたが、俺は絶対に戻ってくるという確証があった。

なぜなら……。

「あつ！ オミくん……」

ドアが静かに『ガチャリ』と音を立て、と、ともに梓先輩が顔を覗かせた。

「やっぱり戻って来ましたね。待ってて良かった」

「先輩たちは？」

「皆、帰りましたよ。いや……、帰した……というほうが正しいかな」

「帰した……？」

事実、俺が『梓先輩は絶対に戻ってくる』と言うと、『それなら皆で待ってしよう』と唯先輩が提案し、他の三人もそれに同意した。

しかし俺が『俺一人のほうがいい』と言い張り、結局は先輩たちも俺に任せてくれたのだ。

「梓先輩は絶対に戻ってくるって思っていましたから」

「な……、何で……？」

やっぱり梓先輩は、徐々に俯き始める。

「梓先輩が自分のギターをそのままにして帰るはずないですから」

見ると、スタンドに立て掛けられていたはずの梓先輩のギターは、すでにケースへと収まっている。

唯先輩が『それなら、せめて』と言って、入れてくれたからだ。

「けど……、オミくんは何で……？」

俯いたまま、ただ上目遣いに、梓先輩がこちらに視線を向ける。

俺とは二十センチ以上、身長が違うから、それは本当に上目遣いとなっていた。

「梓先輩と話がしたかったです」

「解ってる……。今日の私、変だったもんね……」

「変……というか、気負いすぎているというか……。皆も心配していたんですよ」

そう言うと、再び会話が止まり、沈黙が流れた。

だが、俺はあえて梓先輩からの言葉を待った。

きつともう、梓先輩は俺の言いたいことを、その真意を理解している。

そしてその、俺の気持ちに対しての返事を今、言葉にしようと考えているのだろう。

だからあえて、梓先輩からの言葉を待つことにした。

「私ね……」

すると果たして、暫く続いた沈黙を梓先輩は破った。

「私ね、一昨日、聞いちゃったの……」

「一昨日……?」

「先輩たちとショッピングに行った帰り、市民体育館の前を通ったの」

「市民体育館……って、あつ!」

「うん……。あそこは帰り道だから。そうしたら、その隣にあるコートにオミくんがいて。そういえば今日は友達とストバスをする

って言ってたな〜って思い出して。それで覗きに行っただけど…」

そこで言葉が詰まる。

「来たなら、声をかけてくれれば良かったのに……」

別に見られたくない場面だったわけでもないし、声をかけてくれれば自然と『高校の軽音部の先輩』だと皆にも紹介していただろう。

仲間内でも、高校の友達を連れて来るなんて日常茶飯事なことなので、何ら問題はない。

「できなかった……」

しかし梓先輩は、そう小さく呟いた。

「何で……?」

「聞いちゃったんだ……」

「聞いたって何を?」

「オミくん、友達から清峰高校に来てほしいって、そうお願いされてた……」

「えっ! ええ……、まあ……」

(練習試合のことかな?)

「あれって転校するってことだよね？」

「……………」

（へっ！？ 転校？）

「私、知ってるよ。清峰高校って、バスケの名門なんでしょ？
確か全国大会にだって何度も出てる……………」

「ええ、まあ……………」

「そこからスカウトされたんでしょ？」

「スカウト！？」

「オミくん、友達から清峰高校に来てほしいって言われた時、責任者から学校を通してくれて、そう言ってた。それって、転校となると編入試験とか、そういったことが絡んでくるからだよね？」

「ちよっ……………！ ちよっと待ってくださいよ！」

「今朝、先生にも、オミくん『宜しくお願いします』って言った。『約束だから』って……………。あれって転校を決めたってことなんですよ？」

「ちよっと、梓先輩……………」

「私ね、考えたんだ。オミくん、家でもかなり自主練してるよね。たかだか一ヶ月で四曲も弾けるようになってるし。だけどここ最近……………、ううん、殆ど毎日だよね、部活でお茶ばかりして練習しない

のは……。本当はオミくん、部活でも練習したいのに、私たちがお茶ばかりして練習しないから、だから……」

「だから……？」

「だから……、オミくん……、私たちに……、愛想を……、尽かして……」

気づくと、今まで上目遣いだった梓先輩の瞳から、大粒の涙がこぼれていた。

（まいったな……）

女の子に泣かれるのは慣れてない。

（いや……、当たり前か……）

けど、この状況はどうしたものなのだろうか……？

（とりあえずは、誤解を解かなくちゃいけないよな）

「あの……、梓先輩……」

俺は制服のポケットからハンカチを取り出し、梓先輩の頬を拭く。

梓先輩は、一瞬『はっ』とした表情を見せたが、「ありがとう」と呟き、そのハンカチを受け取った。

「以前、梓先輩に言ったこと、覚えてますか？」

「私に、言ったこと……?」

「ほら、追試の勉強で俺の家に来た日のことですよ。先輩たちを送っていく時に、梓先輩から『軽音部に入ったこと後悔してないか』って聞かれて……」

「ああ……、覚えてる……、覚えてるよ！　だって、あの時の言葉、私、凄く嬉しかったもん！」

『たとえ先輩たちから何を言われても、俺は卒業まで軽音部を辞めるつもりはありません』

俺は、はつきりとそう言った。

「その時の言葉、信じてもらえませんか？」

「えっ!？」

こぼれる涙を、だけでもう拭う手を止め、梓先輩は顔を上げる。

「あの話は、練習試合の助っ人に来てくれて話ですよ。今度の土曜日、一年生同士で練習試合をするから、その助っ人に」

「けど、そのまま転校とかって……」

「実際問題、それはないでしょ？　たとえ俺がそんな展開を望んでいたとしても、そんな都合良く事が運ぶなんて、全くの奇跡ですよ。それに俺自身、そんな展開は望んではいませんしね」

俺はそう言って、笑ってみせた。

それが本心であり、真実なのだから……。

「オミくんは……、今の軽音部で良いの……？」

「今の軽音部……？」

「オミくんって、中学時代はバスケット部のキャプテンまで務めてて、だから部活っていうとバリバリ練習しないといけない人だと思ったから……」

「だから今日は朝から？」

「うん……。私が変わえようと思ったの。オミくんが『ずっといたい』って思えるような軽音部に……って」

「俺がずっといたい軽音部……ですか？」

「うん……」

二十センチ下の梓先輩の身体が、今はいつも以上に小さく見える。

梓先輩の今日の言動は、全て俺のため……。

それが嬉しくもあり、けどもう、こんな思いを梓先輩にさせたくはなかった。

「梓先輩！ もう一度だけ言いますね！」

そう言って、一度だけ深く深呼吸をする。

そして……。

「たとえ先輩たちから何を言われても、俺は卒業まで軽音部を辞めるつもりはありません！！ この気持ちは絶対に変わりませんから、だから……、だから信じてください……」

そう一気に言った。

梓先輩からの言葉はない。

ただ俯いたまま、ハンカチで顔を被い、小さな肩を振るわせている。しかしそれからすぐ、梓先輩は顔を上げると、今度はちゃんと、笑ってみせた。

その笑顔にはもう、言葉は必要ないだろう……。

*

翌朝、いつものように部室へと向かう。

鍵は既に貸し出し中だったため、先輩たちのうち誰かが来ているのだろう。

（まあ、こんな時間に来るのは梓先輩かムギ先輩だろうな……）

確か昨日も同じことを考えていた気がする。

だけどドアを開けてみれば、やはりそこにいたのは梓先輩だった。

「梓先輩！ おはようございます！」

「あつ！ オミくん、おはよう！」

そう返した梓先輩の表情は、いつもの梓先輩の笑顔だった。

「オミくん、これ……」

梓先輩はそう言ってポケットからハンカチを取り出した。

「昨日は……、ありがとう」

それは昨日、俺が梓先輩の涙を拭うために使ったハンカチだった。

綺麗に洗濯され、アイロンまでかけられている。

「いつでも良かったのに」

そう言っ、ハンカチを受け取ろうとするが、俺が手を差し出すより早く、梓先輩はそのハンカチを後ろ手に隠した。

「梓先輩……？」

行動の意味が解らず、手が止まる。

「じゃあ、このハンカチ貰ってもいい？」

「えっ！？ ハンカチを……ですか？」

「うん……」

「はあ……、まあ……、それはいいですけど……」

ハンカチ自体はさほど高価なものではないので、あげることもやさかではないのだが、その真意が図りかねた。

「これからね……、もしもこれから……、また昨日みたいに、オミくんが軽音部を辞めちゃうんじゃないかって不安になったら、このハンカチを見るの。このハンカチを見て、オミくんの言葉を思い出す。オミくんが、卒業するまで軽音部を辞めないって言ってくれたことを思い出すの……」

（可愛いことを考えるんだな……）

そう思うと、『ふっ』と笑いがこぼれた。

「そっ、そんな笑わないでよ！ 私は真面目に言ってるんだから！」

梓先輩の表情は、そう言って、拗ねたような、それでいて照れたようなそれに変わった。

だけど変わらず、笑みだけは絶やさなかったが……。

「解りました！ けど、梓先輩だけってのはズルくないですか？
だったら俺にも何かくださいよ」

だからわざと、そうお道化てみせる。

「じゃあ……、これ……」

そう言つて梓先輩が取り出したのは、普段から使用しているピックだった。

「いいんですか？」

「うん！ ピックはまだまだたくさんあるし。それに、普段から使っているもののほうがいいでしょ？」

そう言つて笑う梓先輩に釣られて、俺まで口角が上がる。

「はい！ じゃあ、俺はこのピックを見て、梓先輩との約束を思い出しますね！」

「約束……か」

「そう！ これは二人だけの約束です！ 俺たちは、これからもずっと、軽音部ですよ！」

そう言つて笑い合う。

こんな心地好い空間が、やっぱり俺は、堪らなく好きだった……。

*

時計は残り時間が十秒を切ったことを伝えている。

俺の前には三人。

「孝臣！」

思いきりジャンプをし、その声の主を目で捉えるや、同じようにジャンプをして、俺の行く手を遮ろうとする目の前の三人の、更に頭上からボールを投げた。

去年の記憶が甦る。

しかし、たとえどんなに背の高いプレイヤーが相手であろうと、空中を支配するのは俺のほうだ。

それが、ポイント・ガードとしての、俺のポリシー。

「トモ！」

俺の手から放たれたボールは、そいつらの頭上の更に上に伸ばされた両の手の、更に上を、弧を描くように通り過ぎ、チームのパワー・フォワードであるトモの手中へと、それはまるで吸い寄せられるように収まった。

「トモ！ 行け！！！」

時計が示す残り時間が、一からゼロへと変わろうとしたまさにその時、トモはその手中のボールを、バスケットに向けてショットした。

と、同時にブザーが鳴る。

ブザービーター。

まるでそれは、去年の再現を見ているかのように感じられた。

トモが放ったボールは、バック・ボードに当たり、更にリングでバウンドをすると反転し、そのままゴールされ、コートへと落ちていった。

あの試合の再現のようなシーンは、全く違う結末で幕を閉じたのだ。

審判役の清峰高校バスケット部コーチがホイッスルを鳴らし、一点差で俺たちが勝利したことを宣言した。

途端に湧く歓声。

チームメイトが一斉に俺に駆け寄る。

拳を振り上げる者……。

抱き合う者……。

涙ぐむ者……。

喜びの噛み締め方はそれぞれだが、胸中には皆、万感の想いがあるのだろう。

かく言う俺も、去年敗けた清峰中学のメンバーに勝てたことは、どんなに冷静になろうとしても、やはり嬉しかった。

窓の外に目を向ける。

朝から降っている雨はいよいよ勢いを増し、激しい音を奏でている。だけどそんな雨音に負けないくらい、俺たちの歓喜の声はいつまで

もいつまでも、体育館に木霊していた。

*

「悪いな、トモ。俺、今から行かなくちゃいけないところがあるんだ」

試合の後、祝勝会と称して、近所のラーメン屋“はるもと屋”に行こうと誘われたが、それは断ることにした。

祝勝会とはいいいながらも、一軍チームも合流するということで、それはむしろ祝勝会というよりは“打ち上げ”と呼んだほうが相応しい状況だった。

なので、他校の生徒が一人混ざるというのも好ましくはないだろう。もつとも、それをトモに言ったところで、『何言ってるんだよ！勝利の立役者が！』と、逆に言われてしまったのだが……。

（まあ、勝利とはいっても、かなりこっちに有利なルールにしてもらってただけだな……）

それでも久しぶりの“本気の”バスケットは、やはり楽しかった。

それだけで、今の俺には十分だった。

「なあ、乾。おまえ、本当にもうバスケットの表舞台に戻って来る気はないのか？」

そう聞いてきたのは如月だった。

如月の言う“表舞台”というのは、つまりは公式戦のことだ。

俺のバスケットを高く評価してくれているが故の言葉……なのだろうが、今となつては俺の答えは決まっていた。

「悪いな、如月。今の俺にはもう、バスケットと同じくらい熱中できるもんがあるんだよ。だから俺は、そっちの道で表舞台を目指すよ」

俺はそう答え、『ニッ』と笑った。

その答えに、如月も『ふっ』と笑う。

「バンド……か？ 木崎から聞いたよ。おまえ今、軽音部に入ってるんだって？ いいのか？ 本当に、それで、バスケットを捨ててまで、そこにいたいって、本気で思っているのか？」

「愚問だな、如月。それでも俺、バスケットをしていた頃と同じくらい、バンド、楽しんでるぜ！」

そして満面の笑みでサムズ・アップをしてみせる。

如月はトモと顔を合わせ、そして二人とも……笑った。

*

はるもと屋へと向かう清峰高校生と別れ、俺は本日最後のお役目を果たすべく学校へと向かう。

土砂降りの雨の中、正門をくぐり、正面玄関から校舎へと入る。

守衛さんに事情を話し、部室の鍵を借りると、そのまま部室へと続く階段を昇っていく。

『ガチャリ』と静かに鍵を開け、ノブを回し、ドアを押しながら中へと入った。

時間的には早いですが、激しい雨のせいだろう。

部室の中は薄暗かった。

だが、俺はあえて灯りを点けず、そのまま部屋の奥へと歩を進める。

そこに存在感を醸し出しながら置かれている水槽では、相変わらずカメ……ではなく、スッポンモドキが優雅に浮遊していた。

そのスッポンモドキ……トンちゃんに餌をあげる。

今日は休日。

昨日から三年生は修学旅行に出掛けている。

梓先輩も、友達のクラブを手伝い、そのまま友達の家泊まりに行くとかで、昨日の部活は休みとなった。

こんな機会でもなければ他のクラブの活動に参加するなんてこと、そうそうはないだろう。

（それはそれで、良い経験……かもな）

だから今日は誰も餌をやりには来ないだろうと、それが学校に来た理由だ。

餌を食べるトンちゃんを眺めながら、しばし雨の音に耳を傾ける。

雨は好きではないが、雨の音は嫌いではない。

矛盾しているかもしれないが、それが本音なのだから仕方がない。

雨の音は、俺の意識を外界から切り離し、自分の内へ内へと向けてくれる。

段々と周りの情景が消えていき、ただ頭に浮かぶのは自分の心情のみとなる。

その隔離されたような感覚が、好きだった。

『それは母胎回帰願望ってやつだね』

いつだったか、姉さんにそのことを言ったら、そう教えてくれた。

『人間はね、無意識のうちに母胎と同じ環境を作ろうとするの。母胎って、胎児にとつては、母親に守られていて、危険なんて全く感じることはない、心から安心できる場所なのね。だから寂しい時や不安な時、落ち込んだ時や悩んでる時、人間は無意識にその母胎と同じ環境を欲するのよ。ほら、そういう時って、よく膝を抱えて丸くなったりするでしょ。あの姿は胎児が母胎にいる時の姿と一緒なの。それで自分の心臓の音を聞こうと丸くなるのよ。母胎で聞く母親の心臓の音こそが、胎児にとって一番安らげる音だからね』

それが本当かどうかは解らない。

だけど姉さんがそう言うなら、俺にとってはそれが真実だ。

その姉さんも、今はお腹の子供に安心と安らぎを与える母親だ。

「不思議なもんだよな……」

そう呟くと、トンちゃんが鼻だけを水面の上へと出した。

「ぷはっ！ はははは……」

その仕草に思わず吹き出してしまう。

タイミングが、あまりにも絶妙だったからだ。

「トンちゃん！ 本当に解ってるの？」

そう言いながら、水槽にコツコツと軽く爪を当てる。

その瞬間、トンちゃんの首が、あたかも頷いたかのように縦に動いた。

「解ってるのかー！？」

ただ、それだけのことなのに、妙に楽しかった。

暫く雨の音を聞きながら、トンちゃんを眺めていると、しだいにそれを打ち破るような足音が響き始めた。

一人ではなく複数の……。

そして走っているかのように……この部室へと向かって来る。

ただ、そのうちの一人は見当がつく。

今日は三年生がいない以上、間違いなくそれは梓先輩だ。

果たして、飛び込んで来るようにドアを開けたのは、やはり梓先輩だった。

ただ、後ろには見たことがない女子生徒が二人いたのだが……。

「どうしたんですか？ 梓先輩、そんなに慌てて……」

梓先輩は元より、三人ともが息を切らしている。

「やっぱりオミくんだった〜！」

そして梓先輩は、その場に座り込んだ。

「大丈夫？ 梓ちゃん……」

ポニーテールの女子生徒が梓先輩に駆け寄る。

「なあ〜んだ〜。先客がいたね〜」

もう一人の……癖毛をツインテールにしている女子生徒が、俺を見てそう言った。

「ああ、オミくん。トンちゃんに餌をあげようと思って……」

梓先輩は、そう言いながら息を整え、立ち上がった。

「そうなんですか。すみません、メールしたほうが良かったですね。何だか無駄足を踏ませちゃったみたいで……」

「ううん……。ちょうど良かった。私、オミくんに伝えたかったところがあるから」

「伝えたかったこと？」

「あつ！ その前に、今日の試合どうだった？」

「勝ちましたよ。まあ、一点差なんで辛勝ですけどね……」

そう言つて苦笑いを浮かべると、梓先輩が俺の傍へと寄つて来る。

そして……。

「オミくん！ おかえり、軽音部へ……」

そう言つて、笑つた。

「伝えたかったことって……？」

「うん……。ちゃんと聞いたかったんだ。『おかえり』って……」

その言葉に、何だかやつと現実に戻された感覚が甦つた。

「梓先輩……。ただいま……」

だからそう……。呟いた。

「お二人さん、仲良いつすね」

その声に顔を上げると、梓先輩の友達が二人ともニヤニヤと笑っている。

一人は嬉しそうに、もう一人はからかうように。

その後の自己紹介で、ポニーテールは平沢憂先輩、ツインテールは鈴木純先輩だと解った。

「平沢”””て……。じゃあ、もしかして……？」

「うん！ 憂は唯先輩の妹だよ」

唯先輩の口から、ちよいちよい聞く妹。

よく話しに聞いていたため初めて会った気もしないが、正真正銘初対面だ。

「よく唯先輩から聞いてますよ。憂先輩のこと」

「えっ！？ お姉ちゃんが私のことを！？」

挨拶程度のつもりで話した一言が、妙な具合に憂先輩のテンションを上げてしまったようだ。

「お姉ちゃん、私のこと何て言ってるの？」

「えっ！？ ええ〜っと……、大好きだって……」

「本当に〜！？」

もはやキラキラと瞳が輝きだした憂先輩は止められそうにない。

「あっ！ 乾くん……、オミくんのこと、お姉ちゃん話してくれるよー！」

「へえ〜」

それは意外だった。

（『男性として意識してない』なんて言ってたのにな……）

「で、唯先輩は俺のこと、何て言ってるんですか？」

「えっ！？ ええ〜っと……、……いい人って……」

「……」
「……」
「……」

（微妙だ……。いや、唯先輩らしいけど……。だけど微妙だ……）

「ぷっ！ くくくっ！ー！」

「あっはっはっはっ！ー！」

一瞬の間の後、梓先輩と純先輩が、堪えきれなくなつたかのように、声を上げて笑つた。

「はい！ その二人、笑わない！」

そう言つたものの、二人の笑いは止みそうにない。

「ええ〜！ 私、何か変なこと言つたかな〜？」

（つて、“天然”は平沢姉妹共通のデフォなのか！？）

梓先輩と純先輩が一頻り笑い、俺と憂先輩は互いに顔を見合わせ、そして……やっぱり笑う。

激しく響く雨の音が、まるで俺たちだけ、別の空間へと誘つたかのような錯覚をもたらす。

いつもの軽音部のメンバーとは違うけど、このメンバーでいるのも楽しいのかもしれない。

ふと、そんなことを考えながら……。

「せっかくこのメンバーが揃つたんだし、セッションしてみない？」

そう言い出したのは純先輩だ。

「あつ！ 私、やってみたい！ ねえ、純。ジャズ研に使ってないギターない？」

その発案に梓先輩も乗ってきた。

「あるんだよ！　それが！」

純先輩は嬉しそうだ。

「この雨なら少々音が大きくても大丈夫でしょうし」

だから俺もそう答える。

「でも私にできるかな……」

憂先輩は不安そうに、そう呟く。

「憂先輩、オルガンなんてどうですか？」

「あつ！　オルガンなら小さい頃に弾いたことがある」

「なら、憂先輩は俺とオルガンの連弾をしましょう」

「うん！」

これで話は決まった。

『じゃあ』と言って、純先輩は梓先輩を連れ、ジャズ研の部室へと向かう。

「オミくん……」

「はい？」

そして二人になったのを見計らったのか、憂先輩が少し真面目な、
だけど笑顔で、そう話しかけてきた。

「オミくん、ありがとう」

「えっ！？ 何ですか!？」

「この前ね、梓ちゃん、様子がおかしい時があつて。何かを思い詰
めてるみたいなの……。けど、すぐにいつもの梓ちゃんに戻ったんだ
けど、それってオミくんのおかげだね？ だから、ありがとう」

「いつ、いや……、俺は別に……」

（つていうか、その原因を作ったのも俺みたいなもんだし……）

「これからも梓ちゃんを支えてあげてほしいの。友達としてだけで
なく、同じ軽音部部員として。それができるのは、きっとオミくん
だけだから……」

同じ軽音部部員として……。

それはきっと、来年、三年生が卒業した後のことを言っているのだ
ろう。

本来なら一人残るはずだった梓先輩に、俺という後輩ができた。

来年、梓先輩が一人になることはない。

そのことを含めての『支えてあげてほしい』なのだろう。

「はい！ 勿論です！」

だから今はそう答えよう。

何故なら、それが俺の本心なのだから。

*

純先輩のベースと梓先輩のギターがリズムを刻む。

それに合わさるようにオルガンの音色が奏でられていく。

オルガンは俺と憂先輩の連弾だ。

曲目は“むすんでひらいて”

誰もが知ってるお馴染みの童謡だが、四人で奏でると、ちよっぴりカッコ良くなった。

演奏が終わると、皆、満足そうに笑い合う。

四人で一つのことを成し遂げた。

それはとても些細なことだけど、今はそれが嬉しくて仕方がないのだ。

その時、窓の外から、オレンジ色の光が射し込んできた。

どうやら雨が上がったらしい。

そしてふと、憂先輩のケータイが鳴る。

「あつ！ お姉ちゃんからだ！」

そう言つて憂先輩はケータイを開く。

そして画面をこちらへと向けた。

『うう、ギー太が恋しいよ』

そのメールに、また俺たちは声を上げて笑つた。

唯先輩らしい、どこか間の抜けたような……それでいて、心から音楽を好きな気持ち伝わってきて、嬉しくて、楽しくて、そして、可笑しかったからだ。

「そうだ！ 私たちも写メ撮ろう！」

そんな純先輩の発案も、だから自然な流れ……だったのかもしれない。

憂先輩と純先輩で梓先輩を挟んで、その前に俺が来て……撮つたのは憂先輩だ。

そして、憂先輩が唯先輩に、その写メとともに宛てたメッセージ……、

『お姉ちゃんへ、いいでしょー！』

それが今の俺たちを端的かつ的確に表していた。

*

「オミくん！」

月曜日、廊下で声をかけられ、振り向くと憂先輩がいた。

その横には梓先輩と純先輩もいる。

他愛もない雑談に笑いが絶えない。

そんな居心地の良さを感じる空間だ。

「ええ〜！？ 本当にい〜？」

「うん！ 昨日、お姉ちゃん、帰って来て『あずにゃん分が足りない』って言ってたもん！」

そう言う憂先輩は嬉しそうだが、当の梓先輩はげんなり気味だ。

「逃げようかな……」

そんな言葉すら聞こえてきた。

「えっ！？ 何で？ 何が始まるの？」

純先輩はきょとん顔だ。

「うん、それはね……」

そう憂先輩が言いかけた時だった。

「あーずにゃーん!!」

そんな声とともに現れた唯先輩が、梓先輩に抱きつき頬擦りをする。

「お久しぶりぶり〜!」

「みよう! やみえてくだひゃい……」

嫌がる梓先輩だが、表情は嬉しそうだ。

「いつもこうなの……?」

「うん! そうだよ!」

そんな純先輩と憂先輩の会話をよそに、唯先輩は梓先輩の腕と俺の腕を握る。

「さあ! 行こう!」

「えっ!? どこへですか?」

「部室だよ!」

「今じゃなくても放課後でも……」

「ダメだよ。もうムギちゃん、お茶の準備してるもん!」

そう言つて、半ば強引に俺と梓先輩の腕を引つ張っていく。

「憂〜！ 純ちゃん！ またね〜」

そう言い残して……。

*

部室では、いつものティータイムが繰り広げられている。

いつものメンバーに囲まれ、いつもの席に座る。

「実は、二人にお土産があるんだよ〜」

唯先輩はそう言つと、小さな紙袋を二つ取り出した。

一つは梓先輩に……。

そしてもう一つは俺に……。

「開けてもいいですか？」

梓先輩の言葉に、先輩たちは頷く。

俺も梓先輩と一緒に、自分の紙袋を開けた。

中から出てきたのは、ハートの形をしたオレンジ色のキーホルダー。

ハートの中には、白抜きで、湯気を立てたティーカップが描かれている。

「ティーカップ……？」

俺はその意図が解らなかったが、梓先輩はすぐに解ったようだ。

梓先輩のキーホルダーも、色違いのグリーンではあったが、デザインは俺のと全く同じだった。

「これって……」

梓先輩は立ち上がると、自分のギターケースへ駆け寄る。

そしてそのポケットから、一つのピックを取り出し、テーブルの上に、お土産のキーホルダーと並べて置いた。

そのピックには同じく、湯気の立つティーカップが、手描きで描かれてある。

「これは……？」

そう梓先輩に聞くと、梓先輩はキーホルダーとピックを、それぞれ手に取り……、

「これはね、去年、初めてライブハウスに出演した時に決めた、私たちのロゴマークなんだ」

そう教えてくれた。

「じゃあ……」

そう言つて、先輩たちの顔を見渡した。

「せーのっ！」

律先輩の掛け声に合わせて、四人が一斉に、それぞれのキーホルダーを取り出した。

唯先輩はレッド、澪先輩はブルー、律先輩はイエロー、そしてムギ先輩はピンクの、同じデザインのキーホルダーが、そこにあった。

「このマークは放課後ティータイムのロゴマーク！ つまり、このキーホルダーは放課後ティータイムのメンバーの証なんだよ！」

唯先輩の言葉に、皆の表情も明るくなる。

「じゃあ……、俺も……？」

「勿論！ オミだつて、放課後ティータイムのメンバーだよ！」

そして澪先輩がそう言ってくれた。

放課後ティータイムのメンバー。

その言葉の意味を解つて言ってくれたのだろうか？

それはつまり、卒業しても、違う道を行んでも、会えない日々が日常となったとしても、それでも尚、この六人は仲間だということ……そういう意味だということ。

解っているのかもしれないし、解っていないのかもしれない。

いや、もしかしたら、そんな理屈なんて、とっても小っっぱけで、どうでもいいことなのかもしれない。

だけど……、それでも……、先輩たちに仲間だと言ってもらえたことが、今の俺には嬉しかった。

この先のことなんて解らない。

だけど、その解らないこの先も、先輩たちと仲間でい続けたい。

その気持ちだけで、今は十分なのかもしれない……。

*

「さあ！ 皆さん！ 練習しましょう！ 練習！」

「ええ〜！ 今日はお茶だけでいいよ〜」

「時差ボケだし〜」

#5 君は雨の日に

雨は好きではないが、雨音は嫌いではない。

朝食を終えると、リビングのテーブルに頬杖をつき、目の前の窓から見える庭を眺める。

すると、普段からガーデニングが趣味の母さんの手入れによって、色とりどりに咲いている花が、その雨の銀色に包まれていた。

（おっ！ 今の表現、詩っぽくね！？）

「って、何くだらないこと考えてるの！」

そう言う姉さんは、『パスン』と俺の頭に手を置いた。

「くだらないことって何で解るんだよ！？」

そのまま頭を撫でられながら、そう反論する。

「あんたの考えてることくらい、顔を見たら一目瞭然だって！」

しかし姉さんは、そう言ってケラケラと笑った。

「悪かったよ、単純で……」

だから、わざとそう不貞腐れてみたが、相変わらず姉さんは笑っている。

「そんなことより、学校はいいのか？」

姉さんが指を指す先にある掛け時計は、既に8時を回っていた。

「しゃーねえ。そろそろ行くか……」

そう呟き、やっと重い腰を上げる。

八時を回ったところで、家から学校までの距離なら、ゆっくり歩いたって朝のショート・ホームルームには余裕で間に合う。

その近さもまた、俺が桜が丘を選んだ理由の一つだった。

それは以前、軽音部の先輩たちが家に来た時、唯先輩から『こんなに近ければ、朝いくらでも寝坊できるね』なんて羨ましがられたくらいだ。

ただ寝坊は、した時点で、どんなに近くても遅刻であることに変わりはないのだが……。

その時も、いつもの如く口にはしなかった。

玄関に置いておいた、学校指定のバッグと、キーボードを入れたキヤリングケースを手に、ドアを開ける。

やはりそこは、さっきまで見ていた光景のとおり、土砂降りの雨だった。

（まあ、当たり前か……）

右手で傘を差し、左の肩にバッグをかけ、左手でキャリングケースを転がすように引っ張る。

こんな時、キャスター付きなのは有り難い。

キーボードはそれだけでも十七キロの重量がある。

とてもではないが、こんな雨の中、担いで移動するのは負担が大きい。

俺のケースは防水加工のハードタイプなので、キーボードと合わせると二十キロ近くまで重量が増えるが、その分、転がして移動できることと、防水処置を講じる必要がないことを差し引いても、かなり実用的だと言える。

*

いつもなら学校に着いたら、先ず職員室に行き、部室の鍵を借りる。部室にキーボードを置きに行くためと、時間的に余裕があれば、そのまま朝練をするためだ。

ただ今朝は、家を出たのが既に八時過ぎだったため、直接教室へと向かった。

ショート・ホームルームには間に合うが、それでも部室を往復するとなるとギリギリだと判断したからだ。

（まあ、キーボードを置きに行くのはショート・ホームが終わってからでいいか……）

そう決断し、とりあえずキャリングケースを席の後ろへ置いた。

幸いにも俺の席は、真ん中の列ながらも一番後ろだったため、スペースに問題はない。

ショート・ホームルームが終われば、一時間目までは十五分ある。

それだけあれば、職員室を経由して部室までを往復するのに十分だろう。

(……………?)

そんなことを考えながら、ボーツと担任の話に耳を傾ける。

役員を決めたり、クラスでの行動を決めたりする、クラス委員主導の週一のロング・ホームルームと違って、毎朝担任によって行われるショート・ホームルームは、職員会議などで決まった連絡事項や、今後の予定や注意事項などを生徒たちに伝える、言わば定期連絡みたいなもので、その多くが、聞き流してもさほどの差し支えもないことばかり……だと、個人的には解釈している。

(……………?)

教壇の担任はいつもと同じように、坦々と自分の職務を遂行している。

しかし、いつもと違うこと……漠然とした違和感が俺を襲っていた。

いや、漠然と……ではない。

明らかなる違和感がある。

(……………?)

ふと顔を右に向ける。

俺と目が合ったクラスメイトが、慌てたようにその目を逸らす。

左に顔を向ける。

今度は別のクラスメイトと目が合い、やはりその瞬間に目を逸らされた。

更に、次は右斜め前に視線を移す。

(まただ……………)

次は左斜め前に……………。

その次は右……………。

その次は左……………。

その次は右……………。

その次は左……………。

チラチラチラチラと視線を変えてみる。

自意識過剰でなければ、クラスメイトたちの殆どが俺に注目している……ように感じられる。

俺のクラスは俺以外、全て女子だが、その女子の殆どから注目されるなど、俺の人生において経験がない。

つまりは……、

（ワケ解んねえ……）

というところだ。

もつとも、そのクラスメイトたちが注目していたのは、実際には俺ではなく、俺の後ろに鎮座しているキャリングケースだったと知ったのは、ショート・ホームルームが終わってからのことだった……。

「乾くんで、やっぱり軽音部だったんだね！」

「このケースに楽器が入ってるの？」

「ええ〜！ これって、キーボードなんだ〜！」

「キーボードってことは、もしかして子供の頃にピアノとか習っていたの？」

「今はどんな曲を弾いてるの？」

ショート・ホームルームが終わるや否や、もう蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。

正直ここまで、クラスメイトたちが軽音部やキーボードに興味を示すとは思っておらず、それは新しい驚きではあったが、それよりもシヨックだったのが、俺が軽音部部員だという事実が、入部して二ヶ月が経った今ですら、クラスメイトたちの間では噂の域程にしか浸透していないという現実だった。

（もしかして俺って、自分で思っている以上に、存在感がないのか……？）

嬉しいような、悲しいような、複雑な心境だった。

*

結局その騒ぎのせいで、キーボードを部室に持って行くことができたのは、一時間目が終わってからのことだった。

部室の鍵を借りるため職員室に向かったが、それは途中で用なしとなる。

職員室の出入り口から梓先輩が出てきたからだ。

「オミくん！」

梓先輩はそう声をかけると、小走りに近づいて来た。

「梓先輩、おはようございます」

「おはよう、オミくん。あっ！もしかして、今から部室に行く？」

梓先輩がそう言ったのは、俺が左手で引っ張っているキーボードが

目に映ったからだろう。

「ええ。今日は学校に来るのが遅くて、部室に寄れなかったんですよ」

「ならちようど良かった。私も今から部室に行くところだったの。今朝、部室に忘れ物をしちゃって……」

そう言つて、梓先輩は右手で部室の鍵を摘むと、俺の目の高さで振つてみせた。

要は、鍵を借りに行く手間が省けたというわけだ。

「だからつて、私たちまで忘れちゃいませんか？」

まるで棒読みの如く、抑揚のない声が背中に届いた。

振り向けば、ニヤニヤと笑う純先輩と、ニコニコと笑う憂先輩がいる。

まあ、笑っていることに変わりはないのだが……。

「何ですか、それ……？」

だから、わざと呆れたような口調で、そう返答する。

「だあゝつてさゝ、梓が『部室に忘れ物したから取りに行くの着いて来て』つて懇願するから来てみれば、今度は私たちのほうが忘れられそうだったんだもん！」

「そんなこと言ってます！ もう……、私は『いい』って言ったのに、純が『行く』って着いて来たんでしょ」

梓先輩の口真似を取り入れながら抗議する純先輩に、今度は梓先輩が反論した。

そしてそのやり取りを、憂先輩はやっぱり嬉しそうに見つめている。

「どお〜ちだって同じだよ。それとも私たちが着いて来たら、お邪魔かしら〜？」

純先輩が相変わらずのニヤニヤ笑顔で、そうからかってくる。

「もう！ そんなわけないでしょ！ 早く行くよ！」

少しだけ頬を赤く染め、梓先輩は先頭に立って階段を昇っていく。

その後ろを、キャリングケースを担いで俺が続き、そのまた後ろを憂先輩と純先輩が並んで続く。

階段を昇りきったところで、一足早く昇っていた梓先輩から「何……、これ……？」という呟くような声が聞こえてきたのは、そのすぐ後のことだった。

顔を上げると、目の前には梓先輩の背中が見える。

鍵とドアを開けた梓先輩は、文字通りそこに立ち尽くしていた。

「どうしたんですか？ 梓先輩」

そう声をかけるが、梓先輩本人は言葉すら失っているようだ。

「梓ちゃん！？」

「忘れ物あった？」

俺の背中から、追いついてきた憂先輩と純先輩も声をかける。

しかし依然、梓先輩は立ち尽くしたままだった。

とにかくこのままでは埒が明かないと、俺は梓先輩の身体を軽く押し、誘うように部室の中へと移動させ、自らもそのまま部室へと入った。

が……。

（なっ……、何だ……？ 何だ、これは！？）

「梓ちゃん？ オミくん？」

「ちょっと！ 二人とも、どうしちゃったのさ？」

部室の中を目にした俺と梓先輩からその後、何の反応も返ってこないことを訝しんだのか、俺に続き憂先輩と純先輩も部室へと足を踏み入れた。

が……。

絶句……。

四人が暫し言葉を失い、その目の前の光景に自我を奪われた……。

二本のマイクスタンドにはそれぞれ、ニットのベストとブラウスが、そしてその横の譜面台には、スカートが掛けられてある。

「何これ……？」

「さあ……？」

「誰の……？」

「解んない……。本当に誰！？ここにこんなもの干すなんて！」

純先輩の呟きに答えていくうち、遂には梓先輩も怒りが湧いてきたようだ……。

しかし……。

（本当に誰なんだろうか……？ だいたい音楽準備室に女子用の制服って……）

再び静寂が部屋を包む。

そして次に口を開いたのは、純先輩だった。

「これ……、何かのおまじないかも……」

「おまじない！？」

その言葉に、梓先輩も思わず反応する。

「けど今時、おまじないって……!？」

「だけど他に考えられる？　これはきつと軽音部の誰かを怨んで、呪いをかけてるんだよ！」

「何ですか！」

「だって、わざわざ音楽準備室に干すなんて……。いったい、誰が誰を呪っているのかしら……」

純先輩はそう言うと、いかにも名探偵が推理したかのように、胸の前で腕を組み、片手で顎を撫でる。

（つて、そりゃテレビの観すぎだろ……）

しかし、梓先輩の表情も神妙なもののへと変わる。

憂先輩も冷や汗をかいているようだ。

「とにかく！　一先ず教室に戻りましょう。もうすぐ二時間目も始まるし、放課後にでも先輩たちに相談するとして……」

そう提案したのは、今の情報だけでは真相には辿り着けないと判断したからだ。

先輩たちなら、もしかしたら心当たりがあるかもしれない。

「そうだね……」

俺の意図を察してくれたかどうかは解らないが、梓先輩もそう同意してくれた。

どのみち時間的にも余裕がない以上、これ以上ここにいることができないのも事実なのだから、仕方がないことでもあるのだが……。

後ろ髪を引かれる思いではあったが、俺たちはそのまま部室を後にした。

*

『幽霊の正体見たり、枯れ尾花』という諺がある。

薄気味の悪い幽霊も、その正体を見てみれば、風に靡く枯れ尾花だった……という、言わば、真相を知ってしまえば至って他愛ないということだ。

つまりは今回の、純先輩曰くの『軽音部への呪い』も、その真相は、唯先輩が登校中、ギターを濡らさないように注意していたため、自分びしょ濡れになってしまい、そのびしゃびしゃの制服を乾かすため、部室に干してあったということだったのだ。

「全く人騒がせな……」

「本当ですよ……」

事の顛末を聞いた俺と梓先輩が口々に愚痴る。

梓先輩に至っては、純先輩の予想まで紹介する程だ。

「ところで、オミは防水タイプのハードケースだから良いとして、梓は大丈夫だったのか？」

やはり楽器はその種類にかかわらず、皆一様に水分や湿気には弱いものらしく、濤先輩がそう訊ねる。

「はい！ 私はギターケース用のレインコートを使っていますから！」

そう言う梓先輩に釣られて、先輩共々梓先輩のギターに目をやると、確かに梓先輩のギター……いや、ギターの入ったギターケースは、いつもとは違うカバーで被われていた。

「へえ、そういうのもあるんですね」

初めて見る代物に、素直にそう感心する。

「うん！ 私も初めて見たよ！」

（いや……、唯先輩はギタリストなんじゃあ……？）

しかし、もしかしたらわりとレアなものなのかもしれない……。

しかし俺と唯先輩の素直な感嘆が、何やら梓先輩に火をつけてしまった……。

突然、梓先輩が、嬉々として語り始める。

「ネットで買ったんです！ 結構便利ですよ。三千円するのがイチキュッパで、おまけにギター用の乾燥剤も付いてきたんです。それから、これもネットで買ったんですけど、ほら！ 壁にくつつくギ

ターハンガー！ 肉球の形をしてるんです。あつ！ これが指が大きくなる強化グッズで。他にはですね、寝ている間にリズム感が養えるCDなんてのもあるんです。それから、これが……」

止まらない……。

確かに乾燥剤の辺りまでは便利だとも思ったが……。

『へえ〜！』と感心する唯先輩とムギ先輩とは対照的に、澪先輩はまるで地雷でも踏んだかのように困った表情を浮かべているし、律先輩に至っては明らかに呆れ顔だ……。

「なあ、梓……。それ皆、役に立ったのか？」

まあ、結局最後は澪先輩のその質問で、梓先輩も我に返ったのだが……。

「まつ、まあ！ それにしても、真相が解ったんだから、良かったですよ！ うん、良かった！ 良かった！」

気まずそうに頬を紅潮させる梓先輩を気遣い、そう話を元へと戻す。

「憂……。言いだせなかったんだね〜」

しかし今度は、俺の発言に、張本人の唯先輩が若干落ち込み気味に呟いた。

「でも見直しました！ 身体を張ってギターを守るなんて！」

だからか、梓先輩が空気を読んだかのように、そうフォローを入れ

る。

「でへへ。あずにゃん、もつと褒めてえ」

その梓先輩の言葉に気を良くしたのか、唯先輩が途端にデレデレとした顔になった。

（ああ……、せっかくの梓先輩の好意が……）

あまりの立ち直りの早さに、梓先輩も呆れ顔になる。

それはまるで、『心配した私がバカだった』とでも言いた気な表情だ。

「あつ、けど唯先輩！ この季節は気をつけたほうがいいですよ」

気を取り直して、俺は付け焼き刃ながらも最近仕入れた知識を、「ほえっ？ 何で？」と訊ねる唯先輩に披露する。

「ギターとかつて、濡れたまま放置していると、フィンガー・ボードに黴が生えるらしいですよ」

「ええっ！？ 本当なの？」

唯先輩の悲鳴に、梓先輩も「本当ですよ」と頷いてみせる。

「ちょっと確認する！」

居ても立ってもいられないのか、慌てて唯先輩はギターに駆け寄った。

（さすがの唯先輩も、ギターのことになるかと必死なんだな……）

唯先輩が、お菓子やお茶よりも優先するものなんて、もしかしたらギターくらいなのかもしれない……なんて思ったら、さすがに失礼かもしれないが。

唯先輩の後ろからは梓先輩が、唯先輩のギターと一緒に覗こうとしている。

何だかんだと言っても、やっぱり梓先輩も唯先輩のことが心配だということなのだろう。

その後ろから俺も一緒に覗いてみる。

「ケースを開けたらベースが黴だらけ……」

「ひいっ！！」

何やら、更に後ろからは、お約束の展開が始まっているらしいが……。

「まさかギー太が変わり果てた姿に……」

そんな心配を呟きながらケースを開ける唯先輩だったが、結果的には凄惨な惨状には至ってはいなかった。

しかし梓先輩からのアドバイスにより、弦は交換したほうが良いとすることで、唯先輩は道具を取り出す。

ギターを前に床に座り込み、ニッパーで弦を切る。

（あれ！？ ギターの弦って、確か張ったまま切ったら危ないんじゃないあ……？）

ピンと張った弦を切れば、その弦が跳ねることくらい、ギターを触ったことがない俺でも想像に難くない。

「くっ、来るな……」

事実、当の唯先輩も、そう呟きながら、かなり警戒している様子だ。

唯先輩の持つニッパーが弦を切る。

と、同時に案の定、切られた弦は跳ね上がり、そのうちの一本は唯先輩に目がけてやって来る。

「はう」

唯先輩のふざけた悲鳴が漏れる。

そして……。

その弦はペチンと唯先輩の頬を撫でた。

「むふっ！ ギー太！ 私を攻撃してくるとは……。なかなかやるな！」

「もう！ 唯先輩！ 弦を切る時はペグを弛めてからじゃないと、危ないですよ！」

一人ミニコントよろしく、ギターと戯れる唯先輩に、梓先輩が当然の注意をツッコむ。

しかし、唯先輩が「おお！ そうだった！」と声を上げていたところを見ると、本当に忘れていたのだろう。

それでもその次の瞬間には、唯先輩の表情が慈愛に満ちたものへと変わる。

優しくギターを撫で、

「さあ、ギー太。今、新しい弦に着替えさせてあげるからね」

と、慈しむように語りかけている。

それはまるで、愛しい誰かを想う女性の表情だった。

「大切にするのは良いですけど、いちいち弦を張り替えるくらいで、そこまで楽しそうに話しかけなくても……」

ふと、梓先輩の弦音が耳に届いた。

そんな梓先輩が、どことなく寂しそうに見えたのは俺だけなのだろうか……？

いや、よく周りを見渡してみると、唯先輩を始め、他の先輩たちも、きょんとした表情を浮かべている。

そして一瞬の間の後、唯先輩が頬を赤らめながら……。

「あずにゃん……」

「はい……？」

「ヤキモチ……？」

「ふえゝっ！」

予想外の言葉に、梓先輩の表情は、一気に焦りの色に染まる。

「ほおゝ！ 梓と唯とギー太は三角関係かゝ」

こついう話に割り込むのは律先輩の得意技だ。

「トライアングル・ラブ……そういう歌詞も、せつなくていいかも！」

今正に、我が部の詩人の頭の上で、大きな電球が“ピカッ”と光った……ように見えた。

梓先輩は二人に対し、「何でそうなるんですか！」とか「漣先輩まで……」とか、必死に反論していたが……。

「もう！ あずにゃんたら……。早く言ってくれば良いのにゝ」

身悶えながらそう言う唯先輩に、遂には梓先輩の表情から生気が消えた。

*

結論から言えば、結局今日も練習はできなかった。

唯先輩が弦を張り替えた時、それを見計らったかのように雨が上がり、部室には久しぶりの陽の光が窓から差し込んでいた。

とは言っても、既にその光もオレンジ色ではあったのだが……。

「さあ！ 雨も上がったことだし、気分良く練習でもしよう！」

そう言う澪先輩に異を唱えたのは誰あろう、つい今しがたまでギターの弦を張り替えていた唯先輩だった。

もつとも、室内で行う軽音部の練習に、天候は関係ないのだが、やはり澪先輩も朝からの雨には気分が鬱々としていたのだろう。

「今の内に帰らなきゃ！」

だがしかし、それが唯先輩からの返答だった。

「ギー太が濡れちゃうよ～」というのが理由らしい。

「またギー太、ギー太って……」

梓先輩が呟く。

するとその梓先輩の肩に手を掛け、唯先輩は満面の笑みで言い放った。

「あずにゃんはあずにゃんで大切に思ってるからね」

心なしか、その時の梓先輩の背中が震え上がったように見えたのは、俺だけなのだろうか……？

「早く！ 早く！」

唯先輩は、しかしその直後から、まるで今までののんびりまったりムードが嘘だったかのように、突然身のこなしが機敏になる。

（ほんと唯先輩って、ギターのことになるとテキパキ動けるんだよね……）

それはまるで人が変わったように……。

ある意味そこは、見習うべきところ……なのかもしれない。

いや……、たぶん……。

*

下駄箱で上履きから靴に履き替え、先輩たちが来るのを待つ。

それもまた、いつものことだった。

そこに靴を履き替えた先輩たちが現れ、そのまま肩を並べて家路に着く。

それもまた、いつものこと……となるはずだった。

しかし今日は、その“いつものこと”とは少し違う展開が俺を待ち

受けていた。

後になって思い返した時、きっとその全ては、今正にここから始まったのだと気づくのだろうが、それはまた先の話だ。

先輩たちを待つ俺の前に現れたのは、待ち人ではなく、同じクラスの女子生徒だった。

もつとも、同じクラスの生徒は皆、俺以外女子なのだが……。

肩まで伸ばした髪は艶のある黒で、見るからに清潔感が漂っている。小さな顔のわりには、かけている眼鏡が少し大きめで、その顔もほんのりと頬に残るそばかすのせいかな、年齢よりもまだ幼く見える。

確か彼女は……。

「佐久間さん……だよね？」

不意に『乾くん！』と声をかけられたことに戸惑いながらも、俺の脳内データが一瞬で彼女の顔を検索し、ヒットした名前が“佐久間 泉”だった。

クラスではわりと、おとなしい印象を受ける。

と言っても、いつも一人でいるというわけではなく、逆に友達も少なくはないようだ。

そしていつも笑顔を絶やさない……そんなふうにさえ見える。

ただ、皆と一緒にになって騒ぐタイプではなく、寧ろそういう人たちを、一步引いたところから微笑ましく見ている……そんなタイプだ。まあ、全ては俺のイメージだが……。

「乾くんに話があつて……」

だから俺が帰るのを待っていた……ということだった。

少し赤みを帯びた頬を強張らせ、だけど目つきは真剣なそれで、少し下から、だけど真っ直ぐに、俺の目を見つめてきた。

その気迫に若干気圧され、俺は必死で彼女が何を言おうとしているのかに想いを巡らす。

（もしかして怒っているのか……？）

しかし怒らせる程、接触した憶えもない。

（それに、怒ってるようにも見えないよな……）

ただ、相当な決意を込めないと言いくいことは確かだろう。

（頼み事が……？）

それもしかしたら、本来なら他人に頼むこと自体、憚られる程の無理難題なのかもしれない。

（けど、だったら何でわざわざ俺に……？）

それくらいの大事なら、今まで会話らしい会話すら交わしたことがない俺よりも、普段から仲の良い友達に頼んだほうが自然だ。

（それとも女同士だからこそ話せないようなことなのか……？）

とにかく、半ば緊張しながらも、結局は佐久間さんの出方を待つしかない現状に、時間の流れもゆっくりに感じる。

「あつ、あのね……」

どのくらいの間があっただろうか……。

遂に佐久間さんは口を開いた。

「うつ、うん……」

口の中がカラカラなのに、唾も出てこない。

「私と付き合ってほしいの！」

そう言っつて佐久間さんは、目を固く閉じ、そのまま頭を下げた。

「……………？」

「……………」

二人の間を沈黙が流れる。

しかし俺はその言葉に、実は安堵していた。

「何だ……、そんなことだったのか……」

そう言葉を漏らし、ホッと胸を撫で下ろす。

「えっ!？」

思わず……といった感じで、佐久間さんも顔を上げた。

「何を言われるのかと緊張しちゃったよ」

「あつ、あの……、じゃつ、じゃあ……」

「いいよ！俺で良かったらね」

そして満面の笑みでサムズ・アップまでしてみせた。

「あつ、じゃつ、じゃあ、明日の土曜日なんて空いてるかな？」

さつきまでとは違い、佐久間さんも明るく笑う。

その笑顔は、俺が知っているいつもの佐久間さんだった。

「うん、いいよ。で、時間は？」

「じゃあ、一時に商店街の南口で！」

「OK！」

そして今度は右手の親指と人差し指で丸を作った。

その後、佐久間さんは、正門を出て、見えなくなるまで、嬉しそうに手を振っていた。

（女の子と二人っきりなんて、デートみたいだな）

まあ、向こうにその気はないだろうが、他人から見ればそう見えるだろう。

一人の男として、それは……悪くない。

「いつや！ 楽しそうだね」

その声に振り向くと、いつの間に来たのか、先輩たちが勢揃いしていた。

「りっ、律先輩！ 何ですか、それは！」

「青春だつて言つてんだよ！」

そして俺の肩をポンツと叩く。

「けど知らなかったな。オミは、ああいう子がタイプだったのか」

漣先輩も、どこことなく嬉しそうだ。

「タイプって……。明日一日、付き合うだけじゃないですか。大袈裟なんだから」

（まあ、どこへ付き合うのかまでは聞いてなかったけど……）

でもそれは、当日のお楽しみに……なんていうのも、悪くない。

なんて考えていると、途端に先輩たちの顔が曇り始めた。

「ねっ、ねえ、オミくん……。一応聞くけど“付き合う”って意味、解ってOKしたのよね？」

不安そうにムギ先輩が訊ねてくる。

「えっ？ 意味……？」

（意味も何も“付き合う”って、どこかへ一緒に行くってことなんじゃあ……？）

「まさか、どこかへ一緒に行くだけなんて思っていないよね？」

今度は梓先輩も……。

（な……、何……？ 何だ！！）

不穏な空気が辺りを支配する。

再び張り詰めるような緊張に襲われた。

そして……。

「あああーっ！！」

理解した。

今、高速で理解した。

佐久間さんが言ったことの本当の意味を。

律先輩の、漣先輩の、ムギ先輩の、梓先輩の言葉の意味を。

そして俺自身が、いかに鈍感で、唐変木だったかを。

「どっ、どうしよう……」

（そうか……、あれは……）

「まさかオミがここまでバカだったとはな」

律先輩の軽口も、今は言い返す気力がない。

いや、それどころか、返す言葉すら……ない。

「とにかく、オミの気持ちはどうなんだ？」

がつくりと頂垂れる俺に、漣先輩が問いかける。

「気持ち……？」

しかし思うように頭が回転しない。

「オミくんは、あの子と恋人になる気はあるの？」

俺の心境を察したのか、ムギ先輩がストレートに聞いてきた。

そして、俺は……力なく頭を左右に振った。

その様子に、梓先輩が大きな溜め息を漏らす。

「とりあえず約束したんだし、明日は時間に待ち合わせ場所に行つて、頃合いを見て正直に打ち明けるんだな」

そして澪先輩の言葉に、小さく「はい」と頷いた……。

*

商店街の南口に着いたのは、約束の時間の五分前だった。

しかし佐久間さんはもう、既に来て待っている。

『私もちょうど今来たばかりだから……』

そんな言葉を間に受ける程、俺は鈍感ではない。

きつともっとずっと前から待っていたのだろう。

（つて、十分鈍感か……）

笑顔で迎えてくれる佐久間さんに、少々心が痛む。

この期に及んで往生際が悪いと思われるかもしれないが、もしかしたら佐久間さんも俺と同じ意味で『付き合つて』という言葉を使ったのかもしれない……なんて考えたりもしたが、その笑顔が僅かな可能性を否定していた。

とりあえず雨なので商店街の中を歩く。

不思議なもので、先輩たちとなら気軽に話ができるのに、今は全く話題が出てこない。

こんな時、男のほうがりードしなくてはいけないのだろうが、残念ながら、その手のことは知識も経験も皆無に近い。

いや、皆無だ……。

しかも俺には、正直に『勘違いだった』と打ち明けなくてはいけないという任務まである。

どうすれば自然な形で、その空気を作れるのか……。

問題は山積みだ……。

「ねえ、ここ寄ってかない？」

佐久間さんが指を指したのはゲームセンターだった。

まあ、高校生が立ち寄るには定番だろう。

「ああ、いいよ」

そう言って、並んで中へと入った。

「私ね、実はゲームセンターは初めてなんだ」

佐久間さんは、そう言って目を輝かせる。

「へえ、そうなんだ」

「乾くんは？」

「中学の時はたまに……。高校に入ってから……。ああ、この前、軽音部の先輩たちと一緒に来たよ」

あれは確か、俺が追試に合格した日だった。

ささやかな打ち上げ……。という名目だったが、遊び倒したことに変わりはない。

「軽音部……」

「うん！ ああ、そう言えば、その時はムギ先輩がゲーセン初めてだと言って、目を輝かせてたよ」

「ムギ……。先輩……？」

「う……。うん……？」

（何か急にテンションが下がったか！？）

「とっ、とにかく！ 遊ぼうぜ！」

佐久間さんのテンションが急に下がったことに焦りつつ、そう促した。

「私、これがしたい！」

佐久間さんがそう言ったのは、UFOキャッチャーだった。

「これって、やり始めたら結構熱くなるんだよね」

「うん！ それ解る！」

佐久間さんの表情に笑みが戻った。

百円を入れ、ボタンでクレーンを操る。

しかしなかなか取れない。

積み上げられた百円玉が一枚、また一枚と消えていく。

最初に言ったとおり、なかなか熱くなっているようだ。

「佐久間さん、ちょっと変わって！」

そう言って、佐久間さんと立ち位置が変わる。

最初のボタンでクレーンを奥へ、そして次のボタンでクレーンを左へと動かす。

さっきまで佐久間さんが狙っていた少し大きめのテディベア擬きのぬいぐるみにクレーンが掛かる。

そのままクレーンはぬいぐるみを挟み、吊り上げると元の位置へと戻り、空洞の中へとそれを落とした。

ガコンという音とともに、ぬいぐるみが落ちてくる。

そのぬいぐるみを手にした佐久間さんのテンションは、一気に上がった。

「うわー！　ありがとう、乾くん！」

そう言って、そのぬいぐるみを抱きしめる。

「まっ、こんなもんさ！」

そう余裕ぶっではいたが、内心はホッとしていた……。

「乾くん、上手なんだね」

「へへ……、まあね。ああ……、けどこの前は唯先輩に負けちゃったけどね」

前回、軽音部で来た時、唯先輩、律先輩、零先輩と四人で、誰が一番少ない金額で取れるかを競い、結局唯先輩が百円で取ったため、俺は負けてしまった。

その後も、殆どノーマスで取っていたことから、唯先輩はUFOキヤッチャーを得意としているのかもしれない。

「唯……、先輩……？」

「ああ、唯先輩って意外にこれ上手なんだよな」

「そう……、なんだ……」

「えっ……?」

すると再び佐久間さんのテンションが下がる。

(何なんだよ? いったい……)

「これ、やってみない?」

そう誘ったのは、画面に出てくる音符のとおりには太鼓を叩くというやつだ。

「あつ、うつ、うん……。私にできるかな……」

佐久間さんは自信なげにそう呟く。

「大丈夫だよ! 普段からドラム叩いてる律先輩だって、結果は散々だったんだから!」

だからそう言っただけで元気づけようとした……のだが。

「律……、先輩……?」

「えっ!? うつ、うん……」

また佐久間さんの表情は、沈みがちになった。

「あつ! 私、それよりもプリクラしたいな!」

ただどすぐ次には、努めて明るくそう振る舞う。

普段ならブリクラなんて照れて拒むのだが、せっかく佐久間さんの機嫌が治りそうだったので、今回は快くそれに応じた。

二人並んで写真を撮る。

そしてその写真に、ペンでいろいろと書き足して編集をする。

眉毛を太くしたり、落書きをしたり、豚の鼻をつけたり、そのデコレーションはかなり豊富だ。

そういえば、前は六人で撮ったっけ……。

その時のことを思い出すと、今でも吹き出しそうになる。

「えっ！？ 何？ 思い出し笑い？」

それを勘づかれたのか、佐久間さんから指摘されてしまった。

「いや……、前はさ、梓先輩の頭に猫耳を付けたら、梓先輩が怒っちゃってさ」

だからその時の話を披露した。

ただ、笑ってほしかったから……。

「梓……、先輩……？」

「うっ、うん……」

だけど結局、その後のプリクラは一言も喋ることなく終わった……。かなり豊富だと感じたデコレーションも、殆ど使うことはなく……。

「ねっ、ねえ！ 映画見に行かない？」

気分を変えるためか、空気を変えるためか、佐久間さんがそう提案してきた。

「ああ、いいよ。何か見たい映画あるの？」

「うん！ シザー・ダンディーなんてどうかな？」

「シザー・ダンディーって、ホラーじゃん！ 佐久間さん、ホラー好きなの？」

「うん！ 乾くんは苦手かな？」

（意外な一面だな……）

普段の印象だと、佐久間さんはもっとファンタジー系の類いが好きだと思っていたが、どうやらそうではないらしい。

「いや、大丈夫だよ」

そう答えて、映画館へと並んで歩く。

「本当はね、女の子らしくメルヘンなものを選んだほうが良いかなって思っただけで、乾くんには本当の私を知ってほしいなっと思

「つたんだ……」

隣でそう言いながら、頬を赤らめ「へへへ」と俯く佐久間さんを横目で見て、少しドキッとしたが、それが余計に心の痛みに拍車をかけた。

「いや、趣味なんて人それぞれだから面白いんじゃない？」

だからそう言っ、その心の痛みを誤魔化す。

「そつ、そうかな……」

「そうそう！ 澪先輩なんて、逆に怖いものが全くダメで、ホラー映画なんて見たら絶対に気絶しちゃうだろうし、だけど書いてくる歌詞はメルヘン調だもん！」

「澪……、先輩……？」

「えっ？ うつ、うん……」

会話を弾ませようと試みるも、何故かまた佐久間さんのテンションが下がったように見える。

「ねっ、ねえ！ やっぱり映画はやめよう！」

突然、立ち止まると、佐久間さんはそう言っ、て今来た道を戻り始めた。

「ちよっ、どうしたの？」

「よく考えたら、開演時間までまだだいぶあるし……」

そう言っ腕時計を見る仕草がわざとらしく見える。

「ねえ、さつきから様子がおかしいけど、俺、何か気に障るようなこと言っただかな？」

ワケが解らず、直接そう聞いてみた。

だが佐久間さんは、背中を震わせながら立ち尽くしている。

「ねっ、ねえ……」

「おかしい……かな？」

そして静かに、佐久間さんからそう返ってきた。

「いや……、急に元気がなくなったりするから……。今だって……」

「おかしいのは乾くんのほうだと思っけど……」

（えっ！俺が……！？）

俺がおかしい……佐久間さんは確かにそう言ったが、心当たりはない。

極めて平常にしてきたはずだった。

「俺がおかしいって、何で？」

「無自覚……なんだね」

「無自覚？」

(……………！？)

そう言ってこちらを振り向いた佐久間さんの目は、大粒の涙で滲んでいた。

(泣いてる……！？ 何で？)

「佐久間さん……………」

二人の間を沈黙が流れる。

意味が解らず、言葉も返せない。

ただ一つだけ確実に言えることは、俺が佐久間さんを傷つけたということらしかった。

しかも俺はそのことを自覚していない。

「今日はありがとう……………」

佐久間さんはそう言っ、再び俺に背を向けた。

「あつ、あの…………。佐久間さん……………」

だけど、佐久間さんは無言で歩き始める。

追い駆ければ追いつける。

声をかければ必ず届く。

だけど俺にはそれができなかった。

ただ佐久間さんを傷つけたという事実だけが、いつまでも心の中に蠢いている。

商店街の屋根を打ちつける雨の音だけが、やけに大きく響いていた……。

*

雨は好きではないが、雨音は嫌いではない……はずだった。

しかし、今日の雨音は心に響く。

『おかしいのは乾くんのほうだと思っけど……』

『無自覚……なんだね』

一昨日の佐久間さんの言葉を、頭の中に何度も何度もリフレインさせる。

俺の何が佐久間さんを傷つけたのか……。

皆目見当もつかない。

「ふう」と溜め息を吐き、椅子に座ったままの状態で、一度大きく

上半身を伸ばす。

そしてまた、頬杖をつき、出口の見えない暗いトンネルに想いを巡らせた。

「オミくん！ 練習するよ」

声のほうへと、チラッと視線を動かすと、梓先輩が肩からギターを掛けて立っている。

「えっ!？」

「“えっ”じゃないでしょ！ 唯先輩のギターのオクターブ・チューニングも終わったし、練習するよ!」

そう言われて初めて、梓先輩の持つギターが、ムスタングではなくレスポールであることに気づいた。

「ああ……、そっすね……」

だがイマイチ覇気が入らない身体が重く、なかなか自分のキーボードまでは辿り着けない。

二日ぶりに会った佐久間さんとは、結局今朝から一言も言葉を交わしていない。

と言っても、明らかに無視をされているわけではない。

もともと俺は、クラスの女子たちとフレンドリーに話をするようなことはない。

特別、壁を作っている気はないが、やはり女性が相手だと気後れしてしまうのだろう。

だから実際、佐久間さんと初めて会話をしたのも、実は三日前の放課後の“あの時”だった。

故に、会話がないというよりは、元の状態に戻ったというほうが適切なのだ。

だが、だからといって、やはり気に懸かることに変わりはないのだが……。

「珍しいな……。オミが練習に反応しないなんて……」

いつもなら一度“練習”と聞けば、『待ってました!』と言わんばかりにキーボードに飛びつくため、澪先輩もそう感じたのだろう。

それは『先輩たちの気が変わらないうちに……』という思惑があったとのことなのだが、如何せん、今日は心ここにあらずで、練習をしても身が入らないだろう。

事実、休日だって一日もサボらなかった自宅での自主練も、昨日は早々に止めてしまったくらいだ。

何がいけなかったのか……？

佐久間さんのことばかりが、頭を巡る。

(とにかく、やっぱりちゃんと謝ったほうがいいのかな……)

しかし、何に対して謝るのかすら解らなかった。

「オミ！」

「へっ！？」

「“へっ”じゃないだろ！ “へっ”じゃあ！ 何、ボーツとしてんだよ！」

律先輩からの檄で我に返ると、先輩たちは皆一様に俺を見ている。

「本当に、いったいどうしたんだ？」

漣先輩は心配そうにそう訊ねてくるが、言えるはずもない。

（そりゃ言えねえよな……。女の子を泣かせといて、その理由も解らないなんて）

頭をガシガシと掻きむしり、今日何度目かの溜め息を吐く。

「すみません……。俺、今日は帰ります……」

もはや作り笑いもできず、長椅子に置いてあるバッグに手を掛ける。

「オミくん、キーボードは？」

ムギ先輩の言葉に、キーボードのことすら頭になかったことを認識させられる。

「あつ！ ああ……。外は雨だし、今日は置いて帰りますよ……」
とにかく早く一人になりたいくて、そう思いつくままに喋り、そのま
ま無言で部室を後にした。

*

下駄箱で靴を履き替え、校舎を出て傘を差す。

（ここで全てが始まったんだな……）

そして、そんなことをふと考える。

取り留めのない思い……。

後悔と責念……。

今更悩んでも仕方のないことなのに……。

だが、正門を出ようとしたその時だった。

「今日は早いんだね」

すると突然、後ろからそう声をかけられ、思わず歩を止めた。

果たしてその言葉は俺に対しての言葉なのだろうか？

俺に話しかける女子など、軽音部の先輩たちと他約二名の先輩たち
……くらいしか思いつかない。

いや、もう一人いた……。

だけど、その人は今、傷ついているはず……。

そしてその傷をつけた張本人は俺。

だから、その人が俺に声をかけてくるなんて有り得ないはずだった。

なのに何故か、確信していた。

その人だと……。

少し躊躇い、少し戸惑い、そして少し緊張しながら、だけど意を決して振り向いてみた。

そこにいたのは、つまりは確信どおりの人……佐久間さんだった。

「佐久間さん……」

だけど、せっかく佐久間さんのほうから声をかけてくれたというのに、俺は相変わらず気の利いたことも言えず、ただ名前を呼ぶだけで言葉は終わってしまふ。

今程、俺は自分のヘタレっぷりに情けなくなったことはない。

それでも伝えなくてはいけないことがある。

そう、伝えなくてはいけない。

体側につけた左の拳に力が入る。

「佐久間さん……、俺……」

「その前に……」

だけど俺の決意は佐久間さんの言葉に、あっさりと遮られた。

「その前に一つ、乾くんに聞きたいことがあるの……」

やはり真っ直ぐに、こちらを見据えている。

「何？」

「乾くん、今、好きな人いる？」

「えっ!？」

「正直に答えて!」

そう言われ、しかし思考はまとまらず、ただどありのままを言葉にする。

「それが“恋愛対象”としてって意味なら……、“今は”いないよ」

そして俺も、真っ直ぐに佐久間さんを見つめた。

「“今は”か……。つまりは私も対象外ってことね……」

「あっ! じっ、じめん……」

「バカ！」

「バツ、バカって……」

「悪くもないのに謝らないで」

「けど……、一昨日は泣かせちゃったし……」

「そうね……」

そこで佐久間さんは大きく息を吸い込み、そしてそれを吐き出すと、途端に優しい笑みを浮かべ……、

「あれは乾くんが、無神経なくせに優しくしてくれるからよ！」

そう言っつて、俺の前へと駆け出した。

「何だよ、それ……」

「嫉妬……かな」

「嫉妬……？」

「まあ、乾くんはもう少し、女心を勉強しないと、私とは付き合えないぞ！」

そしてまた、佐久間さんは笑った。

「女心……？ そりゃー、何回追試受けても受からないかもな……」

だから俺も笑ってみせる。

「じゃあ、乾くんが女心を理解できるまでは、ただの“友達”ってことにしといてあげるわ」

その言葉がきつと、佐久間さんなりの思いやり……だということは、いくら鈍感な俺でも理解できた。

*

『しどいよ！ 漣ちゃん！』

『うわっ！ なっ、なっ、なっ、何が！？』

『可哀想にエリザベス……。君は捨てられちゃうんだよ』

『雨に濡れるのが嫌だから、置いて帰るだけだ！！ 後、勝手に名前つけるな！』

「ふっ……」

心が軽くなると身体も軽くなるらしく、佐久間さんと正門で別れた後、俺は再び部室へと駆けて来た。

ドアを開けようとノブに手を掛けたところで、もう練習を終えたのか、唯先輩と漣先輩の声が聞こえ……。そしてその会話に、思わず吹き出してしまった。

『知らない人に声かけられても着いて行ったらダメだよ』

『何、言っただ……？』

『エリザベス。今夜はギー太と一夜を共にするんだ』

『だから名前つけるな！』

そんな二人の会話に、何故かホツとする。

手を掛けたノブを回し、ドアを押す。

先輩たちの顔が一斉に俺を見た。

「よお！ オミ。おっ帰りい〜！」

スティックで首筋を搔きながら、律先輩がニヤけてそう言った。

「何ですか、それ！」

そして俺は、至っていつもどおりに、そう返す。

「オミくん、帰って来るって言っただのよね〜」

ムギ先輩も嬉しそうだ。

「おっ、俺はただ……、そっ、そう！ よく考えたら俺のケースは防水加工のハードタイプだから、雨だからってキーボードを置いて帰る必要ないってことを思い出してですね〜、それで取りに帰ってきた……と」

だけど律先輩も、ムギ先輩も、ニヤニヤしっ放しだ。

そして律先輩が、スティックをクイクイツと動かし、窓を指した。

ムギ先輩も、その律先輩が指した窓の際へと移動して、俺を手招きしてみせる。

「だから何なんですか!？」

二人の意図が解らず、誘われるがままに、その窓へと行き、外を眺めてみた。

「その窓からはよく見えるんだよ。正門が……さ」

「……………!！」

狼狽を隠せず振り向くと、相変わらず律先輩とムギ先輩が笑っている。

「それで彼女とは上手くいったの？」

「まっ、まあ……、“友達”ってことで……」

（あっ!？）

ムギ先輩の問いかけに思わず素直に答えてしまい、ますます律先輩をニヤけさせてしまった。

「けど、一番心配していたのは、りっちゃんだから」

ただムギ先輩に、耳元でそう囁かれ、俺は誰にも見られないよう

小さく……笑った。

*

（ベースだからエリザベスってことは……）

『梓ちゃん！ 凄く良い名前だと思うわ』

『ムギ先輩！ 人の心の中を読まないでください！』

（俺のはCX-3だから……フジサン）

『オミくん、それはいろんな意味で問題が……』

『ムギ先輩！ 俺の心の中まで読まないでください！』

そんなやり取りの末、今日もまたいつもの如く、六人揃って帰宅する。

普段と違うことと言えば、唯先輩と澪先輩がバッグしか持ってないということくらいだろう。

「あつ！ 唯、危ない！」

「ちょっと！ 唯ちゃん！」

いや、もう一つ違うことがあった。

ギターを学校に置いてきた唯先輩は、そのギターが心配で心配で仕方がないのか、フラフラフラフラと足取りも覚束ない様子だ。

「唯先輩、あれでちゃんと帰れるんですかね？」

だから、そんな心配も口をついて出てしまう。

「とにかく唯先輩の家までは、私が着いて行くから」

梓先輩も心配そうだ。

「たった一日、学校に置いて帰るだけなのにな」

漣先輩は呆れ顔だ。

「確かに、部室には鍵がかかるし、守衛さんだっているし、安全なことこの上ないですもんね……」

しかしそんな道理や理屈が通じないのが“愛”というものなのだろう……か？

「まあ、何やかんやで唯もギターを大切にしているもんさ」

「でも“大切にする”のベクトルが違うけどな！」

漣先輩に律先輩はそう答えて、そして二人で笑う。

洋服を着せたり、添い寝したり、話しかけたり、名前をつけたり……とにかく唯先輩は、ギターを擬人化して扱う。

それが唯先輩流の、楽器に対する愛情なのだろう。

そんな話を聞いて、つい無意識に、俺の左手は、さっきまで引いていたキャリングケースを撫でていた……。

#6 前へ進むために

現在、俺が在籍している軽音部では、部員六名で“放課後ティータム”というバンドを結成している。

元々は廃部寸前だった軽音部に、律先輩が漑先輩を誘う形で入部し、その後、ムギ先輩が入部、続いて唯先輩が加わったことで、正式に軽音“部”として認定され、再建された。

それから一年後、梓先輩が加入。

その年の学園祭から“放課後ティータム”というバンド名が使用されることとなる。

そしてその翌年……つまりは今年の四月末、俺が入部したことで、現在の六人編成となったのだ。

まあ、何が言いたいかというと……要は来年、律先輩たち三年生四人は卒業するわけで、そうすると俺と梓先輩の二人となってしまう。当然、部を存続させるために新入生を勧誘はするのだが、たとえ新入生が入部したとしても、過度の期待をするわけにはいかない。

というわけで、今は漑先輩とムギ先輩によって作り出されているオリジナル曲の数々だが、来年以降は俺と梓先輩が中心となって、その作業に携わらなくてはならない……ということだ。

そこで、休日の今日は作曲に挑戦することにした。

本当は追試が終わった辺りから少しずつ……と考えてはいたのだが、追試が終わった週は脱け殻となり、翌週はトモたちとストバスに興じ、その翌週はトモの学校で練習試合に参加し、更にその翌週は佐久間さんとの一件で意気消沈となっていたため、今日になってやっと重たい腰を上げたというわけだ。

作詞からするか、作曲からするか……。

で、まずは作曲から始めてみることにした。

作詞という作業は、正直ちよつと照れ臭いという気持ちもあるが、それだけでなく、どこか難しそうなイメージがあるからだ。

そもそも、小学校の頃から作文となると、原稿用紙とにらめっこをするようなタイプだったので、その先入観が苦手意識に繋がっている……というのもある。

もつとも、だからといって『作曲なら簡単にできそうか？』と問われれば、即座に首を横に振ることに変わりはないのだが……。

だからまずは作曲の手懸かりになれば……との思いから、放課後ティータイムのオリジナル曲を聴き返してみることにした。

新しいことを始める時は、先ず先人を真似るということが効果的だと思っただけだ。

そして我が軽音部には、その真似るべき先人もいる。

というわけで、今正に放課後ティータイムのオリジナル曲を聴いている……というわけだ。

しかしこうして聴き返してみると、改めてムギ先輩のメロディー・メーカーとしての才能に驚愕する。

澁先輩の書くメルヘン・チックな歌詞に気を取られがちになってしまうが、曲だけを聞いてみると、これが本当に高校生が作ったものなのかと思う程、そのクオリティーは高い。

特に“カレー”に至っては、普通にカッコ良いハードロック風のポップパンクで、そのオルガンのパートは普段のムギ先輩のイメージからは想像しにくい程だ。

「ふう……」

溜め息を吐きながらヘッドホンを外す。

作曲の手懸かりにでもなれば……との思惑は見事に外れ、結果的には自信を失っただけで、得たものはなかった。

いや……、得たものといえば『俺とムギ先輩の、メロディー・メーカーとしての才能は、決して越えることができないくらいの大差だ』ということ再認識できたということだけだ。

上半身を椅子の背もたれに預け、大きく伸びをしながら天井を仰ぐ。

（背中……、遠いな……）

届くことがないことなど解っているくせに、その天井に向かって右手を伸ばす。

その差が、あたかも今の、俺と先輩たちとの差のように思えて、悲観的にすらなってしまう。

「だぁーっ!」

勢いよく姿勢を戻し、パンパンと頬を二発、両の掌で叩く。

「しっかりしろ!」

そしてそう、わざと声に出して自分に言い聞かせた。

（そうだ! 目指すって決めたんだ! 追いつくって決めたんじゃないか!）

そう自分を鼓舞するも、今は暗闇の迷宮を手探りで進んでいる心境だった……。

と、そこで手元に置いておいたケータイが振動した。

（あっ、そうか……。バイブにしていたんだっけ……）

曲を聴くことに集中するため、マナーモードに設定していたことを思い出し、ケータイを手にする。

どうやらメールではなく電話のようだった。

表側のディスプレイに流れる文字は、その電話の相手が律先輩であることを告げている。

（律先輩……? いったい何の用だろう……?）

まあ、考えたところで解るはずもなく、通話開始ボタンを押して、律先輩からの呼びかけに応答した。

「もしもし」

『あつ！ やつと出た。今何やってんだ？』

「今ですか？ 家にいますけど……」

『暇か？』

「まあ……、暇になったというか……」

『んじゃあ決まりだな！ 今すぐ出て来いよ！』

（要は遊びのお誘いか……）

とはいえ、せっかく力を入れて挑んだ作曲が早々に頓挫してしまい、気分転換に外出しようと思った矢先のことだったので、ここは素直に律先輩の誘いに応じることに決めた。

「で、今どこにいますか？」

『何言つてんだ！ オミン家の玄関にいるぞぉ』

「……………！？」

（何でウチにいるんだよ！ 何で！？）

言葉も返さず、ケータイを握りしめたまま部屋を飛び出し、階段を駆け降りる。

「何やってんだよ、二人とも！」

確かに玄関には、律先輩がいたのだが、何故かその律先輩は姉さんと楽しそうに井戸端会議に興じていた。

「こら〜！ 遅いぞ〜、オミ〜！」

「遅いも何も、家に来るなら来るで前もって言うてくださいよ〜。俺にだって予定ってものが……」

「暇だったんだろ？」

「たった今、暇になったんです！」

「まあ、孝臣も『前もって言え』だとか『予定がある』だとか、いちよまえのことを言うようになったもんだね〜」

「なっ！」

そう言つて、二人してニヤニヤと笑っている。

「はあ〜」

だからというわけではないが、その笑いに溜め息を返した。

「それにしてもトーコさん、だいぶお腹が目立つようになりましたね〜」

律先輩の言つとおり、姉さんのお腹も、最近は日増しに大きくなっている。

「まあ、予定日まで後三ヶ月ちよつとだからね」

そう言つと、姉さんは自分のお腹を優しく撫でた。

「まあ、お腹が大きくなっていく理由は子供だけじゃないかもしれなっ！」

さっきの仕返しとばかり軽口を叩くや、頭頂部から身体を激痛が貫いた。

見ると、姉さんの右の拳が硬く握られている。

「孝臣はもう少し、女心つてやつを勉強する必要があるな！」

そう言つ姉さんの目つきは、まるで『今のはまだまだ序の口よ』
とでも言っているかの如く、鋭く笑っていた。

「ところで律先輩！ 他の先輩たちはどうしたんですか？」

とりあえず、こんな時は話題を変えるにかぎる。

「皆、いろいろと忙しいみたいだな。澪は新しい歌詞を考えるつて言つし、唯は久しぶりに両親が帰ってきたから家族で出かけるつて言つし、ムギは今夜パーティーだから準備がいろいろあるつて言つし、梓はクラスの友達と遊びに行くつて言つし……。で、結局、暇だったのはオミだけだったと……」

「いや……、律先輩もでしょ……？」

すると律先輩は、途端に俯く。

しだいに頬も紅潮していくのが見てとれた。

「オミ……、何で私がこうやってオミの家に来たのか、まだ解んないのか……？」

上目遣いの律先輩の瞳が、徐々に潤み始める。

「何でって……、だから暇だと思ったからじゃあ……」

「バカ……」

「バカって……」

「そんなの口実に決まっているだろ……。そうやって理由をつけないと、男の家になんて来づらいじゃないか……。私は……、女……、なんだから……」

そして律先輩は、再び顔を伏せた。

（えっ！？ それって、どういう意味で……？）

突然の、思いもかけない律先輩からの言葉に、その意図を掴みかねた。

いや、本当はその意図が理解できたからこそ、それが普段の律先輩

とは結びつかなくて狼狽えてしまった。

「あつ！ あの……、律先輩……、それは……、その……、つまり……」

「ふうーっ！」

「えっ！？」

吹き出す声に振り向くと、一連のやりとりを聞いていた姉さんが『堪えきれない』とでも言うように、声を出して笑っていた。

「なっ！ 何だよ！ ちょっと、姉さん！」

「ふうーっ！」

「えっ！？」

そして姉さんの笑う姿にこちらも堪えきれなくなっただのか、律先輩までが大笑いしていた。

「ちょっと！ 律先輩！」

ワケも解らずただ、笑う律先輩と姉さんに、交互に視線を移した。

「ちょっと、トーコさん！ 笑ったらダメじゃないですか。これから良いところだったのにい」

「ごめんごめん！ りっちゃんの迫真の演技に、孝臣がその気になっただけなのが可笑しくってさ」

「それって……」

（つまりは……）

「嘘だよ〜ん！」

そう言っつて律先輩は、満足そうに右手で作ったVサインを差し出した。

「りっちゃ〜ん、あんまり孝臣をからかわないであげてね〜。この子、そっち方面はまだ、ウブで奥手だから〜」

そして姉さんは姉さんで、膨れっ面の俺の顔を見て、また笑った。

「まったく！ 二人とも良い性格してるよ！」

これ以上、ここにいたら、また何をされるか解らないとばかりに、スニーカーを履く。

「律先輩、早く行きましょう」

そしてそう言っつて、律先輩を促したが、

「孝臣！ ちょっと！ ちょっと！」

姉さんが手招きをして俺を呼んだ。

「何だよ」

そう言いながら、履きかけた靴を脱ぎ、姉さんの元へと歩み寄る。

すると姉さんは、左手を俺の肩に掛けると、律先輩に背を向けるように百八十度方向を転換した。

そして右手でポケットから裸の一万円札を一枚取り出すと、俺のジーンズのポケットへと押し込んだ。

「ねっ、姉さん……、これ……？」

勿論、心の中は“福沢諭吉”でテンションがかなり上がっている。

俺の問いかけに、更に俺の顔を自分の顔へと引き寄せ、小さな声で耳打ちをしてきた。

「いいか孝臣。いくらりっちゃんが先輩だからって、女の子と二人っきりで出かけて“割り勘”なんて恥ずかしい真似するんじゃないぞ！」

「姉さん……」

そう言う姉さんは、俺の肩から手を外し、そのまま俺の横腹に、軽く肘打ちをして、ニヤツと笑った。

そして俺も『へへへ』と笑い返す。

やっぱり何だかんだと言っても、姉さんは姉さんで、俺のことを心配している……ということなのだろう。

「じゃあ、いってきます」

現金だけにゲンキンなもので、さっきまで律先輩と姉さんに不貞腐れていたのが嘘のように、今度は足取りも軽やかに、再びスニーカーに足を入れた。

「どうした？オミ。何だか急に機嫌になったな」

そして律先輩からは当然のようにそうツッコまれたが、そこは勿論『何でもないっすよ』と白を切ってみせた。

*

「じゃっじゃじゃーん！ 到着うー！！」

着いた先は、近所の商店街にあるゲームセンターだった。

（っていうか、このゲーセンって……）

それは佐久間さんを怒らせたところだった。

（あれはもう終わったことなんだ……。忘れよう……）

そう自分に言い聞かせ、律先輩に続いて入る。

「うっし！ じゃあオミ！ ここは桜高軽音部の新旧部長対決三本勝負といこうじゃないか！」

律先輩は、かなり自信満々にそう言い放つ。

しかし……。

「“新旧部長”って何ですか？」

それは当然の疑問だろう。

何故なら律先輩は部長ではあっても“新”でもなければ“旧”でもない。

そして俺に至っては“部長”ですらないのだから……。

「バツカだな。オミは」

しかし相変わらずの得意顔で、律先輩は一本だけ立てた人差し指を左右に、まるでメトロノームのように『チツチツチツ』と振る。

（つて、またバカって……）

「いいか、オミ！ 来年、私たち三年生が卒業したら、次は梓が部長になる」

「そうですね……」

「そして再来年、梓が卒業したら、その次の部長は……オミ！ おまえだろー！！」

「まあ、同級生が新たに入部しなければ、そうなるでしょうね」

「そしてその時になれば、私は既に“元部長”だ」

「はあ……」

「つまりは、私は旧部長でオミは新部長ということになるだろ！」

律先輩はそう言いながら、“私は”で自分を指し、“オミは”で俺を指す。

だがその理論は、そこはかとなく……くだらない。

「っていつか、それを言うなら“現在の部長”と“未来の部長”っていうほうが正しいと思いますけど……」

「解ってないな、オミは……」

そしてやはり律先輩は、得意顔で、変わらないのセルフ・メトロノームをやってみせる。

「何がですか!？」

だからこちらも、当然の反論を試みる。

「つまりは、それくらいの気構えを持てってことだよ！」

そして今度は、ニカツと笑った。

(何か解らないけど……、律先輩流の激励のつもりなのか?)

だけど素直に受け入れるのも悔しいので、ささやかに軽口を叩いてみた。

「そういう良い話は、ゲーセンじゃなく部活の時に言ってください

よ！」

「にゃにおーっ！　そういう生意気な後輩は、こてんぱんにやっつけてやる！　オミ！　勝負だーっ！！」

そう言って歩き出した律先輩の背中を、『やれやれ』なんて呟きながら追い駆けた。

*

結果から言えば、三本勝負は一勝二敗で律先輩に軍配が上がった。

ただ言い訳をさせてもらえるなら、格闘ゲームが完敗だったことは認めるが、レースゲームは明らかに律先輩に妨害されたことが敗因であり、納得ができない。

しかも俺の唯一の勝利である、画面の音符に合わせて太鼓を叩くというゲームに至っては、現役のコスプレイヤーである律先輩に勝ったわけだから、価千金の白星とも言える……はずだ。

などと言ったところで、律先輩には『小っちゃい奴だな』と笑われるのがオチなので、心の中でそっと思っただけに留めておこう……。

「小腹が空いたな」

勝利に満足したからか、律先輩はご機嫌だ。

「よっし！　オミ！　ハンバーガー食べに行くぞお」

そう言っ、またスタスタと歩き始めた。

律先輩と並んで歩いていると、ふとあることに気づいた。

（あれ……？　そういえば、こうやって律先輩と二人っきりで出掛けるなんて、初めてじゃね？）

「どした〜？」

急に黙りこんだことを不審に思ったのか、律先輩がそう訊ねてくる。

「いや……、律先輩と二人でどこかへ行くなんて、初めてじゃないですか？」

「そーいやーそーだな〜」

しかし律先輩はあっけらかんとそう返す。

よくよく考えてみると、他の先輩たちとも二人っきりで出掛けるなんてことはなかった。

二人つきりになる時は、下校中に家まで送って行く時だし、一緒に遊びに行く時は殆ど軽音部全員が揃う。

だから二人でどこかに行く……という発想すらなかったのだろう。

「まあ、たまにはいいじゃん！」

だけど律先輩は相変わらずそう言って、やはりスタスタと歩いていた。

（けど……）

凄くベタだということは自分でも解ってはいるけど、でも、こんな状況だとやっぱり考えてしまう。

（俺たち今、周りの人から見たら、恋人同士に見えるのかな……？）

いや、ベタだということは百も承知……。

（承知なんだけど……）

隣に並んで歩く律先輩を、横目でチラツと見ると、やはり意識してしまう……。

もっとも、律先輩のほうにはそんな素振り、全くないのだけど……。

「……って、オミ！ 聞ってるのか！？」

「へっ！？」

「“へっ！？” じゃないだろ！ 人が話をしているのに、ちゃんと聞いとけよ！」

「はは……、すみません……」

上の空のまま歩いていると、いつの間にか市立体育館に着いていた。ここに併設されてあるバスケット・コートは、ストバスをする際によく利用している。

なので、ここを通る時のいつもの癖で、ついコートに目をやってしまっ

「あれ……？」

すると見慣れた奴が目に入ってきた。

「どした？」

「あつ、知り合いです」

そう言つて、『寄って行く』というジェスチャーをし、コートへと向かった。

その後ろを律先輩も着いて来る。

「トモ！」

そいつがゴールを決めたところを見計らつて声をかけた。

トモ……木崎知弘は、俺の幼馴染みであり、中学時代はバスケット部のチームメイトでもあった。

今は、バスケの名門・清峰高校のバスケット部だ。

「孝臣！……と、そちらは……？」

トモは律先輩と目を合わせて、そう訊ねる。

二人とも初対面なのだから、当然のことだろう。

「ああ、紹介するよ。こちらは同じ高校の軽音部部长、田井中律先輩。で、こっちは俺の友達の木崎知弘」

「木崎知弘……？」

しかし『よろしく』と笑顔のトモとは対照的に、律先輩は考え込むような表情を作った。

「何ですか？ 律先輩……」

「あのさ、木崎知弘くん……だね？ ってことは、横田千鶴ちゃんのこと……？」

「律先輩！」

予想外の名前が飛び出し、慌てて律先輩の口を塞ぐが、俺の行動に今度は律先輩が慌てたように俺の手を払い除けた。

「ぶはっ！ 何するんだよ、オミ！」

「律先輩がデリカシーのないことを口走るから！」

「なっ……！ 私はデリカシーの塊だぞっ！」

「ぶっ！ はははは……」

気づくと、トモは俺たちのやり取りを見て、吹き出している。

そんなトモを見て、俺たちも苦笑いを浮かべた。

「それにしても孝臣。おまえ意外にお喋りだったんだな」

「なっ！ 違う違う！ 横田のことは姉さんが喋ったんだよ」

勿論、トモが“お喋り”と言ったのは、律先輩が口走った横田千鶴のことを指してのことだ。

だが律先輩たちにそれを喋ったのは姉さんであって俺ではない。

故にそこはきちんと弁解をする必要がある。

「まあ、確かにトーコさんなら喋りそうだけどさ」

「だろ！ なっ！ なっ！」

「けどよ」

「えっ！？」

「そのトーコさんに喋ったのは、いったい誰なんだろうな、孝臣？」

「いつ、いや……、それは……、その……」

「オミの負けだな」

そして最後は、律先輩の一言に頂垂れた……。

「ははは……。まあ、いいよ。確かにトーコさんは誰にでも喋りそ

うだけど、オミはトーコさんになら何でも喋りそうだしな！」

「うっ！」

そして今度は律先輩とトモが二人して笑った。

「けど、何で一人で練習してるんだ？」

トモは現役のバスケ部員なので、そうそう頻繁にストバスの誘いをしてくることはない。

特に名門・清峰高校ともなると、週末は練習がない日などないだろうからだ。

それでも一軍に入れなかったトモたちからすると、部活に出てボールも触らせてもらえないくらいなら、自主練をしていたほうがマシだということで、部活には出ず自主練をする部員も少なくないらしい。

元々、清峰高校の練習自体、一軍主体で、その他の部員は蚊帳の外のため、いつからか『週末は順番に部活に参加し、順番でない者は部活には出ず自主練をする』という不文律が出来上がったのだという。

「何でって、たまには一人で練習するのもいいかって……」

「言ってくれば付き合っのに……」

確かに自主練も大切だが、ことチームプレイの種目に関しては、やはりメンバーはいたほうがいい。

一人より二人、二人より三人いたほうが、より密度の濃い練習ができる。

それが俺の持論だった。

そしてそれは今の軽音部にも言えることなのだが……。

「なっ！ 何だよ、オミ？」

そんなことを考えていると、無意識に律先輩に視線が移っていたようだった。

「いえ……、別に……」

とりあえず、そう言って誤魔化すが、律先輩はさも『腑に落ちない』という表情でこちらを見ていた。

「そういつもいつも、おまえとばかり練習してられないよ」

トモはそう言うと、無造作に持っていたボールを俺に投げた。

「なっ！ 何でだよ!？」

「はあ、あ、解んねえかな？」

「えっ!？」

「俺が何で自主練してると思っ？」

トモはそう勿体振った言い方をしてくるが、その答えは言わずもなだ。

「一軍入りを目指してるからだろ？」

だから三年生が引退する秋を目標に、今は自主練で力をつけている。

そう理解していた。

「そうだ。だから、おまえとばかり練習していてもダメなんだ！」

「だから、何で？」

「おまえとばかり練習していたら、いつまで経ってもおまえを抜けないだろ！」

「えっ!？」

『何だよ、それ』と言いかけたが、トモの顔つきが真剣なものへと変わり、言葉が続けるのも躊躇われた。

「清峰高校の一軍は、さすがにおまえよりは上手い」

「まあ、そうだろうな……」

何と言っても全国優勝も視野に入れられる程の実力を備えているのだから……。

「つまりは、先ずはおまえより上手くないと、清峰の一軍になんて入れないってことだ」

「けど、そんなことなら」

お世辞や身内贔屓とかではなく、トモのプレイを見て、少なくとも俺は自分より劣っていると思うてはいない。

何せ、中学時代、チームメイトだった頃は、部の中でも一番信用……いや、信頼していたプレイヤーだったのだから。

（そうだ。信用していたし、信頼もしていた）

文字どおり、トモのプレイに頼った作戦も少なくはない。

だからトモの言葉は正直、意外なものだった。

「おまえがどう思ってるかは解らない。いや、おまえのことだから、きつと俺のことも高く評価してくれているのだろう。けど……」

「けど……？」

「けどさ、俺はおまえに、たったの一度でも『勝った』と思ったことはないんだよ。未だ現役の俺が、既にバスケからは身を退いたおまえに対して……な」

「トモ……」

「まあ、だからさ、孝臣を抜くことは、俺の一軍への挑戦の……まあ、言ってみれば“第一歩”ってところかな」

そう言ったトモの顔は、ついさっきまでの真剣なものから一転、途

端に優しい笑顔となった。

「だったら！ いつでも挑戦してこいよ！」

だから俺はそう言っつて、再びボールをトモに投げた。

そして思わず笑みをこぼしたのは、トモが相変わらず上に向かって努力と挑戦をしていたことが嬉しかったからかもしれない。

（俺はどうなんだろう……）

負けたくはない。

だけど俺の勝負のフィールドは、バスケのコートではない。

ライブのステージだ。

その場所へと上るため、俺は未知の領域へ、努力と挑戦ができているのだろうか……？

*

「どうした？ さっきから黙りこくっちゃって……」

トモと別れた後、律先輩とMAXバーガーへと来た。

軽音部のメンバーとも、よく利用するファースト・フードだ。

ちなみに律先輩はチーズバーガーとストロベリーシェイク。

俺はテリヤキバーガーとバナナシェイク、そしてフライドポテト。ここぞとばかりに姉さんから貰った軍資金を遣おうとしたのだが、それはあっさり律先輩から拒否されてしまった。

「私のほうから誘ったのに、後輩から奢ってもらえるかよ」

と、一蹴されてしまったのだ。

勿論、姉さんからの厚意も説明したのだが、それすらも……、

「だったら、そのお金はオミに後輩ができた時に、その後輩のために遣ってやれよ！」

と、意外な程まともな返答をされ、『気の長い話ですね』などと憎まれ口を叩きながらも、実は些か感心してしまった。

まあ、もつとも、そこで引き下がるのも男として『何だかな』なので、ポテトを俺のトレーと律先輩のトレーの間に置き、ささやかではあるが『奢っている』気分だけを味わうことにした。

（つて……、こんなこと考えてたら、それこそ小っちゃえなんて思われるよな……）

しかし、律先輩を見ていて、最近ふと気がつくことがある。

それは……、

（不思議な人だ……）

ということだ。

普段は大雑把で、いいかげんで、ガサツ。

なのに、何気に空気を読んで、さりげなく周りに気を配る。

一番“部長”らしからぬタイプなのに、もしかしたら一番“部長”に相応しい人なのかもしれない。

だからなのだろう。

ついそんな律先輩に、こんなことを聞いてみたくなったのは……。

「律先輩……」

「ん？ 何だ？」

「律先輩は挑戦とかってしてますか？」

それは勿論、悩み相談なんて大層なものではなく、他愛ない雑談のようなものだった。

“興味”や“好奇心”なんて言っても過言な程の……。

「何だ？ 藪から棒に」

「俺……、実は今、作曲に挑戦しているんですけどね。これが全く上手くいかなくて……」

律先輩はストロベリー・シェイクのストローをくわえながら、黙っ

て俺の話に耳を傾ける。

「参考にでもなればと思って、放課後ティータイムの曲を聞き返してはみたんですけど……。ムギ先輩との力量の差を痛感したただけであっさり撃沈……。なんですよね。」

そう言つて頬杖をつき、俺はバナナ・シェイクのストローをくわえた。

「ムギと比べるなんて無謀だな。」

律先輩は苦笑い気味にそう返してきた。

「無謀……。ですか？」

「作曲に関して言えば、オミだけじゃなく、部員の誰もがムギに敵うわけないだろう。勿論それは、ムギが子供の頃から培ってきた素養の高さもあるけど、本人のセンスに寄るところも大きいからな。」

「センス……。ですか？」

だとしたら、俺にはセンスがないのかもしれない……。

「だって考えてもみろよ。いくらムギが四歳の頃からピアノを習っていて、コンクールで入賞したことがあるからといって、それはクラシックの話だ。私たちの曲……。ムギが作曲した曲にはクラシックなんて当然ないだろう。」

「確かに……。」

「つまりは、それがセンスってことなんだろうな。“カレー”なんて初めて聴いた時には皆して度肝を抜かれたもんさ」

律先輩の目が、どこか遠くを見つめる。

（俺も初めて“カレー”を聴いた時には度肝を抜かれたっけ……）

もつとも、あの曲についた歌詞がカレーについてのものだったということにも、更に度肝を抜かれたわけだが……。

「けど！ 挑戦するのはいいことだぞ！」

律先輩の口調が、まるで俺を励ますようなトーンに変わる。

「でもな」

天井を仰ぎ、だけどその先の言葉が続かず、再び閉口してしまう。

「バゝ力！」

「バツ、バカって……」

今日何度目かのバカ呼ばわりだ。

「ムギはムギ！ オミはオミだろ！」

「そりゃそうだけど……」

「ムギが作るような曲をオミが書けなくたって、それは当たり前だ！ だって、オミはムギじゃないんだから！」

「けど、それじゃあ、いつまで経ったって……」

「ムギを意識する必要はないさ。演奏だって、同じキーボードだからって、ムギと同じコードを弾くわけじゃないだろ！ ムギとは違うコードを弾くから、曲にも厚みと深みが出るんだからな！」

「つまりは作曲するのに、ムギ先輩を参考にしても意味がない……と？」

「“参考”は、あくまでも“参考”だ。そこを目指すわけでも、ましてや勝負するわけでもない。あれはムギの世界なんだから。オミはオミで、オミの世界を作ればいいんだよ！」

相変わらず律先輩の言ってることは無茶苦茶で、理論も理屈も通っていないくせに、何故だか本人は、無意味にドヤ顔をしてくる。

そんな律先輩の顔を見ると、ムギ先輩に対して抱いていた劣等感だとか敗北感だとか、そういったものが、とっても小っぽけくだらしないもののように思えてきた。

（俺は俺……か）

しかし、だからといって、そう簡単には乗り越えられるような壁ではない。

「そうだ！」

律先輩は名案でも閃いたかのような声を上げた。

「何ですか？」

「作曲に行き詰まってるって言うなら、詞先にするっていうのはどうだ？」

「詞先……？」

「そう！ 詞先だ！ 先ず漑に詞を書いてもらって、それにオミが曲をつけるんだ」

それは、律先輩にしては、なかなかの名案だ。

（けど……）

「漑先輩は、今まで曲先で詞を書いてきたのに、いきなり詞先で……って、大丈夫なんですかね？」

今度は漑先輩がスパイラルに陥ったりはしないのだろうか……？

「まっ、それはそれで漑にとっても“挑戦”だな！」

だけど、そう言って『ニカツ』と笑う律先輩は、たぶん言う程、漑先輩のことを心配はしていないようだった。

（信頼……ってやつかな？）

*

翌日の放課後。

いつものように部室へと向かう。

今日は掃除当番だったため、職員室へは寄らず、直接足を向けた。

（澪先輩、歌詞書いてくれるかな？）

頭の中は、昨日の律先輩からされた提案のことではいっぱいだった。

階段を昇り、部室のドアを開ける。

「お疲れ様です！」

そして、そういつものように挨拶をし、いつもの席に座る。

山中先生が来ている時は、先生に席を譲り長椅子に座ったり、給仕係のムギ先輩に席を譲ってもらって澪先輩の隣に座ったりするのだが、先生が不在の時は先生の定位置である、唯先輩とムギ先輩の間、梓先輩の真向かいの席を使っている。

席に着くと、ムギ先輩がいつものようにミルクティーを淹れてくれる。

ムギ先輩は、同じ飲み物を出す時でも、それぞれの好みに合わせて淹れてくれるため、俺に出してくれるミルクティーは、いつもミルクが俺好みの分量だけ入っていて、変わらぬ美味しさを醸し出していた。

そのミルクティーに、まずは鼻腔をくすぐられ、そして舌鼓を打つ。今日もまた、ミルクティーは、いつもと変わらぬ美味しさだった。

(……って、まったりしている場合じゃない！)

我に返り、澪先輩に本題を持ちかけることにする。

「オミくん！」

「えっ！？」

しかし澪先輩に呼びかける前に、唯先輩から呼びかけられてしまい、出鼻を挫かれた。

だがこの後、唯先輩の発言には出鼻どころか、心まで挫けそうになった。

「私たち放課後ティータイムは、本日をもって、音楽性の違いにより、解散します！」

「……………」

(えっと……、これはどう返せば……？)

チラッと右隣を見る。

唯先輩がドヤ顔で俺を見ている。

左隣に目をやる。

ムギ先輩はニコニコしている。

ムギ先輩の更に左に目を向ける。

漣先輩が溜め息混じりに頂垂れている。

更にその隣、梓先輩は「ちよつと！ 唯先輩……」と、一応は慌てている。

最後に更にその隣、唯先輩の右隣でもある律先輩に目を向ける。

すると律先輩とは目が合い、苦笑い気味に唯先輩の肩を叩いた。

「はいはい！ 唯、勝手に解散すんなよ」

「ええっ！」

ついさっきまでドヤ顔だった唯先輩は、律先輩の言葉に、さも『心外だ』とでも言わんばかりの驚きを返した。

「っていつか唯先輩！ 『ええっ！』ってというのは俺の台詞ですよ。いったい何があったんですか？」

「ええ〜。だつてさ〜、カッコ良くない？ “音楽性の違い” って
！」

「……………」

再び先輩たちをぐるりと見渡す。

皆一様に呆れた表情を浮かべていた。

「うん！ 解るわ、唯ちゃん！ 何だかドキドキするもんね！」

前言撤回……。

（何でムギ先輩は嬉しそうなんだ……？）

「だよねだよね！ さっすがムギちゃん！」

同意を得られて、唯先輩も満足気だ。

「却下だ！ 却下！」

湊先輩が全否定に入る。

「だいたい私たちに、解散する程の“音楽性の違い”なんてないだろ」

律先輩はいくぶん理論的だが……。

（それはそれで、また問題なんじゃあ……）

“音楽性の違い”がないということは、『全員の音楽性が一致している』か、もしくは『音楽性を持っていない』かのどちらかだ。

勿論、俺にも好きなジャンルはある。

好きなジャンルだから、やりたいとも思う。

しかし、だからと言って、そのジャンルが放課後ティータイムとしての音楽に相応しいかと聞かれれば、それはまた別の話だ。

放課後ティータイムは、今でこそ俺という男性メンバーもいるが、元々は女性オンリーのバンド……所謂“ガールズバンド”だった。

甘く可愛らしい声の唯先輩と、低めの力強い声の澪先輩。

確かに、メインボーカルを務める二人の声質は全く違うものなため、曲によってどちらがメインで歌うかは決まっている。

しかし中には、同じ曲でもその時々でメインを入れ替えて歌うこともあり、それによって、一つの曲を全く違う仕上がりにもすることも ある。

ただ、どの曲も総じて言えることは、そのどれもが唯先輩、もしくは澪先輩が歌うことを前提に作られており、それが放課後ティータイムの“音楽性”を決めているように思える。

だから俺も作曲をする際には、好きなように作るというよりも、あくまでも“放課後ティータイムのオリジナル曲”という前提を踏まえていなくてはならない。

閑話休題。

「で、いったい何でそんなことを急に思いついたんですか？」

とりあえず、唯先輩の提案はスルーするということが暗黙のうちに決まった。

「これだよ、これ！」

律先輩がそう言って差し出した雑誌には、外国のあるバンドの解散記事が載っていた。

「あれ？ 確かこのバンドって、湊先輩『好きだ』って言ってませんでした？」

「うん……。だからショックなんだよ……」

好きなバンドの解散は、確かにファンからすると堪える。

「けど、解散の理由って何なんですか？」

「まあ、結局はボーカリストとギタリストの音楽性の違いね」

そう答えたのは梓先輩だった。

「広く大衆受けするポップな曲を好むボーカリストと、本物志向でロックな曲を追求するギタリスト。今までも度々衝突はあったんだけど、それが遂に……てことみたいね」

「なるほど……。やっぱり長くバンドをやっていると、音楽性の違いは避けられないんでしょうかね？」

言わば、バンド活動をする者の“宿命”みたいなものなのだろうか？

「だから解散なんだよ、オミくん！」

「……………」

（なるほど……。それでさっきの“解散”になっただってわけか……）

「じゃあ聞きますけど、唯先輩にとっての“音楽性”って何ですか？」

「ええっ!？」

この話の展開上、ごくごく自然な問いかけをしたつもりだったが、予想外に驚かれた。

「オミ」。唯にそれを聞いちゃあ可哀想だろ」

「ムッ! りっちゃん、失礼な! あっしにだって音楽性の一つや二つくらいあります!」

律先輩の挑発(?)に乗せられた形で、唯先輩が反論する。

(けど、何で花魁口調?)

「え……、えっと……、リズムカルで」

皆一様に『おおっ!』と感嘆する。

「それから……、えっと……、テクニカルで」

次に揃って『おおっ?』と疑問形となり、そして……、

「それから……、えっと……、えっと……、サッ、サッ、サバイバルな!」

最後は『ああ』と嘆息した。

「はい！ てなわけで、この話は終了な」

そして遂に、律先輩によって引導を渡され、唯先輩は頂垂れた。

「けっ、けど、唯先輩！ 解散なんて、やっぱり良くないですよ！」

だから後輩らしくフォローに回るが……。

「そうですね……。やっと最近、六人での演奏も合ってきて、このメンバーで音楽をすることが楽しいって思えるようになったのに……」

心なしか、梓先輩は涙ぐんでいるようにすら見えた。

「あっ！ あずにゃん！」

その涙に気がついたのか、唯先輩も慌てて梓先輩に駆け寄った。

「あずにゃん！ あずにゃんがそこまで想っていてくれたなんて知らなかったよ！ 私、あずにゃんと一生一緒にバンドやっていくよ！」

「ええー！ そっ、そこまでは……」

ランランと目を輝かせ、梓先輩の手を取る唯先輩に、当の梓先輩は困惑気味だった。

（まあけど……、こんな雰囲気もたまには良いかもな）

「あずにゃん！ 私たち、お婆ちゃんになったら“老後ティータイム”だね！」

（良い雰囲気が出た！）

それでも、この雰囲気も含めて、“放課後ティータイム”なのかもしれない。

“放課後ティータイム”

（あれ？）

「そういえば、何でバンド名“放課後ティータイム”なんですか？」

確か、去年の学園祭から使っていると聞いていたのだが……。

「まあ、あれだ……。何て言うか……」

律先輩も歯切れが悪い。

「さわちゃんが勝手に決めたんだよ！」

気まずい空気を察したのかどうか、唯先輩が事も無げに答えてくれた。

「勝手に……。先輩たちは何か考えなかったんですか？」

「何を！ 考えたさ」

そう反論する律先輩に、他にどんな候補があったのかと訊ねてみた

のだが……。

恩那組（by律先輩）

スウィート・スマイル（by唯先輩）

平沢唯と愉快的な仲間たち（by唯先輩）

平沢唯とずっこけシスターズ（by唯先輩）

にぎりこぶし（by唯先輩）

靴の裏のガム（by唯先輩）

ロケットえんぴつ（by唯先輩）

タンスの角に薬指（by唯先輩）

ぴゅあぴゅあ（by澪先輩）

ポップコーン・ハネムーン（by澪先輩）

充電期間（byムギ先輩）

まあ、一言で言えば『山中先生が一番マシだった』ということなのだろうか……。

（といっても、放課後ティータイムもそれはそれで大概だけどな……）

「ああ、そうだ。私、良いこと考えちゃった」

すると何やら、唯先輩がまた、何かを企むような、悪い笑顔を浮かべ始めた。

「あんまり良い予感はありませんけど……」

梓先輩が呟く。

「唯が“良いこと”って言って、良いことだったためしがないんだよな」

律先輩は嘆く。

「唯、解散はナシだからな！」

そして湊先輩が先手を打つように釘を刺すが、唯先輩は「違っよ」と即座に否定した。

満面のドヤ顔で……。

「あのさ、バンド名を変えてみない？」

またまた爆弾発言だ。

再び部室に、『ええ！』とか『はあ！？』などの声が入り乱れる。

「いやあさ、オミくんが入って五人から六人に増えたことだし、そろそろスケールアップしたほうが良いんじゃないかなって！」

（スケールアップ……）

「出世魚みたいなもんですかね……？」

「オミ……、出世魚って……」

「まつ、まあ、出世魚は縁起が良いから！　ねっ、澪ちゃん！　オミくん！」

まあ“放課後ティータイム”から考えれば、スケールアップさせることくらいワケないだろう。

だが、それはあくまでも、考えるメンツしだいではあるのだけど……。

「スケールアップか」。確かに唯の言うことも一理あるかもな……」

しかし意外なことに、唯先輩のその提案に、律先輩が乗ってきた。

そして更に予想外なことに、『スケールアップなんて必要ない』とか『今更変えなくても……』という澪先輩や梓先輩の意見をよそに、『面白そう』という理由でムギ先輩が賛成側に回ってしまった。

後は俺の意見だけ……。

なので五人の視線が、自然と俺に集まる。

正直、俺はバンド名なんて何でも良いのだが、万に一つの望みを懸けて、『もしかしたら“放課後ティータイム”よりも良い名前が出

るかもしれない』という淡い期待を試みることにした。

「とりあえず変えるか変えないかは、考えついた名前を見てから決めるっていうのはどうですか？」

この意見に、渋々ながらも『まあ、そういうことなら……』と、澁先輩も梓先輩も納得してくれた。

「スケールアップ……。スケールアップ……」

呪文のように、唯先輩はそのフレーズを繰り返す。

しかし考えてみると、なかなか浮かんではこない。

意外と難しいものだ。

「改まって考えてみると、意外と難しいものだな……」

律先輩が頭を抱えるが、その横で、本日何度目かのドヤ顔を唯先輩が披露する。

「りっちゃん、思いついたよ！」

「ん」。まあ、とりあえず言ってみ……」

「ザ・全米」

（確かにスケールアップはしたけれど……）

「却下だ！ 却下！」

澁先輩が即座に却下を決めた。

（同感だ……）

だいたい“ザ・全米”って、俺たちアメリカに何の繋がりもないのに……。

しかし唯先輩は、よっぽど自信があつたのか、「ええ〜！ スケールアップしたのに〜」と納得のいかない顔だった。

（っていうか、自信満々だったのかよ……）

「スケールアップしててもダメだ！」

だが執拗に澁先輩は反対する。

「ええ〜！ よく言うじゃん！ 全米が震撼したって！」

「そついうことじゃないだろ！」

「じゃあ、全米が泣いたって！」

「だから、そついうことじゃない！」

「全米が大爆笑！」

「笑わせてどうするんだよ！」

「全世界が超大爆笑！」

「だから、そういうことじゃない！」

「ぶうゝ！」

あの手この手で押しきろうとした唯先輩だったが、結局は澪先輩の怒濤の反抗に遭い、“ザ・全米”は却下された……。

「まあ、あれだ……。ちょっとスケールアップの方向は、一先ず置いておこう……」

律先輩の提案に、しかしまだ唯先輩は『良い名前だと思うのに』と諦めきれない様子だ。

（つていうか、何で唯先輩はそこまで“ザ・全米”に執着するんだよ……）

正直、俺には唯先輩の考えていることは、解らなかった……。

「他に何か良い案ないか？」

「ねえねえ、こんなのはどうかな？」

律先輩の呼びかけに、次に応えたのは、ムギ先輩だった。

ムギ先輩は立ち上がり、コホンと一つ咳払いをして、そして……、

「米騒動〜！」

またもや皆を凍結させた。

「おお〜！ ムギちゃ〜ん。米繋がりだね〜」

たった一人、唯先輩を除いて……。

「ああ……、ムギ先輩の考えていることが、たまに解らない……」
「ああ……、ムギ先輩の考えていることが、たまに解らない……」

思わず口をついて出てしまった本音が、梓先輩と一言一句変わらず被ったのは、ただの偶然なのだろうか……。

「おまえはいいかげん、米から離れろ！」

ただ、一つ言えることは、とにかく唯先輩は、“米”さえ付けば何でも良いらしい……。

「澪先輩！」

ここはこの中でも一番まとまな名前を挙げてくれそうな澪先輩に振ってみることにする。

「澪先輩、何かないですか？」

「ええっ！ 私！？」

予期していなかったのか、一瞬驚いたような表情を見せたが、次にはもう「どうしようかな〜」と満更でもない様子で熟考に入った。

そしてほんの数秒後……。

「ちょこれーと めろでい”なんてどうかな〜?”」

もはや満面の笑みだ。

それはまるで少女漫画から抜け出たかのようなキラキラな瞳で……。

（つていうか、どんなメロディなんだよ？ チョコレートのメロディなんて……）

「まつ、まあ、澪ちゃんらしい名前ね……」

ムギ先輩の気の遣いようも見て取れる。

「まあ、澪らしいっちゃー澪らしいけど……。でも、さすがに甘すぎるだろ〜」

「ふえっ！ ダッ、ダメ……、かな……？」

律先輩からのツツコミに、澪先輩の表情が途端に曇り、俯いてしまった。

が……。

俯いたまま、チラッと視線だけを俺に送り、もう一度『ダメ……、かな……？』と、俺にだけ問いかけた。

「えっ！？ えつと……」

（何て言えばいいんだよ）

勿論、『いやいやいやいや、それはないっすわ』なんて直球は放れない。

心配そうなムギ先輩を横目に、なので当たり障りのない言葉を返す。

「零先輩らしい、可愛い名前だと思うんですけど……」

「けど……？」

「俺が加入する前ならOKだったかもですけど、さすがに男のメンバーがいるバンドには甘くて可愛すぎるかなって……」

「……………」

「……………」

「そっ、そうか……。ちょっと可愛すぎたか……。可愛かったから……。可愛かったからか……」

俯いていた零先輩の表情が、しだいに赤みを帯びていき、笑みも広がる。

とりあえずは……、

（正解……だよな？）

ムギ先輩の胸を撫で下ろす仕草に、そう確信した。

それから、様々な名前が出てきたが、どれもこれも考える余地などないくらい……。まあ、酷いものだった。

「オミ！ おまえは何かないのかよ！」

そしてとうとう、先程から一度も発言していない俺に白羽の矢が立った。

「おつ、俺ですか……？」

考える……。

何か良い名前がないかと。

しかし思い浮かばない。

一分が過ぎ、二分が経ち、三分を回ろうとした頃、遂にシビレを切らした律先輩から催促され、そして俺はある一つの結論に達した。

それは……、

「やっぱり“放課後ティータイム”のままで良くないですか？」

だった……。

刹那的に出た言葉ではあったが、意外に妙案だとも思う。

「そうだね！ それが良いよ！」

そして意外にも、この案に真っ先に賛同してきたのは、誰あろう唯先輩だった。

（つてか、唯先輩がそれを言うのかよ……）

まあ、口にはしないが……。

「まあ、結局、私たちには“放課後ティータイム”が一番ピッタリ
つてことかしら……」

ムギ先輩がそう納得する。

「そういうことだな」

それに律先輩も賛同する。

「まったく！ 人騒がせなんだから！」

漣先輩はそう怒るが、その顔は笑っている。

「本当ですよ！」

梓先輩も呆れた表情だが、どこか楽しそうだ。

「けど、ちょっと楽しかったわ」

全てはムギ先輩のこの言葉に集約されているということなのかもしれない。

そんな他愛ない話題はまだまだ続き、今日も軽音部の“放課後”は
“ティータイム”で幕を降ろした。

（じゃない！）

こんなまったりと終わるわけにはいかなかった。

俺には今日は、大事なやるべきことがあったのだ。

「漣先輩……」

「ん？ 何だ？」

ムギ先輩が食器を片付け、唯先輩と梓先輩はそれを手伝い、俺と律先輩と漣先輩で楽器を片付ける。

「漣先輩って、曲なしで歌詞を書いたりします？」

「ああ、いくつかあるよ」

「えっ！ あるんですか！？」

てつきり漣先輩の作詞は、ムギ先輩の作曲待ちだとばかり思っていたので、詞先で歌詞を書いていたとは思っていなかった。

ふと律先輩を見る。

律先輩は、先程の俺と漣先輩のやり取りを聞いていたのか、俺と視線が合うと『なっ！』とでも言うかのように、ニヤリと笑った。

（知ってたのかよ……）

「けど何で？」

漣先輩の質問に、俺は昨日の律先輩との話を打ち明けた。

作曲に挑戦していること。

だけと思つようにはいつていないこと。

だから先に漣先輩に詞を書いてもらい、それに曲をつける“詞先”を試してみようと思ったこと……など。

「なるほどな……」

そう呟くと、漣先輩はバッグを開け、中から一冊の大学ノートを取り出した。

そしてそこから一枚のページを破り取る。

「えっ！ 漣先輩、いいんですか……？ そんな……」

「ああ、いいんだよ。実は以前、律から異常なまでに却下を食らった詞があつてさ。あまりのしつこさに『ムギには渡さない』って約束しちゃったんだ。だけどオミはムギじゃないし、オミに渡すぶんには約束を破ったことにはならないもんな！」

そう言つて、今度は漣先輩がニヤツと笑った。

「ありがとうございます！」

と、ここは素直に厚意に甘えることにした。

その歌詞を読む。

“ 冬の日 ”

まだ季節的には合わないが、俺が曲をつけた頃には、本当に“ 冬の日 ” になっているかもしれない。

（……………っていうか、この歌詞って……………）

何となく、律先輩が却下したワケが解る気がした。

（特に律先輩の性格じゃあな……………）

そしてその歌詞の書いた紙を綺麗に四つ折りにすると、大切にポケットへとしまった。

果たして、これで俺の挑戦は、一歩でも前へと進むことができるのだろうか……………？

だけど……………、

（負けてられねえもんな）

そう心の中で呟いてみる。

今はまだ遠く遠く前を走る先輩たちの背中を目指して、俺の挑戦はこれからも続いていくのだろう……………。

#7 つながるもの

7月に入り、梅雨も明け、空は青さを増し、雲は白く大きくなり、その狭間を縫うように、太陽が燦々と地上を照らしている。

その熱気はまさに夏。

いよいよ夏がやって来た。

高校生になって初めての夏休みも、もうすぐそこまで迫っている。

これでテンションが上がらないわけがない。

気持ちは既に、夏休みをどう過ごすか……に、傾いていた。

「って、オミくん！ 夏休みの前に期末試験があること忘れてない？」

「えっ!？」

そう……。

今は放課後。

例によって部室へと向かっている。

今日も掃除当番だったため、直接部室に向かったのだが、同じく掃除当番だったらしく、梓先輩と一緒にになった。

故に、二人並んで部屋に行く、その途中なのだが……。

「夏休みも良いけど、その前の期末試験をちゃんとクリアしないと……」

「うう……。耳が痛いです……。っていうか、梓先輩！人の心の中を読まないでくださいよ」

「何、言ってるのよ！オミくんの思考がダダ漏れてるの！」

「ダダ漏れ……。はあ」

そう指摘され思わず、思考だけでなく溜め息まで漏らしてしまう……。

「オミくん！期末は中間の時みたいに『追試で部活動禁止』なんてならないでよ！」

「は……。はあ……。善処します……」

「オミくん！」

「はい！解りました！」

「よろしい！」

そう言うと、梓先輩は満足そうな笑みを浮かべた。

（っていうか、何で俺……。夏休みを楽しみにしていただけで、お説教されてるんだよ……）

「はあ」

そう思うと、また溜め息が漏れてしまう。

「また溜め息を吐く」

梓先輩は呆れ顔だ……。

「そういう梓先輩は、期末試験大丈夫なんですか？」

「うん！ 私は一応、普段から勉強してるから。試験前だからって焦って勉強しなくても大丈夫かな！」

それはまるで、優等生そのもののような答えだ。

（しかし……）

「勉強なんて、毎日するもんなんですかね？」

「……………」

「……………」

「オミくん!？」

「は……、はい……？」

「オミくんは、普段から勉強をしない人なのかな？」

途端に梓先輩の表情が、怖い笑顔に変わった。

笑っているのに……怖い。

「えっ！？ ええ〜っと……、まあ……、その……、何ていうか……。あつ！ ほっ、ほら！ 自主練していると知らない間に時間が過ぎちゃったりしてる時ってありません！？」

「あ・り・ま・せ・ん！！！」

「うっ……」

即行全否定され、頂垂れる……。

しかし梓先輩は『ない』と言ったが、俺はそういうことも珍しくなく、ベッドに入ってからでも気になるところを思いつくと、また起きてキーボードを弾き、気づくと二・三時間くらい経っていた……なんてことも少なくない。

俺は体質的に睡眠時間が短くても平気らしく、それもその要因の一つかもしれない。

「ねえ、オミくん。前々から気になっていたんだけど、オミくんって一日に何時間くらい練習するの？」

「練習時間……ですか？」

「うん……。だって、オミくんが曲を覚えるスピードが異様に早いから……」

「早い……ですかね？」

「だって、入部して二ヶ月半程で六曲マスターして、今七曲目を練習中なんでしょ？　いくら何でも早すぎない？」

しかし、そう言われても、一日の練習時間なんて決めているわけではない。

気分が乗れば五・六時間ぶっ続けて弾いている日もあるし、逆に集中できないと数分で終わる日もある。

「まあ、ざっくり四時間くらいじゃないですかね。平均すれば……」

「ねえ、オミくん。自主練をするなどは言わないけどさ、いや、むしろ自主練をするのはとても良いことではあるんだけど、やっぱり勉強を疎かにしてはダメだと思うの。その四時間の練習時間の内、二時間でも勉強に使えないかな？」

口調は柔らかいが、表情は相変わらず怖い笑みを浮かべている。

「けど……、二時間って言ったら半分だし、そこまで普段から勉強する必要はないかと思うんですけど……。そもそも試験前一週間は部活動は禁止になるわけだし、その時間を使って勉強するっていうのは……」

「オミくん！」

「はい！」

遂には梓先輩の怖い笑顔から笑みが消え、ただ怖いだけの表情となった。

「そんなこと言ってるけど、普段から勉強できない人は、試験前になっても他のことに気を取られて、勉強に身が入らないもんなんだよ！」

確かにそう言われれば、中間試験の時も、一週間前どころか試験期間中でさえも、勉強に集中できず、キーボードを弾いていた……なんてことがあった。

しかし、考えようによっては、それで追試が数学の一教科だけだったわけだし、それはそれで大したものだと思う。

「追試は一教科でもあったらダメなんですうつ！」

「って、だから人の心の中を読まないでくださいって！」

「オミくんの思考がまたダダ漏れてたの！」

「うつ……」

「いい？ オミくん！ 期末試験では追試は一教科も許しません！ 後、他の教科だって『追試でなければOK！』みたいな低い目標も却下します！」

まるで『ズイツ』と迫ってくるかのように、梓先輩から威圧感が醸し出される。

「はあ〜」

「また溜め息！」

「解りました！ それじゃあ、今日から毎日二時間勉強して、全教科平均点以上取ってみせます！」

売り言葉に買い言葉……とでもいうように、つい出来心でそんな宣言をしてしまった。

「よし！ それでこそ私の後輩だよ！」

梓先輩はそう言って、俺の肩を『ポンッ！』と叩く。

俺の宣言に満足したのか、“怒”の表情は既に消えていた。

ただこれだけは、付け足しておかなくてはならない。

「数学以外は……」

「オミくん！」

「数学もです！」

「よろしい！」

*

まさかの展開に意気消沈しながら部室のドアを開けると、俺以上に意気消沈している人が約一名……。

澪先輩だ。

「いったい、どうしたんですか？」

今日は山中先生がいるため、長椅子に座る。

皆のバッグを端に固めると、反対側に腰かけた。

そのタイミングを見計らったようにムギ先輩が紅茶を淹れてくれ、それを受け取りながらムギ先輩にそつと訊ねてみる。

ちなみに一緒に来た梓先輩は、俺より一足早く定位置の席に着いており、既に専用のカップで紅茶を味わっていた。

「うん……。実は澪ちゃんね、朝から視線を感じるって……」

「視線……？」

「そうなの……」

「まあ、澪先輩は校内でも人気が高いし、注目を浴びることもあるんじゃない……」

「そういうんじゃないんだよ！」

しかしそれに答えたのは、澪先輩本人だった。

「見つめられるというよりも、ジーツと監視されてるような……」

そこまで言つと、身を縮こませて身震いをした。

どうやら想像するだけで悪寒が走るらしい。

「まあ、私はいつだって皆に見られまくってるけどね」

そう自慢気に声を上げたのは山中先生だ。

見ると、華麗にポーズングまでしている。

「さわちゃん、外見だけは良いからな」

「だけ」って何よ!? “だけ”って!」

「もしかして澪を監視しているのって、さわちゃんだったりして?」

「いや〜ね。私が犯人なら見ていただけじゃあ済まないわよ」

「ですよ〜」

一頻り漫才よろしく掛け合いを披露した山中先生と律先輩は、そう言つと二人して笑い合った。

(つて……、本気で心配する気はねえんだな……)

「解つた!」

次に推理を披露するのは唯先輩らしい。

唯先輩は、さつきからこの緊迫した空気の中(ただし一部のみ)で、

一人トンちゃんを眺めていた後での発言だ……。

「澪ちゃんを見ていた犯人はトンちゃんだよ！」

（やっぱりか！？）

既に説得力も信憑性もゼロだ……。

「ほら、澪ちゃん、トンちゃんのこと怖がって、あんまり水槽に近づかないでしょ。だからトンちゃん……」

「……………」

澪先輩の無言の声が聞こえてきそうだ……。

「澪ちゃんの背中に張りついちゃったんだよ！」

一瞬、時間が止まった……。

（あんなに勿体ぶって、溜めて言ったセリフがそれかよ……）

止まった時間が再び流れだすと、澪先輩は『怖い！ 怖い！』と呟きながら、その背中を両手で擦り始めた。

（ダメだ。このままでは埒が明かない……）

さすがにこれでは澪先輩が可哀想……ということ、俺の出番が来たようだ。

「皆さん！ 真面目に考えてください！ ストーカーかもしれない

んですよ！」

「梓」

そう、俺が正に今、言おうとしていたセリフは、全て梓先輩の口から放たれた。

つまりは、来たはずの俺の出番は、なかった……と。

澪先輩の口から漏れた言葉は、梓先輩に対する感嘆の響きすらあった。

だがその、澪先輩を感嘆せしめた梓先輩の発言も、他の人たちには届かなかったようだ。

「自意識過剰なんじゃねえの？」

これは律先輩。

「気にしすぎなんだよ！」

これは唯先輩。

「やっぱり注目されてるだけなんじゃあ？」

これはムギ先輩。

「澪ちゃん！ 私みたいに、見られることを快感だと思えばいいのよ！」

これは山中先生。

誰一人として……、

（頼りになんねえ……）

ということだ。

「皆さん！ そんな暢気なことを言ってる場合ではありませんよ！」
そこでいよいよ、今度こそ満を辞して、俺の出番だ。

「さつき梓先輩は『ストーカーかもしれない』って言いましたけど、あながちそれは大袈裟ではないかもしれませんよ！」

そう言うのと、『ほお』と声を上げながら、皆の視線が俺に集まる。
すると段々と気分も乗ってきた俺は、長椅子から立ち上がると、自分の推理を披露してみせた。

「いいですか！ 桜高は元女子高です。今年度から共学化されたとはいえ、男子生徒は俺を含めて僅かに三人。全校生徒六百人の内、実に九十五・九パーセントが女子生徒です。高校生といえば、異性に目醒め、恋愛を謳歌する年代。にもかかわらず、我が校にいる女子生徒にとって、本来恋愛対象となるべき男子生徒が三人しかないとなると、その矛先が同性に向いたとしても、何ら不思議ではありません！ しかも澪先輩はファンクラブまで存在する程の人気。ファンクラブを持つ生徒なんて、澪先輩だけです！ つまりは今、桜高で一番注目を集めているのは澪先輩と言っても過言ではありません！ 同性に向けられた禁断の恋……。しかし想うだけなら本

人の自由。誰を好きになっても、それは自由なのです！ とはいえ恋というのは、障害が多ければ多い程、壁が高ければ高い程、燃え上がるというのも自然の摂理。ただでさえ同性同士という許されざる恋なんです。その“恋”という感情が、禁じられたものであるが故に、歪んだ“愛”に変わったとしても、不思議ではありません！ その歪んだ“愛”が暴走した生徒が今、漣先輩に……」

（あれ……？）

何だか皆の反応がやけに薄いような気がする……。

「あ……、あの……」

「はあ……」

そして今日一番の大きさの溜め息が聞こえてきた。

「ファンクラブ……、もう忘れていたのに……」

漣先輩は遂に机に顔を突っ伏してしまった。

「禁断の……、恋……」

ムギ先輩は超うつとした表情を浮かべる。

「いつものオミくんじゃない……」

唯先輩の中での俺のイメージって、いったい……？

「っていうか、それって男子生徒に“男としての魅力”がないって

ことだろ？勿論、オミも含めて……」

律先輩の鋭い指摘に、若干自分でも悲しくなる……。

「オミくん！そもそも全校生徒六百人に対して、女子生徒五百九十七人の割合は、九十五・九パーセントじゃなくて九十九・五パーセントだよ！」

そして、梓先輩からも鋭い指摘が……。

「うっ……、数学は苦手なんですよ……」

「オミくん、この計算は算数だよ……。今日からちゃんと勉強しようね」

「はい……」

結果……俺は玉砕されてしまった。

「こうなると次は私の出番のようね」

そう言つて、そんな俺の肩に優しく手を置いたのは……ムギ先輩だった。

「オミくん！あなたは今回の事件、推理する過程でとても大きな過ちを犯しているわ！」

「過ち……ですか？」

もう俺を見るムギ先輩の表情が、見るからに自信満々だ。

「そう！ 過ちよ。いい？ オミくん。探偵にとって一番大切なことは、物事の真実を見抜く目よ！ 先ずは被害者をよく見ること。探偵には、それが必要なのよ！」

「は……、はあ……」

（つて、俺はいつから探偵になったんだ……？）

しかしあまりにもものドヤ顔をするムギ先輩を見ると、そんなツッコミはできない……。

「で、そういうムギ先輩は、その真相に辿り着けたんですか？」

だから、話をスムーズに進めるため、そう話を振ってみる。

「ええ……、勿論よ！ 謎は全て解けたわ！ じっちゃんの名に懸けて！」

「いや……、それ……、何かもう混ざっちゃってますから……」

そしてムギ先輩は立ち上がり、高らかに言い放った。

「犯人は、あなたです！」

ビシッと指差しまでつけて……。

皆の視線が、そのムギ先輩の指先に集まる。

その先には倉庫の入り口がある。

あの倉庫の中に犯人がいるというのだろうか？

いや……、しかし……。

先に来ていた先輩たちや、山中先生に気づかれないように、あの倉庫に入って零先輩を待ち伏せするためには、この部室に誰よりも早く来なくてはならない。

鍵のかかったこの部室へ。

そして鍵を開けることなく、部室に侵入しなくてはならない。

（まず……、無理だろ……？）

きつと先輩たちも俺と同じ考えに至ったのだろう。

俺が倉庫の入り口からムギ先輩に、視線を戻すのと殆ど同時に、先輩たちもムギ先輩に視線を戻した。

だが、ムギ先輩は皆の視線が戻ってきたことを確認すると、更に言葉が続けた。

「なぐんちゃって！　今のは冗談よ。一度でいいから、やってみたかったの」

悪びれることなく、そう『しれっ』と……。

「ムギ」

そう言つて、澪先輩はジト目となる。

しかし、それでもムギ先輩は、お構いなしに澪先輩に再び対峙し、そして、ご自慢の推理を披露し始めた。

「ねえ、澪ちゃん。今朝は焼きそばパンを食べたんじゃない？」

「えっ！？ 何で解るんだ？ 確かに今朝は寝坊して、ゆっくりと朝食を摂る時間がなかったから……」

（つて、それがいつたい、何の関係があるんだよ……）

「その焼きそばパン、二十パーセント引きだったでしょ？」

「何でそんなことまで解るんだよ!？」

（確かに……。だけど……）

二十パーセント引きの焼きそばパンと、監視されているような視線……。

そこに、いったいどんな因果があるのだろうか……？

「あっ!」

（まっ、まさか……）

「オミくん、どうやら気づいたようね?」

ムギ先輩は既に探偵気取りだ。

「これってもしかして、あの有名な都市伝説“誰かが見てる”では？」

「誰かが見てる……？」

「はい！ “誰かが見てる”です！」

「それってどんな都市伝説なの？」

どうやら食いついてきたのは唯先輩だけのようだが、そこは気にせず、俺の記憶を総動員してみせる。

「誰かが見てる”っていうのは、今一番ホットな都市伝説でして……」

そつ、都市伝説“誰かが見てる”

突然、背を射る謎の視線。

振り向いても誰もいない。

それでも視線は確実に、少しずつ近づいてくる。

やがて視線に取り憑かれた人は、部屋から一步も出られなくなる。

ドアの向こうから視線を感じるから……。

それでも一人の女の子が、思いきってドアスコープを覗いてみれば……。

「キャー……ッ……！」

「オミ！」

「オミくん！」

漣先輩の切り裂くような悲鳴に、律先輩と梓先輩から同時に名前を叫ばれた。

漣先輩は顔を机に突っ伏し、両手で耳を押さえ、『見えない、聞こえない、見えない、聞こえない』と、まるで呪文のように呟いている。

「ああ……」

（そんなつもりじゃなかったんだけど……）

「オミくん！ その推理もブブーです！」

そしてムギ先輩からは、両手を顔の前でバツテンにされながら、そう言われてしまった。

「そもそも、その都市伝説に焼きそばパンは関係ないものね……」

ついさっきまで、ハイテンションなボケをかましていた山中先生にまでそう冷静にツッコまれ、律先輩と梓先輩は『やれやれ』という表情で呆れている。

「じゃあ、正解は何だったんですか？」

するとムギ先輩は『これよ!』と言いながら、澪先輩の髪を撫でる。

そしてその次には、手にしたシールを皆に見せた。

どうやら、それは澪先輩の髪に付いていたシールらしい。

そのシールには、“180円”という黒の印字の上に、赤の手書きで“-20%”と書かれてあった。

「なるほど。澪ちゃんは、今日一日、それを髪に付けて歩いていったってわけね!」

山中先生の言葉に、澪先輩の頬も一気に赤らんだ。

「だから皆……、見てたのか」

そしてそう言っ、両手で顔を被いつくしてしまった……。

(まあ、確かにそれは恥ずかしいかもな……)

『ちよつと! あなたたち何をやってるの!?!』

そんなやり取りの後、ドアの外から聞き慣れない声が聞こえてきた。

と思うが早いか、内開きのそのドアは勢いよく開かれ、と同時に二人の女子生徒が倒れ込んでくる。

更にその後ろには、見慣れない女子生徒の姿が……。

「和っ！　　いったいその子たちは、どうしたんだ！？」

漣先輩から“和”と呼ばれたその女子生徒は、『それがね……』と人差し指で頬をカリカリと掻きながら、状況を説明する。

まあ、状況といっても、倒れ込んできた女子生徒二人が、少しだけ開けたドアの隙間から、部室の中を窺おうとしていた……というだけなのだが。

その倒れ込んできた女子生徒たちは、緑のリボンをしている。

つまりは俺と同じ一年生ということになる。

そして“和”と呼ばれた女子生徒のリボンは青。

漣先輩たちと同じ三年生ということだ。

だが、それにしても……。

「私たちは怪しい者ではありません！」

「私たちは“秋山漣ファンクラブ”の者です！」

すくつと立ち上がるや、その一年生二人はカードのような物を呈示してみせた。

確かにそのカードには、漣先輩の写真と会員番号、そして個人名が記載されている。

おそらくその名前は、彼女たちのそれなのだろう。

だが、それにしても……。

「梓先輩、さっきから気になってたんですが……」

すすす……と、足音を忍ばせるように後退りをする、梓先輩にそつと耳打ちをする。

「何？」

「あの後ろの三年生、確か和……さんて？」

「あ……、うん……。真鍋和先輩、生徒会長だよ」

「生徒会長！？」

「ちょっと、オミくん……。まさか自分の学校の生徒会長も知らなかったの！？」

「えっ！？」

（知らなかった……）

「オミくん……」

「あつ、でも……、名前は知ってましたよ！　っていうか、どこかで聞いた名前だなって……」

「まあ、生徒会長だからね。どこかで聞いていても不思議ではないけど……。後は唯先輩とか」

「唯先輩？」

「和先輩は唯先輩の幼馴染みの」

「へえ」

生徒会長と唯先輩を見比べてみる。

(……………)

「あの……、梓先輩……」

「何？」

「……………、本当に……………？」

生徒会長は見るからに優等生そのものな容姿をしている。

ショートヘアだし、眼鏡だし……。

対して唯先輩は、天然マイペース。

人は得てして、相手には自分がないものを求めるといって……。

「オミくん……、何か失礼だよ！」

「えっ！？ 俺、また思考がダダ漏れてました？」

「今のは……、何か顔を見てたら解った……」

（梓先輩……、本当に心を読んだんだ……）

「和先輩は確か、唯先輩たちと同じクラスで、クラス委員もしているんだって」

（生徒会長でクラス委員）

「何か凄い人なんですね」

そう言って、改めて会長に目を向ける。

よくよく見ると、何気に美人さんだ。

知的な雰囲気醸し出しつつ、髪型や眼鏡などではオシャレも忘れない。

「何か……、凄い人だ……」

「ねえ、オミくん……」

「はい？」

「もしかしてオミくんって、和先輩みたいな人がタイプだったりする？」

何故か梓先輩は、俺にだけ聞こえるような小さい声でそう聞いてきた。

「はあ……、まあタイプって言えばタイプなのかもしれませんね」

だから俺も小声で返す。

「そうなの!？」

「だって、生徒会長とクラス委員を兼務するなんて人望が篤いってことだし、きつと成績だって優秀なんでしょ？ 実際、見た目も知的な感じがするし。だけど顔も美人だし、眼鏡もかけてるし……」

「いや……、眼鏡は関係ないでしょ……？」

「いやいや梓先輩、解ってないですね。男って奴はギャップに弱いんですよ」

「ギャップ？」

「そうです！ ギャップです！ たとえば眼鏡美人な女性が眼鏡を外したら、少し幼く、可愛らしくなったりしたら、その普段とのギャップに男はときめくもんなんですよ」

「……………」

「後、例えば、普段は知的な会長が、実は方向音痴で地図が読めなくて、初めての土地では必ず迷子になる……とか」

「あのね……、唯先輩じゃあるまいし……」

「……………」

「……………」

「ですよ〜」

「そうだよ〜」

「そうですね〜」

そう言って梓先輩と笑い合う……と、その時になって周りから注目されていたことに気づいた。

「梓、オミ、さっきまでひそひそ話をしていたと思つたら、何二人して笑い合つてんだよ……」

律先輩の指摘に、他の先輩たちも呆れたような苦笑いを浮かべていた……。

「なっ！ 何でもありません！ 何でもっ！」

だが、そんな言葉とは裏腹に、いつもの定位置に腰かける梓先輩は、みるみるうちに真っ赤になる。

その見事なまでの紅潮っぷりは、まるで自分で自分の言葉を否定しているかのようにだった。

気づくと、いつの間にか会長も梓先輩の席の横に椅子を持って来て座っている。

先程の一年生は、既に帰ったようだった。

「結局、あの一年生たちは何で洩先輩を覗きに來ていたんですか？」

ただファンというだけで、ストーカーまでするというのだろうか……？

「値引きシールを髪に付けた漑が“ステキ”なんだとよ」

そう答えてくれた律先輩は、お約束の如く漑先輩にからかうような視線を送る。

「ステキ……なのか？」

「もう言わないでくれ」

そして遂に漑先輩は、再び机に顔を突っ伏してしまった。

「けどさ、ファンクラブって、何だか曽我部先輩を思い出すよね」

「曽我部先輩？」

しかし聞き覚えのない名前に、唯先輩にそのまま聞き返す。

「ああ、そうか……。オミくんは曽我部先輩を知らないんだっかね……」

「梓先輩は知ってるんですか？」

「うん！ 和先輩の前の生徒会長だった人だよ」

会長の前任者で、梓先輩も知ってるということは、今年卒業した〇

Gということになる。

「へえ。で、どんな人だったんですか？」

話の流れから、漑先輩のファンクラブの人だということは推察できたが、現会長の前任者という面でも、純粋に興味が湧いてくる。

「そっかー。あれから、もうそんなに経ったのか」

「何だか、つい昨日のことみたいね」

「でも私たちにとっても、良い思い出になったよね」

律先輩が、ムギ先輩が、唯先輩が、口々に懐かしむ。

「そんなノスタルジックな思い出があるんですか？」

「まあ……、思い出というか……」

だが、当の漑先輩は齒切れが悪い。

「いいじゃん！ 漑。オミにも話してやれよ」

「はあ」

律先輩からそう言われ、漑先輩は軽く溜め息を吐いたが、今この部屋にいる八人の中で、いや、軽音部員の中で俺一人だけが蚊帳の外という現状を不憫に思ったのか、諦めたように話し始めた。

「思い出も何も……。オミが入学する前、卒業式を間近に控えた時

期だったんだけど、その時も今日みたいに朝から視線を感じていたんだ」

「それで見かねた私が、漣に『生徒会に相談してみれば』ってアドバイスをしたんだよな！」

すると横から律先輩が言葉を挟む。

「へえ、律先輩もたまにはまともなアドバイスをするんですね」

「『たまには』だけ余計だ！」

「いや……、余計なのはおまえの妄想のほうだ！」

「へっ！？ 妄想……？」

「そうだったけ？」

しかし漣先輩からそうツツコまれ、律先輩は視線を背けしらばくれる。

「……………。あの……、それで本当のところはどうだったんですか？」

「うん……。視線を感じて、それで自分から生徒会に相談に行ったんだ……」

漣先輩の話では、ちょうど漣先輩が現会長に相談をしていたところに、元会長の曽我部先輩という人が入ってきたらしい。

曾我部先輩からの指示で、現会長は風紀委員にそのことを伝えることになったのだが……。

「曾我部先輩が落としたカードを拾ったら、それが漣ファンクラブの会員証で、しかも会員番号が一番……」

次いで会長が漣先輩に言葉を続けた。

「それって、つまり……？」

「曾我部先輩が漣のストーカーの犯人で、しかも漣ファンクラブの会長だったのよ……。曾我部先輩、卒業を間近に控えて、漣とお別れするのが辛くて、それでついつけ回していたの……」

要約すれば、漣先輩のストーカーの犯人が、元生徒会長だったということだ……。

「それは言いにくいですよね……。立場的に……」

その曾我部先輩も、もし“元生徒会長”という肩書きがなければ、もしかしたらもっと素直に漣先輩と友達になれたのかもしれない。

そう思うと、確かに曾我部先輩のしたことは正当化できるものではなく、漣先輩にも同情してしまうのだが、それだけのこととして簡単に割り切ることもできないような気がする。

人が人を好きになる……というのは、そんな“善か悪”“是か非”“白か黒”“イエスカノー”というような理屈や理論だけで単純に割り切れるような、生易しいものではないのかもしれない。

だからこそ、人は人を好きになった時、悩み、狼狽え、躊躇い、そして苦しむのだろう……。

たぶん……。

「何か、せつない話ですよね……」

だから、自然とそんな感情が湧いてきた。

「でもね、オミくん。だから私たち、卒業していく曾我部先輩に何かできないかなって考えたんだ」

俺の気持ちを察したかのような唯先輩の言葉。

きっと、その時の先輩たちも、今の俺のような気持ちだったのだろう。

「それで、何をしたんですか？」

その問いに答えたのは、やっぱり唯先輩だった。

「それは勿論、ライブだよ！」

放課後の講堂で、曾我部先輩だけに贈ったライブ……。

「きっとそれって、その曾我部先輩にとっては、最高の贈り物ですよね」

勿論、俺はその光景を見てはいない。

だけど、そう思えてならなかった。

そして俺のその言葉に、いつしか先輩たちも穏やかな笑みを返してくれた。

ただ一人、会長を残して。

「会長、どうしたんですか？浮かない顔をして……」

「うん……。だからね、私、曾我部先輩に申し訳なくて……」

「申し訳ない？」

するとその俺の問いかけに答えるかのように、会長は一枚のカードを机の上に置いた。

そのカードは、ついさっき一年生たちが呈示したものと全く同じ物。

つまりは“秋山澪ファンクラブ会員証”ということになる。

「しかも会員番号一番！」

そのカードに一番驚いたのは澪先輩だろう。

故に驚きを声に出すのも、一番早かった。

「実はあの後、曾我部先輩から強引に押しつけられちゃって……。断れないまま、なし崩し的に……」

（それはまた、ご愁傷さま……）

“ガンッ!!”

なんてことを考えていたら、梓先輩から肘うちを食らわされてしまった……。

（いや、さっきのも絶対、心の中を読んでるだろ……）

「それでね、皆にお願いしたいことがあるの」

そういえば、さっきの一年生たちは澪先輩が髪に値引きシールを付けている姿を見に来たわけだが、会長は何の用件で部室まで来たのだろうか……ということが、実はさっきから気になっていた。

たぶん、それがその“お願い”なのだろう。

会長が何を言い出すのか、皆の視線が会長に集まる。

「ファンクラブでお茶会を開いてほしいの」

そして会長は、そう口にした。

ファンクラブでお茶会？

（要はオフ会のようなものなのか？）

だが“お茶会”と言われれば、先輩たちは黙ってはいないだろう。

「うん！ 解った！ 和ちゃん、私たちに任せて！」

唯先輩がいち早く、賛同の意を表す。

「いつも和には世話になってるしな！」

律先輩もそれに乗る。

この二人がタッグを組んだ時点で、最早お茶会の開催は決まってるんだ。まっただよものものだ。

「そうと決まれば何をする？」

そして最後はムギ先輩が加わった。

（やっぱり、もう決まり……なんだな）

だが今度ばかりは、心情的には唯先輩や律先輩に賛成だ。

会長の気持ちを考えれば、できるかぎりのことをしたい。

そしてせっかく催すのなら、参加する人たちには楽しんでもらいたい。

『人を楽しみ気持ちにさせる』

それはきっと、音楽に携わる者にとっては、忘れてはいけないポリシーだと思っから……。

などと、粋がったことをつらつらと考えているうちに、既に先輩たちは内容についての話し合いを始めている。

「“思い出のアルバム”っていうのはどうだ？」

律先輩が……。

「やっぱり“ケーキカット”は外せないよね」

唯先輩が……。

「私、超特大のケーキを持って来るね」

ムギ先輩が……。

「“質問コーナー”なんてどうですか？」

梓先輩が……。

皆、自分のことのように、楽しそうに、次々と提案している。

しかし……。

「ちょっと、皆……」

主役の漣先輩だけは、戸惑い気味だ。

何かを言いたそうだが、言うタイミングを与えてはもらえない。

そんなふうに見える。

だが、俺には漣先輩の気持ちが解る。

「漣先輩！」

だから漣先輩に、静かに頷く。

「オミ……」

そして漣先輩も、救いを求めるかのような表情で、俺の名前を呼んだ。

俺は、漣先輩の心の内を代弁してみせた。

「皆さん！ 大切なことを忘れていませんか！」

「大切なこと……？」

俺の言葉に唯先輩が首を傾げ、他の皆も俺を見返す。

俺はもう一度、漣先輩と目を合わせ、再び頷くと、「そうです」と答え、漣先輩の気持ちを代弁した。

「漣先輩のファンクラブのお茶会なら、当然ライブでしょ！」

「オミ」

しかし漣先輩からは気の抜けたような声が……。

「へっ！？」

そして漣先輩の表情から生気が消え、遂には言葉を発することすら諦めてしまったようだった……。

「ライブ良いね!」

そんな漑先輩を余所に、梓先輩が食いついてきた。

「ほんと! オミくん、グッド・アイデアよ!」

ムギ先輩も華やかな笑顔を向けてくる。

「じゃあ、せつかくだから新曲やろうよ!」

唯先輩もやる気満々だ。

「勿論、漑がメイン・ボーカルな」

そして最後は律先輩が……。

(いや……、律先輩は完全に面白がつてるだろ……?)

「それじゃあ、お茶会の内容は、皆に任せていいかしら? 私は会場の手配と告知をするから」

「OK!」

会長の提案に律先輩がサムズ・アップで答え、遂にお茶会の開催は決定した。

*

お茶会当日。

段取りの確認やら何やらが終わると、最近は恒例となったバンド練習を、今日も朝からみっちり行った。

何せ、お茶会では新曲を披露することになったのだから、自ずと気合いも入るというものだ。

（まあ、提案したのは俺だけど……）

だけど、それでも俺にとっては初めてのライブだ。

曲目もすぐに決まった。

それは俺が軽音部に入部したあの日、漑先輩が屋上で作詞をしていた曲だ。

他の曲が、俺の入部をきっかけに、ムギ先輩がツイン・キーボード・バージョンにアレンジし直したのに対し、この曲は初めて最初からツイン・キーボード・バージョンとして生まれた曲だった。

とはいっても、俺が入部した段階で作詞の途中だったわけだから、単にアレンジまで作業が進んでいなかったただけなのだが……。

だが、小規模で全員が漑先輩目当てだとは解っていても、やはり初ライブとなると緊張もするし、それ以上に興奮もする。

そして昼休み……。

最後の調整へと入る。

鉛筆や消しゴムなど、唯先輩曰くの“ 澪ちゃんグッズ ”も数が揃った。

（っっていうか、孫の手は需要があるのか……？）

まあ、グッズといっても、澪先輩の顔が写ったシールを貼っただけなのだが……。

（というか、グッズのシールに、目が半開きの写真って……）

澪先輩は相変わらずの頂垂れようだが、他の先輩たちの盛り上がりようも相変わらずだ。

「けど、今日は憂先輩がクッキーを焼いてくれたし、ムギ先輩の特大ケーキも付くし、何気に豪華じゃないですか？」

「それに今日は、いつも以上に気合いの入った紅茶葉を持って来たわ！」

ムギ先輩も気合いが入っているようだ。

そういえば、お茶会の役割分担なども、率先してテキパキと割り振っていたのはムギ先輩だ。

まあ、ただ、誰が割り振ったとしても、結果は同じだったかもしれないが……。

律先輩と唯先輩は司会進行、ムギ先輩はケーキと映写機の準備と撤収、そして俺は梓先輩と楽器のセッティング。

ちなみに、当日は会長と山中先生も、舞台袖からお茶会を見守るようになった。

「ところで会長。肝心の曾我部先輩は来てくれるんですか？」

「うん……、それがね……」

しかし会長は、少し俯き加減で言いにくそうな表情を作る。

「今日から大学のサークルで旅行に行くから無理なんだって……」

会長の言葉に「ああ……」と声を漏らしたのも、俺だけではない。

「曾我部先輩が来れないんじゃない？ あ、お茶会をする意味がないんじゃないか？」

律先輩がそう言うと、自然と互いを見回した。

「日程を変える？」

「その必要はないわ……」

ムギ先輩の提案を、会長は即座に否定する。

「でも……」

「もう告知をしたのなら、日程を変える必要はないって……。曾我部先輩は『現在の会員でファンクラブを盛り上げてくれればいい。それだけが願いだから』って言うって……」

会長の言葉に、再び俺たちは互いの顔を見回した。

「何だか、大人な発言だね……」

そう言う唯先輩は、どこことなく寂しそうだ。

「高校を卒業して、澪ファンも卒業したんじゃないか？」

律先輩はそんな軽口を叩くが、それが俺には、唯先輩と同じく寂しそうに、だけどそれを振り払おうとしているかのように見えた。

「そんなことはありません！　きっと本当に予定が入っただけで、本当は凄く来たかったに違いありません！」

だからそう律先輩に言い返す梓先輩の表情も、寂しそうに見える。

「そうですね……。梓先輩の言うとおり、きっと残念がってますよ」

そして俺は梓先輩のそんな言葉に、素直に同調した。

梓先輩は少し驚いたのか、一瞬『はっ』とした表情で俺を見上げたが、俺はそんな梓先輩に少しだけ微笑んで、「俺はそう思います」とだけ、言葉にした。

梓先輩にだけ聞こえる程の、小さな声で……。

「うん……、そうだね……」

梓先輩からの言葉は、そう俺にだけ聞こえるぐらいの声で、それでももう、微笑んでいた。

「あつ、でも学園祭のライブには、絶対に来るって言ってたから……」

その場の空気を察したのか、最後は会長がそうフォローを入れ、その後、曾我部先輩の話題は誰も口にはしなくなった。

大学……。

サークル……。

俺にとって先輩たちが、前を走る背中なら、もしかしたら曾我部先輩は、先輩たちにとっての背中……なのかもしれない。

今まで漠然としていて、それでいて混沌としていた未来の自分。

まだまだうつすらと、かすかにぼんやりとしか見えなかったそんな未来の自分の姿が、その曾我部先輩を通すことで、ほんのちよっぴりだけ垣間見えたのかもしれない。

今の自分には見当もつかないことだけど、先輩たちは既に見当をつけなくてはいけなところまで来ている……ということなのだろう。

だけど今は、もう少しこのままで……。

そんなふうに考えてしまうのは、自分勝手なワガママなのだろうか……？

そうだ……。

相変わらず目の前では、律先輩が漣先輩にちよっかいを出し、漣先輩から拳骨を食らわされている。

相変わらず目の前では、唯先輩とムギ先輩が楽しそうに笑いながらお喋りをし、それを会長がやはり微笑みながら見ている。

このままずっと……。

このままずっと、こうしていられたら……。

このままずっと……。

このまま……。

このままずっと……、こうしてこのメンバーと一緒にいられたなら……。

ついそんなことを考えてしまう。

解っていることなのに。

ずっと一緒にいたいと望むのは、ずっと一緒にはいられないことを知っているからなんだって……。

「どうしたの？ オミくん」

俺の傍らで、梓先輩がそう声をかけてくる。

身長が二十センチも違うから、梓先輩は上目遣いになっている。

そんな梓先輩の存在に、何故だか今はホッとする。

「いいえ、何でもありませんよ……」

だから笑ってそう返す。

梓先輩は「ふん」と納得したのかしてないのか解らないような声を出すと、もうその次には「ああ、もう！ 唯先輩！」と言いながら、唯先輩のほうへと歩み寄った。

そんな光景もまた、いつもの軽音部らしい……。

なんて、ふと感じてしまった。

「うう。人の気も知らないで」

そんな声のしたほうに顔を向けると、やはり澪先輩が項垂れている。

「澪先輩、まだ抵抗ありますか？」

澪先輩の傍にそっと近づき、そう聞いてみた。

「当たり前だろ！ ファンだとか言われるだけで恥ずかしいのに、その上ファンクラブだのお茶会だの……」

想像したのだろう。

澪先輩の頬がみるみる紅潮していく。

（澪先輩も、相変わらずか……）

「けど、漣先輩。フアンクラブの人たちは、漣先輩の存在に励まされたり、勇気を貰ったり、幸せな気持ちになったりしてるってことですよね？ それって凄くないですか？」

「へっ！？ すっ、凄くなんかないよ……」

「俺は……、凄と思いますよ！」

「オミ……」

「俺たちは皆、好きだから音楽をやっている。けど、そんな俺たちを見て、幸せな気持ちになる人がいるとしたら、俺は嬉しいです。自分が好きなことをする姿が、誰かの好きなことに繋がる。今の漣先輩がそれでしょ？ 確かに漣先輩は恥ずかしいかもしれないし、本心では乗り気ではないかもしれない。けど、ちよっとだけ頑張りませんか？ 漣先輩がちよっとだけ頑張れば、幸せな気持ちになれる人が、少なくとも、この学校にはいるんだから……」

ガラではないことは百も承知だ。

だけど、やっぱり俺はそう思う。

そして、そう思うということを、やっぱり俺は、漣先輩に伝えたい……と、そう思った。

果たして、それを静かに聞いていた漣先輩は、心なしか口角が上がっていく。

「まったく！ 難しいことを、さらっと言ったな、オミは……」

そしてそう言うと、今度はちゃんと……笑った。

*

「え、今日は第一回秋山澪ファンクラブお茶会にお集まりいただき、まことにありがとうございます！ 僭越ながら司会を務めさせていただきます私、田井中律と」

「平沢唯です」

「よろしくお願いします！」

「よろしくお願いします！」

律先輩と唯先輩の司会で、遂にお茶会は幕を開けた。

二人は壇上で事前に仕込んできたネタを披露するが、ウケ具合は上々のようだ。

「たくさん集まりましたね」

梓先輩の言葉に、何気なく会場を見渡すが、確かにここまで澪先輩のファンクラブに会員がいるとは思わなかった。

（ざっと数えて二十人……くらいか？）

「何か知ってる顔もちらほら……」

会長も満足そうだが、その知ってる顔にやや複雑そうな表情だ

「本日の主役の登場！」

そして唯先輩の紹介によって、いよいよ本日の主役の登場だ。

「あきやまみ〜お〜！」

ウェディング・マーチに合わせて、澪先輩が入場……したのだが。

（ああ……、もう少し笑えばいいのに……）

俯き加減で歩くその顔には、心なしが影すら見える。

だが、会場は盛大な拍手が鳴り響き、澪先輩の登壇には更に一層その音は大きくなった。

俺やムギ先輩、梓先輩、会長のいるステージ上手側の舞台袖とは反対側になる下手側の舞台袖に、一人いた山中先生の元へと司会の二人も引っ込んだのだが、そこから聞こえた声に澪先輩が『いや、ないから！』と叫び、三人は何やら『ブー！ ブー！』と文字通りの言葉で反論し始めた。

「本日はお忙しい中……」

ここからが本当の意味での本番だ。

澪先輩によるスピーチで、いよいよ開会となる。

「おあつっ！」

（あつ、噛んだ……）

「あつ！ 噛んだ！」

「でも、そこが……」

「かつわいいっ！」

当の澪先輩が噛んだ舌の痛みに耐える中、その姿に会員たちは感嘆の言葉を漏らす。

「おあつつつまりいたがきっ！」

「あつ、また噛んだ……」

「オミくん！」

再びの舌噛みに、今度は声に出てしまったところを梓先輩に窘められた。

（しかし……、大丈夫なのか……？）

基本的に恥ずかしがりやであがり症なのは知っていたが、今日はいつにも増して緊張しているようだ。

まあ、もつとも会場はそんな澪先輩に黄色い声援がやまない状況ではあるのだが……。

「いたがきたいすけ……」

そして遂にはその一言で、黄色い声援は一際盛り上がりを見せた。

（って……、マジでか……）

「それではスピーチはこのくらいにして、ケーキ入刀に移ります！」

唯先輩の司会を合図に、ムギ先輩が持参した超特大のケーキを、ムギ先輩自らが壇上へと運ぶ。

ムギ先輩は満面の笑みだが、こうして見ると、やはりかなりデカイ……。

それはまるで、本物のウェディング・ケーキのように……。

「さあ、澪ちゃんどうぞ！ 初めての共同作業です！」

「誰との！？」

「あずにゃんがお手伝いします！」

「ええっ！」

俺の横で驚く梓先輩を見るに、これは……、

（唯先輩のアドリブだな）

驚きながらも澪先輩の元へと歩み寄る梓先輩だったが、ケーキに入刀するその表情は、完全に放心状態のようだ。

それは隣の澪先輩と同じように……。

だが、しかし……。

「ムギ先輩……」

「なあに？ オミくん」

澪先輩と梓先輩に、相変わらずの満面の笑みで拍手を贈るムギ先輩に、疑問を一つ投げかけてみる。

「普通、ケーキ入刀って、男女のカップルですよ？ 何で唯先輩は、男の俺でなく、女の梓先輩を選んだんでしょう？」

これは妥当な……、当たり前前の疑問だと思う。

だが、ムギ先輩はそんな俺の疑問に、至極単純明快な答えを出してくれた。

たった一言で……。

「ファンクラブの人たちを敵に回すことになるからじゃない？」

そう言われて、改めて黄色い声援が飛び交う会場を見る。

「……………」

（さもありなん……）

「それでは、これよりケーキとお茶のサービス、及び秋山澪本人によるキャンドル・サービスを行います！」

そんなことを考えているうちに、唯先輩は次のイベントを告げる。

「おっ！ 出番ですね！」

「オミくんもよろしくね」

「はい！」

さつき澪先輩と梓先輩によってナイフを入れられたケーキをムギ先輩が切り分け、それを俺が各テーブルへと運ぶ。

梓先輩は紅茶をカップに注いで回り、そして澪先輩はやはり各テーブルに置かれているキャンドルへと、火をつけていく。

そのキャンドルの全てに火が灯った頃、澪先輩が再びステージに戻り、椅子に腰かけたのをきっかけに、律先輩は次のプログラムへと進んだ。

律先輩が告げた次のプログラムとは、題して“秋山澪への百の質問”コーナー。

つまりは澪先輩に質問をしようという企画で、もともとは梓先輩の提案だ。

だが……。

「まず最初の質問！ 今までで一番怖かった話は？」

「へえっ！？」

「次の質問！ 二番目に怖かった話は？」

「なっ、何てことを聞くんのだ！」

「次の質問！ 三番目に怖かった話は？」

「やゝめゝろ」

「次の質問！ 四番目に怖かった話は？」

「もはや悪乗りだ……。」

「ムギ先輩、止めなくていいんですか!？」

澪先輩のあまりにももの怯えように心配して、隣にいたムギ先輩にそつと訊ねてみる。

しかしムギ先輩は、まるで『見て……』とでも言つように、笑顔のままで会場を指差した。

「頑張つて」

「ファイトです」

「澪さん」

(つて……、皆……、超うつとりしてる……)

一頻り律先輩と唯先輩からの弄りが続いた後で、今度は会員からの質問となる。

会員からの質問は、オーソドックスなものばかり。

「お風呂に入ったらどこから洗いますか？」

「鯛焼きは頭から食べる派ですか？」

だがそんな質問にも、“シャワーヘッド”だの“ヘラボタ”だのと、
澪先輩のとんちんかんな答えが続く。

ムギ先輩は相変わらぬ笑顔だが、梓先輩の表情には、俺と同じ気
持ちなのか、心配そうなそれが表れていた。

そして遂には、その質問コーナーが終わってみると、澪先輩は真っ
白な灰と化してしまった……。

それはまるで、ホセ・メンドーサとの闘いを終えた後の、矢吹丈の
ように……。

「それでは次のプログラムに移りましょう！」

律先輩の言葉を合図に、俺はムギ先輩と一緒に映写機をセッティン
グし始めた。

梓先輩はスクリーンを下ろす。

「ここまで立派に育った澪ちゃんの半生を、スライド写真とともに
振り返りたいと思います！」

唯先輩はそう言うと、ムギ先輩に何やらジェスチャーを送り、それ

をきっかけにムギ先輩が映写機に電源を入れた。

“秋山漣・生いたちアルバム”と銘打たれたスライドには、漣先輩の子供の頃からの写真が映し出される。

律先輩と一緒にブランコに乗っている写真。

運動会の徒競走で、律先輩がゴールテープを切るすぐ後ろを懸命に走る写真。

どちらも小学生の時のものだろう。

（っていうか、律先輩のほうが目立ってねえか！？）

中学生の時の写真は、きっと文化祭だろう。

そしてこの学校の正門の前で、律先輩と並んで写っている写真。

きっとこれは入学式の日のものだ。

（俺は入学式、出てねえからな）

そんなことを、ふと思い出す。

この部室の写真も映し出された。

おでこにハートを描かれた律先輩と、何かの顔真似（？）的な変顔をしているムギ先輩も写っている。

砂浜で埋められた唯先輩の上に、律先輩が転ぶ写真。

浴衣を着ている写真には、梓先輩が写っている。

きつと去年の学園祭のものなのだろう。

朝日に向かって走っている写真は、いかにも“青春”という感じがして、どこかノスタルジックな気持ちにさせられる。

それらの写真は皆、俺が軽音部に入部する前の……、いや、桜高に入学する前の先輩たちだ。

俺が知らない二年間の先輩たち……。

そこに俺がいないという現実は、言うまでもなく当たり前のことなのに……。

悔しく、それでいてせつなく感じるのは何故なんだろう……。

スライドの後は、いよいよ新曲のライブだ。

「宴もたけなわではございますが、いよいよ次で最後のプログラム……」

律先輩と唯先輩がステージで繋いでくれている間に、映写機を片づけ、楽器のセッティングに取りかかる……はずだったのだが。

「ちょっと待って！」

それを湊先輩が制した。

「今日は、私のために集まってくれて、本当にありがとう……。私……、この感謝の気持ちを上手く言葉にすることができないので……、詩を作ってきました」

（おお！ サプライズ！！）

想定外の嬉しい展開に、会員の中からも、どよめきが起こる。

かけていた椅子から立ち上がり、ステージ前方へと歩み寄った漣先輩は、ポケットから取り出した紙を広げ、そしてそこに書かれてある詩を読み上げた。

（……………）

漣先輩が自作の詩を読み上げる。

（……………）

読み上げた……。

（……………）

のだが……。

（これは……………！？）

かなり独創的だ……。

会場を見回すと、ついさっきまで沸いていた空気が嘘のように、皆が皆、複雑そうな表情を浮かべている。

「なるの！」

詩の読み上げが終わり、漑先輩が満足気な表情で顔を上げる……のだが。

「さすがの漑ファンも、漑の境地までは辿り着けなかったか……」

律先輩が小さく呟く。

場の空気を察したのか、漑先輩の表情も、満足気なものから、しだいに曇り始めた。

「さあて、次はいよいよ！ 放課後ティータイムのライブです！」

律先輩がステージへと飛び出し、場の空気を変える。

唯先輩も律先輩に続いてステージへと出て行き、MCに加わる。

「新曲、“ぴゅあぴゅあはーと”です！」

ムギ先輩が漑先輩もろとも椅子を舞台袖へと片付けると、俺も梓先輩と目配せをして楽器のセッティングに取りかかる。

いよいよだ。

いよいよ、俺にとっての初ライブ。

初ライブなのに、音楽室でのお茶会で二十人程の生徒を相手に……なんて、何だか返って俺らしい気がする。

いつもはフロント右に立つ漣先輩が、今日はセンターに立つ。

今日の主役であり、この曲のメイン・ボーカルだからだ。

漣先輩の左には唯先輩。

コーラスも担当する唯先輩の前にも、マイク・スタンドを立ててある。

そして、漣先輩の右には梓先輩、その後ろにムギ先輩、その左に律先輩がいて、更にその左が俺だ。

フロントはギタリスト二人で漣先輩を挟み、バックはキーボーディスト二人で律先輩を挟む形となった。

律先輩がスティックを鳴らし、カウントを始める。

その一瞬だけが緊張を走らせるが、その次の瞬間には、もう音の風に乗っていた……そんな感覚だった。

イントロが終わり、漣先輩のボーカルが続く。

片想いの、淡く、甘く、せつなく、そして前向きな、女の子の気持ちを綴った歌詞が、アップテンポの曲に乗って、すっと心へと入り込んでいく。

漣先輩のボーカルに、唯先輩のコーラスがハモる。

唇だけで歌う梓先輩も、楽しそうにギターを弾く。

同じキーボードのムギ先輩とは、時々視線を合わせ、アイコンタクトでコミュニケーションを図った。

そしてチラッと律先輩にその視線を移すと、律先輩も『ニカッ』と笑う。

“一体感”

いろいろな想いが渦巻く中、だけど途中から俺の心を占めていた気持ちは、まさにそれだった。

（これが……、ライブ……。これが……、バンド……。なんだ！）

長い長い……。だけど『あっ』という間の初ライブは、そんな感覚を残したまま、幕を閉じた。

*

お茶会も終わり、会場となった音楽室では、記念撮影が行われている。

湊先輩を最前列の真ん中に、雛壇を使って並んでいるのだが……。

「はい！ 次はこっちを向いて〜！」

「はい！ 次はこっちです！」

律先輩と唯先輩が、携帯を替えながら、次々と写メを撮っていく。

しかし二人の呼びかけにも、皆は澪先輩にばかり視線を向け、携帯のレンズのほうを向く者など一人もいない。

だけど、そんなことも含めて、この“秋山澪ファンクラブお茶会”を、無事に、そして盛況に終えることができて、安堵と達成感に満たされた。

「この盛り上がり……、曾我部先輩にも、見せたかったな……」

会長がそう呟く。

もともと、その曾我部先輩のために……という名目から企画されたお茶会だった。

特に会長は、曾我部先輩とは付き合いも長く、俺たちより絆も深いだろう。

「何か……、形に残るようなことって、できませんかね……？」

特に何か案があつての言葉ではない。

ただ、会長に釣られて……つい口をついて出てきた言葉だった。

「そうだ！」

そんな想いを察してなのか、梓先輩は自分の携帯を取り出すと、徐々に写メを撮り始める。

「そんなもの撮って、どうするの？」

会長の問いかけに、梓先輩は、

「曾我部先輩に送ってあげるんです!」

そう笑顔で答えた。

「けど、メアドが……」

「アドレスは生徒会で調べてください!」

そしてそう言っ、梓先輩はシャッターをきった……。

「曾我部先輩、喜ぶわね」

隣でその光景を見ていたムギ先輩も、そう言っ微笑む。

「そうですね……」

だから俺もそう返した。

「それに……」

「それに……?」

「俺、解ったことがあるんです」

今日のお茶会を通して解ったこと。

それは改めて感じた、零先輩の魅力だった。

「解ったこと？」

「はい。漑先輩って、一見すると、凛々しいし、カッコいいし、しっかりしてるし、頼もしいし……。それって同性から見ても、かなり魅力的だと思うんです」

「そうね」

ムギ先輩は相変わらずの笑みで、そう相槌を打ってくれる。

「けど、漑先輩の本当の魅力はそんなことじゃなくて……。人一倍の恥ずかしがりやだったり、人一倍の怖がりだったり、そして人一倍ロマンチックで乙女チックで……」

「ふふふ……」

「でもそんなところも全部まとめて、漑先輩は皆から愛されているんだって。外見なことだけでなく、短所も内面も全部ひっくるめて……」

「全部ひっくるめて……か」

「それって、やっぱり凄いなって……」

「漑ちゃんってね、頼りになるお姉さんの部分と、守ってあげたくなる妹の部分が同居しているようなところがあるもんね」

「はい。本当に……。魅力的な、素敵な人……ですよね」

「オミくんも好きになっちゃったのかな？」

ムギ先輩の笑顔が、満面になる。

「そうですね！」

「あらあら……」

「人として、懂れます！」

「そっかー」

そしてやはり微笑むムギ先輩に釣られるように、俺も自然に口角が上がった。

「何々？ 二人して笑って、何の話をしているの？」

「梓先輩には内緒です」

「ええっ！？ 何だよ？ オミくん！ ムギ先輩？」

「私とオミくんの秘密……よね？」

「ムギ先輩もですかー！？」

そんな梓先輩に、俺も、ムギ先輩も、また……笑った。

#8 光を目指して

返ってきた答案用紙を机の上に並べる。

『オミくん、凄い!』

それを見た梓先輩が、そう感嘆の声を上げた。

瞳を輝かせながら……。

それもそのはず、そこに並べられた答案用紙は、そのどれもが百点なのだから。

全教科で百点など、ムギ先輩や澪先輩だって、そうそうないはずだ。

だからこんな日くらいは、手放して褒めてもらってもいいと思う。

満面の笑みで、称賛の言葉を口にする梓先輩に対し、少し……いや、かなり誇らしげに、だから俺は胸を張った。

『じゃあ、オミくん。本番の試験も、この調子で頑張ってね!』

『えっ!? 本番?』

『そう! 本番!』

(本番……? 本番……?)

*

重たい瞼を開けると、目の前には天井が見えた。

ということは、俺は今、仰向けに寝ているということになる。

(……………、っていうか……………)

「夢オチかよ!!」

まあ、内心『俺が全教科を百点』なんて、夢みたいな話だとは思ってたが……………。

(本当に夢かよ……………)

カーテンの隙間から入り込む光から、もう朝だということは察しがついた……………のだが、一応、目覚まし時計を確認すると、朝どころか既に昼前という時間を、その針が示していた。

(そろそろ起きるか……………)

昨日の滯先輩のファンクラブお茶会は、盛大かつ盛況に幕を閉じ、また俺自身は初ライブということも相俟って、達成感と充実感をひしひしと感じながら、その後の打ち上げに参加した。

打ち上げが終わって、家に着いた時には、既に二十時を回ってはいたのだが、その時もライブの余韻は消えず、風呂から上がった後、その残った余韻に浸るように、キーボードに向かったのが二十一時半。

それから何時間、キーボードを弾いていたのか解らないが、気づい

た時には、カーテン越しに浮かぶ光が、漆黒からオレンジへと変わっているのを確認し、そのままベッドへと入ったことは覚えている。目覚まし時計を元の位置に戻すと、カーテンを開け、窓を全開にする。

そして寝間着代わりに着ているスウェットのまま階下に降りると、キッチンへと向かった。

キッチンに併設されてあるリビングのドアを開けようと、ノブに手をかけたところで、その中から賑やかな……いや、姦しい声が聞こえてきた。

（お客さんかな？）

まあしかし、父さんが単身赴任中の我が家において、休日の昼間から来る客なんて、母さんか姉さんの友達に決まっている。

もし俺の友達なら、必ず起こされただろうし……。

ならば、何も遠慮することはないだろう。

家にあげるということは、俺が気を遣わなくてはいけないような畏まった相手ではないということだ。

たぶん……。

だが果たして、そのドアを開けた時、リビングのソファに座っていた顔ぶれは、やはり見覚えのあるそれらだった。

「あつ！ 孝臣、おはよう。っていつか、もう昼だぞぉ」

「うん……、おはよう。昨日、夜更かしし過ぎたみたいで、爆睡してたよ」

頭をガシガシと掻きながら、姉さんの挨拶にそう答え、そのままキツチンの冷蔵庫へと向かった。

「っていつか、そのメンバーがウチに集まるのって、久しぶりなんじゃない？」

そして、冷蔵庫から取り出したミネラル・ウォーターを一息に飲んで、そう聞いた。

そこにいた顔ぶれは、姉さんがまだ独身の頃は、しょっちゅうウチに泊まりに来ては……よく俺を弄っていた連中だった。

最後に会ったのは確か、姉さんがアフリカに発つ日、空港まで見送りに行った時だから、もう四年も前ということになる。

「なかなか予定が合わなくってね。やっただよ」

そう答える姉さんに「ふん」と返し、他のメンバーには「じゃあ、ごゆっくり」と挨拶代わりに声をかけ、洗面所へと向かった。

（今日は出かけるか……）

あのメンバーが集まったということは、きっと家の中で勉強することとは不可能だろう。

絶対に弄られるに決まっている。

特に今日は、梓先輩との『一日二時間、勉強をする』という約束を、昨日は果たせなかったので、その埋め合わせも含めて、勉強しなくてはならない。

（図書館にでも行くか……）

シヤカシヤカと歯を磨きながら、そう結論を出した。

*

図書館の入り口が見えた時、見覚えのある顔が目についた。

（あれは……）

「会長！」

まだ少し距離があつたので、意識的に大きな声で呼びかけてみる。

すると、その声に反応するように、会長も微笑みながら手を振ってくれた。

真鍋和先輩……桜高の生徒会長だ。

手を振る会長に駆け寄る。

「おはようございますー！」

そしてそう挨拶をすると、

「おはよう……というよりも、もう“こんにちは”だけだね」

と、やはり笑顔で返してくれた。

「ですね……」

だから、そう言っただけ俺も笑う。

「会長も勉強ですか？」

肩にかけた、“お出かけ用”というには少し大きめのバッグに視線が移る。

「うん。もうすぐ期末だからね」

「ですよ……」

やっぱり会長は、休日でも優等生のようだ。

「乾くんも勉強？」

「はい、一応……」

「ふん。意外にマジメなんだね」

「えっ！？」

「あっ、ごめん！ “意外に”なんて言ったら失礼よね……」

しかし会長の表情には、逆に少しも悪びれたところはなく、むしろ屈託もなかった。

「はは……。梓先輩と約束したんですよ。毎日二時間勉強して、期末は全教科平均点以上取るって……」

そう言って、頬を人差し指でコリコリと掻いた。

「けど、そんな約束するなんて偉いじゃない。だったら有言実行しなくちゃね」

会長はそう言つと、相変わらず笑っている。

「ですよね……」

俺のほうは苦笑いにしかないが……。

「それで、今日は何を勉強するの？」

「古文です」

そして少しオーバーにバッグをかざしてみせる。

「そうなんだ。じゃあ、せっかくここで会ったんだし、一緒に勉強しましょうか。解らないところがあつたら、教えてあげるから」

会長はやはり笑顔だ。

「でも、そうになると俺の質問のせいで、会長が勉強する時間がなくなっちゃうかもしれませんよ」

「あら。もしそうなら、尚更一緒にやったほうがいいわね」

そう言って、微笑みながら図書館へと入って行く会長に着いて行くように、その後ろに続いた。

*

図書館に入ったのが十一時を少し回ったところだったから、かれこれ二時間、勉強したことになる。

一年生の古文は、堀込先生が試験問題を作成すると言うと、

『堀込先生の場合は、とにかく基礎をきちんと押さえておく必要があるわね』

と、レクチャーしてくれ、そこからは文法や解読などの基礎を徹底的に覚えた。

会長曰く、堀込先生の作成する試験問題は、基礎をきちんと理解し、それを適切に応用できるかを見る内容になっているらしい。

つまりは、付け焼き刃の丸暗記は通用しない……と。

『だから、点数の良い人と悪い人の差が大きいの』

ということだった。

そのあたりが実に巧妙なのだという……。

図書館を出て、大きく伸びをすると、ふと隣の会長に視線を移す。

すると会長も、やはり大きく伸びをしていた。

結局、最初の心配のとおり、会長はこの二時間の殆どを、俺へのトレーニングに費やし、自分の勉強は決して捗ってはいないようだった。

『私も復習になったから』

だけど、そんなことを気にする俺に、会長はやはり優しく微笑みながら、そう言ってくれた。

「そうだ！ 会長、腹減ってません？」

「えっ！？ うーん。そういえば、お昼まだだったし……」

そう言って、軽くお腹の辺りを擦る会長に、「何か食べに行きませんか？」と誘ってみる。

勿論、俺自身が朝から何も食べていないということもあったが、自分の勉強時間を割いて俺の勉強を見てくれたことに対するお礼の気持ちからだった。

「今日のお礼に、俺、奢っちゃいますよ！」

だからそう付け加えたのは、まさにその気持ちの表れだ。

「ええっ！？ そんな悪いわ。ちゃんと割り勘にしましょう」

「いいえ、せめてそのくらいはさせてくださいよ。と言ってもラーメンくらいしか無理ですけどね……」

そう言うと、さすがに諦めたのか、多少『やれやれ』といった表情を浮かべてはいたが、やっと「じゃあ、お言葉に甘えるわ」と折れてくれた。

「その代わり、めちゃめちゃ旨いラーメンご馳走しますから!」

そしてサムズ・アップをしながらそう言うと、

「あら、私もラーメンは好きよ。じゃあ、期待させてもらっわね」という言葉と、そして、またいつもの笑顔が返ってきた。

*

“はるもと屋”

馴染みのラーメン屋だ。

最近のご無沙汰気味だったが、それこそ中学時代は、部活の後によく寄ったものだ。

「このワンタンメンがサイコーなんですよ!」

という俺のススメもあり、会長も俺と同じくワンタンメンを注文した。

「けど……、本当にすみません」

「あら！？ 何が？」

注文を終えたところで、改めてそう頭を下げたが、当の会長はきょとんとした表情をしている。

「結局、会長の勉強の邪魔をしてしまったみたいだから……」

結果的には、会長は俺に勉強を教えるために図書館に来た……みたいな展開になってしまっていた。

「それは大丈夫だって！ 私も復習になったって言ったでしょ」

「けど、復習って言っても、一年生の試験範囲なんて、三年生の試験にはあまり関係ないんじゃない？あ……？」

「復習っていうのは何も今回の期末試験に限った話ではないのよ」

「えっ！？」

「私ももうすぐ受験だし。もともとこの夏は、どの教科も基礎をもう一度復習するつもりだったの」

「受験……ですか？」

「うん！」

気を遣う俺に、努めて会長は笑みを絶やさない。

ただ会長の言葉の“受験”というフレーズに、思わず反応してし

まう。

「そっか……。三年生はもう受験……。なんですよね」

「そうね。この前、進路希望調査があつてね、それを書いていた時、急に受験を意識しちゃって……。だから改めて、もう一度基礎を復習しようなんて思いついたのかもしれないわね」

「会長は進路は決めたんですか？」

それは何気なく聞いた質問だったが、きっと会長ならそのくらいは決めていても不思議ではないだろう。

「私の将来の夢は、弁護士か検事よ。だから大学では法律を学ぶつもりなんだけど、思いきってセンター試験を受けてみようと思うの。今の成績だとちょっとぴり厳しいけど、国立に挑戦してみようかなって……」

そう言つて会長は、少し照れたように笑い、頬を指で撫でた。

（ちょっとぴり厳しい……か）

しかしそれも半分は謙遜も入っているのだろうか……。

「そつえば会長……」

「ねえ、乾くん」

「はい……？」

「私、実はさつきから気になっていたんだけど……」

「何でしょう?」

ただ会長の写真は変わらないままだ。

「学校の外でも“会長”っていうのは、ちょっとやめてほしいかな……」

「そうですか?」

(これほど“会長”という呼び名が、ぴったりだというのに……)

では、何と呼ぶべきなのか……?

まあ、そこは普通に……、

「じゃあ、“真鍋先輩”って呼びますね」

そう提案した。

「下の名前でいいわよ」

しかし即座にそう否決されてしまう。

「けど……」

「軽音部の人たちは名前で呼んでいるんですよ?」

「まあ……、それは本人たちからのリクエストなんで」

「それなら私も、本人からのリクエストよ」

その瞬間、会長の笑みが、少し悪戯っ子っぽいそれに変わったように見えた。

「けど会長は会長だし……」

「軽音部の後輩なら、私にとっても仲間みたいなものだし。それに……」

「それに……？」

「それに、乾くんには何となくそっちのほぅが似合っている気がするから」

「それはどういう……？」

だけど会長は依然と微笑むばかりだ。

「解りました！　じゃあ、“和先輩”でいいですか？」

……と、まあ結局は俺が折れることにはなるのだが……。

「うん！　私も乾くんのこと、“オミくん”って呼ぶから」

「“オミ”でいいですよ。そっちのほぅが“和先輩”には似合っている気がしますから。何となく……」

だからそう言って、今度は俺のほぅが悪戯っ子っぽい笑みを返した。

「はい！ ワンタンメン二つね！」

ちょうどそこへ、先程注文したワンタンメンが運ばれてきた。

「チャーシュー、サービスしといたぜ！」

見ると、確かに二つのワンタンメンは、ワンタンどころかチャーシューまでもがてんこ盛りとなっている。

「孝臣が女性を連れて来るなんて珍しいからな！」

店主である“オヤジさん”は、そう言つて『イヒヒ』と笑う。

「そんなじゃないよ！」

「ほお〜！ “そんなん” って、どんなんだよ？」

「いや……、だから……、その……、それは……」

しどろもどろとなりながらも、横目で和先輩に視線を移すと、和先輩は『ふふふ』と笑っている。

「先輩！ そう！ 同じ高校の先輩だよ！」

「同じ高校の先輩……ねえ」

だがオヤジさんは、腕を組んだまま探るような視線をこちらに向けてくる。

勿論、笑いを噛み殺すような表情で……。

「しかも生徒会長だぞ！」

「オミ……、だからもうそれはいいから……」

伝家の宝刀をかざすと、しかし今度は和先輩のほうからツッコミが入った。

「ははは、まあ何でもいいさ！　けど直人が見たら驚くかな……と
思ってたさ」

「そういえば、直人は元気にやってるの？」

「ははは。あいつは今でも孝臣が作ったメニューをやってるぞ！
今年こそは悲願を達成するってな！」

まあ、時間があつたら応援にでも行ってやってくれ！！」

そしてそう言つて、俺の肩をバンバンと叩くと、オヤジさんはカウンター向こうの厨房へと入っていった。

「直人って……？」

その会話が途切れるのを待っていたかのように、和先輩が聞いてきた。

「ああ、直人はここの……、あのオヤジさんの息子で、俺の中学の
バスケ部の後輩です」

「そうなんだ」

「去年の夏の大会の後、俺たちの代が引退してからはキャプテンを務めてるんですよ」

「確かオミも中学時代はバスケット部のキャプテンだったのよね？」

「はい。俺の後継者つてことになりますね」

「じゃあ、その頃からここは馴染みなんだ？」

「馴染み……というより、溜まり場です。オヤジさん、俺たちには大盛りとかチャーシューとか、よくサービスしてくれてたんですよ」

言わばここも、思い出の場所……と言えるのかもしれない。

「さあさあ、そんなことより早くワンタンメン食べましょうよ！
伸びたら台なしです」

そして俺は、少しノスタルジックな気持ちになりながら、あの頃と同じ味のワンタンメンを、あの頃とは違う人と一緒に……すすった。

*

ちょうど日付が変わったのを機に、一息つくため部屋を出た。

今日は図書館で二時間、そして今、ちょうど二時間……と、計四時間という長丁場を勉強という試練に費やしたことになる。

（まあ、昨日はサボったから、これでチャラってことだよな……）

とまあ、都合の良い解釈をしながら、キッチンへと向かった。

しかし、それにしても、やはり俺には、勉強は性に合わない行為だということをつくづく感じた。

これがキーボードの練習なら、四時間だって『あつ』という間だというのに……。

（けど……、進路……か）

まだ十五年……いや、後二ヶ月もすれば十六年となるが、だが、たかだかそれだけの人生だ。

将来のことを決めるには、まだまだ早い気もする。

今や日本人の寿命は、平均八十年前後だという。

つまりは長い人生の最初の二十パーセントで、残りの八十パーセントの生き方を選ばなくてはならないという計算になる。

知識も、経験も、思慮も、まだまだ浅いうちに……だ。

少なくとも、今から二年後は、今の和先輩がそうであるように、俺も将来のことをある程度は構築できていなくてはならない……というところらしい。

「はあ」

（つつつてもな）

果たして、先輩たちももう決めているのだろうか？

（たぶんムギ先輩は決めているんだろうな）

ムギ先輩はあれで、一度決めたことに対しては、どんな困難なことがあっても、猪突猛進で邁進していく意志の強さがある。

というか、そんな試練すらも、全力で楽しもうとするバイタリティーすらある。

（きつと澪先輩も決めているだろうし）

澪先輩は、綿密に立てた計画を、寸分変わらず遂行していく几帳面さがあるように思う。

それは生真面目さとも言えるだろうか。

（まあ、あの二人はきつと決めてるな……）

問題は残りの二人だ。

（律先輩と唯先輩……か）

この二人はまだ白紙かもしれない。

まあ、あくまでもイメージだけど……。

ただ『なかなか決められない』とか、『何も思いつかない』とか、そういうジレンマみたいなものは、俺にも解る気がする。

「はあ」

やっぱり、まだまだ俺には遠い先のことのように思えてならないようだ。

溜め息を吐きながら、キッチンのドアを開ける。

「いい若いモンが溜め息なんか吐いて。何か悩み事か？」

冷蔵庫の前で、グラスに注いだ麦茶を飲んでいる姉さんが、少々からかい気味にそう聞いてきた。

どうやら俺の溜め息が聞こえたらしい……。

「そういえば、姉さんはさ……」

ふと、四年前のことを思い出した。

当時二十歳だった姉さんは、通っていた大学を中退し結婚、そのままアフリカへと行ってしまった。

義兄さん……つまり、姉さんの旦那さんとは、実は今まで三回しか会ったことがない。

最初は、姉さんが『結婚したい人』として義兄さんを父さんと母さんに紹介した時。

次は二人の結婚式。

そしてアフリカに発つ日に空港まで見送りに行った時が三回目。

そして、以来四年、会ったことはない。

まあ、当然だ。

そもそも偶然ですら出会うところへ行ってしまったのだから……。

「何だよ？ 孝臣」

「姉さんはさ、結婚する時って、やっぱり悩んだ？」

「……………？ 何だよ、突然」

「いや……、何となくさ……。あの時の姉さんって、人生の一大事を、わりとあっさり決めたように見えたからさ……」

特に他意があったわけではない。

ただ、ふと思いついて、それをそのまま口にただけだ。

姉さんは少し不思議そうな表情を浮かべたが、だから俺は構わず食器棚からグラスを取り出すと、姉さんが冷蔵庫から出した麦茶をそれに注いだ。

そしてその麦茶を一気に飲み干したところで、姉さんは呆れたような、だけど嬉しそうな顔で『バカだな』と言いながら、再び自分のグラスに口をつけ、麦茶を一口、口に含んだ。

「バカって……」

「私だって悩んだよ」

「……………」

「悩んで悩んで悩んで……。それでも、やっぱり一緒にいたいって思えたから、後は自分の気持ちに従った。そんなところかな」

「自分の気持ちに……？」

「ああ、自分の気持ちに」

「だけど、その“自分の気持ち”が解らない時だってあるだろう。

だからこそ悩む時だってあるはずだ。

そんな時はどうすれば……。

「私ね、高校時代はやりたいことっていうか、将来の夢みたいなものがなくなっただけ……」

「姉さんが……？」

「うん……。当時は仲間とバンドやってて、音楽が生活の中心だったけど、だからって音楽で生計を立てようみたいな気持ちはなくなっただけ……」

「プロを目指す気がなかったってこと？」

「うん……。孝臣だって、そうだろう？」

「うん、そうだね……。俺は先輩たちとやるバンドが好きだから……。他の人と組むつもりもないし、“プロのステージ”なんていうフィールドにこだわるつもりもないかな……」

「私は……、もっとシビアだったかな……」

「シビア……？」

「そう。プロになって『売れる曲』だとか『大衆受けする曲』だとか、そんなものに縛られたくないっていうかさ……。まあ、私たちの音楽が、客観的に見てプロのレベルではないっていうことも自覚していたしね」

「それで大学に？」

「そうだね。とりあえず……みたいな軽い気持ちでね」

「やっぱり将来の夢とか見つからないうちは、手堅く進学したほうが良いってことなのかな……？」

「まあ、学歴は生きてく上で邪魔にならないからね」

姉さんは、それだけ言つと『イヒヒ』と笑う。

「何だよ、それ……」

その笑みにつられるように、俺の口角も思わず上がってしまった。

「まあ、私の場合は、たまたま『とりあえず』のつもりで入った大

学で、今の旦那と運命的な出逢いを果たしたわけだけども……」

「自分で言うかよ……」

「まあ聞けつて！確かに何年も先の職業だとか、やりたいこととかを考えて進路を決めることも大切だけど、なかなかそうはいかなかったりするじゃん！だから私はさ、とりあえず今一緒にいたい人と、来年も一緒にいるための進路つてもアリなのかなって思うわけよ」

「一緒にいたい人と来年も一緒にいるための進路……」

（正直、そういう発想はなかったな）

「まあ、孝臣は三年後の進路よりも、二週間後の期末試験のほうを、先ずは頑張んなきゃね！」

「えっ！？」

その言葉に、飲みかけた麦茶が口から吹き出そうになり、咳き込んでしまった。

「あの勉強嫌いの孝臣が、ここんとこ毎日真面目に勉強してるからね。何か理由があるんでしょ？ 期末で良い点を取らないといけないような理由がさ！」

そして姉さんは、最後にそう言い残し、俺の肩をパンパンと二回叩くと、再び『イヒヒ』と笑いながらキッチンを後にした。

「先のことより、目先のことか……」

一人になったキッチンでそう呟く。

そして姉さんに叩かれた肩を掌でそつと撫でると、俺もやはり、再び口角を上げてしまった。

ふと壁にかけられた時計を見る。

どうやら思いの他、話し込んでしまったらしい。

本当なら、喉を潤したらそのまま寝るつもりだったのだが……。

「もう少しだけ、頑張ってみるか……」

今度はわざとそう呟いてみた。

（まあ、気の向いた時くらいは……）

*

月曜日。

放課後。

部室へと向かう足取りも軽い。

何か一つのことが充実すれば、他のことも充実していく……なんてことは、よくある話で。

梓先輩との約束どおり、毎日二時間という勉強時間のノルマを果た

していくうちに溜まった鬱憤を、まるで晴らすかのように作曲に取り組んだ結果、遂に昨日、完成してしまったのだ。

“ 冬の日 ”

まあ、こんな真夏日に完成させた曲が、そんなタイトルだというのも俺らしいのかもしれないが、これは以前、漣先輩から預った歌詞を使って作ったからで、仕方がない。

何にしても、悲願だった作曲を、やっと一曲、成すことができたのだから、意気揚々となっても、今日ばかりは良いだろう。

ただ、やはり先輩たちに見せるのは緊張してしまうのだが……。

何といっても、軽音部はムギ先輩が全ての楽曲を作曲しているわけで、それは言わば、先輩たちはムギ先輩の曲に慣れているということになる。

つまりは、ムギ先輩の曲と比べられてしまつては……さすがに自信を持つことができない。

『ムギはムギ！ オミはオミだろ！』

『ムギが作るような曲をオミが書けなくなつたつて、それは当たり前だ！ だって、オミはムギじゃないんだから！』

『ムギを意識する必要はないさ』

『あれはムギの世界なんだから。オミはオミで、オミの世界を作ればいいんだよ！』

それは律先輩から言われた言葉……。

律先輩流の激励というところなのだろうけど……。

（だからって、そんな簡単に割りきれもんじゃないやねえよな……）

だけど、これが俺にとっての、先ずは第一歩だ。

ダメ出しは覚悟の上。

むしろダメ出ししてもらったほうが、今後の作曲に生かせるわけで、好都合なのだから……。

（とても思わなきゃ、緊張が取れねえよ……）

達成感と緊張を渦巻かせながら、そしていよいよ部室のドアを開けた……。

「あつ、オミくん！ お疲れさま」

そこにいたのは梓先輩が一人。

長椅子にバッグを置こうとしていたところを見ると、どうやら梓先輩も今来たばかりらしい。

「梓先輩！ お疲れさまです！」

そう返して、梓先輩のバッグの横に自分のバッグを並べる。

そしてバッグから、問題の楽譜を取り出した。

「何？ それ」

「楽譜です。実は昨日、やっと一曲完成しまして……」

その楽譜を指差し、聞いてきた梓先輩に、楽譜を見やすく呈示しながらそう答えた。

「ふ〜ん。作曲か。あつ！ でも、作曲してて勉強はちゃんと捗ってるの？ 約束大丈夫？」

梓先輩は、少しだけ心配そうな表情を浮かべる。

いや、内心は相当心配しているのかもしれない。

「一応、約束のノルマ分は勉強してますよ。それに最近は、少しずつ手応えも感じてるし」

だからそう言っ、て、心配を和らげようと試みた。

「ならいいけど……。けど、油断は禁物だよ！」

「はは……。梓先輩は厳しいな……。でも大丈夫ですよ！ 一昨日なんて、図書館で和先輩とみっちり勉強したくらいだし！」

「えっ！？ 和先輩……？」

「はい！」

しかし、安心させるために言った言葉で、梓先輩は更に怪訝そうな表情を浮かべた。

「梓先輩……？」

（やっぱり俺と和先輩って、妙な……いやいや、珍しい組み合わせだからか？）

しばし沈黙が流れるが、その意図が解らず、とりあえず俺は、俺のすべきことをするため部室を出ることにした。

「梓先輩。俺、この楽譜をコピーして来ますんで、職員室に行つて来ますね……」

「ねえ、オミくん……」

「は……、はい……？」

「オミくんは、いつから和先輩のことを“和先輩”って呼ぶようになったの？」

「えっ！？」

「だって、先週までは“会長”って呼んでいたのに、週が明けたらいきなり名前で呼んでるんだもん……」

「それは一昨日から……」

「じゃあ、和先輩もオミくんのこと“オミくん”って呼んでるわけ！？」

「いや……、えっと……、“オミ”って……」

「呼び捨て！？」

「はあ……、まあ……」

しだいに梓先輩の形相が変わっていき、正直……怖い。

「そうなんだ……」

「はあ……、まあ……」

「……」

「……」

「……」

「あ……、あの……、梓先輩……？」

「えっ！？」

「もし良かったら、梓先輩も俺のこと呼び捨てにしてもいいんですよ……」

「へっ！？」

「あっ、だから……、呼び捨てに……」

「わっ、わっ、私は……、べっ、別に呼び捨てにしたいとかそんな……、そんなじゃないし……」

（って、めっちゃ狼狽えてるじゃん……）

「いや、まあ、無理にとは言いませんけど……」

「べつに無理とも言っていないもん！」

（ええ~~~~っ！？）

「どっちなんですか!?!」

「もういいから！ 早くコピーしてきなよ!!」

そう言われると、そしてそのまま、何故か膨れっ面になった梓先輩に背中を押されるように、部室から追い出されてしまった。

「バカ……」

ドアが閉まる寸前、そんな呟きも聞こえたような気がしたが……。

（まったくもって……）

「ワケ解んねえ……」

（おっと！）

心の呟きすら、思わず口を突いて出てしまい、慌てて左手で口を押さえた。

「はあ」

（やれやれ……）

チラッと部室のドアに視線を移すが、もはや変わった形跡はなく、ワケが解らないことに多少のモヤモヤを露にするかのように頭をガシガシと掻きながら、階段を降りた。

*

「失礼しまゝす！」

誰に対してというわけではないが、入り口でそう声をかけ、職員室に入る。

「あら、孝臣くん」

俺にそう声をかけてきたのは、我が軽音部の顧問、山中先生だ。

まあ、山中先生の席が、たまたま入り口に一番近いというだけの話なのだが……。

「孝臣くん、どうしたの？ 部室の鍵なら、さっき梓ちゃんが持って行ったわよ」

放課後ということもあって、俺が部活に行くために部室の鍵を取りに来た……とでも思ったのだろう。

「違いますよ。コピーさせてもらおうと思って……」

だからそう言って、手に持っていた楽譜を見せた。

「実は初めて作曲したんです」

少し誇らしげに、そう付け加えて……。

「へえ〜！ 孝臣くんが作曲ね〜。どれどれ？」

山中先生に促されるまま、その楽譜を渡す。

よく考えれば、山中先生は軽音部の顧問であると同時に音楽教師でもある。

言わば『音楽を教える』ということに関してはプロだと言える。

しかも、高校時代は、今の俺たちとはそのジャンルこそ違うとはいえ、同じようにバンドを組み、オリジナル楽曲の作詞や作曲も手がけていたと聞く。

プロであり、経験者。

つまりは、感想を聞いたり、アドバイスを貰うには、まさに打ってつけの人物……といえるのかもしれない。

「どうですかね……？」

「これ、歌詞は誰が書いたの？」

「澪先輩が書いた歌詞に曲をつけたんです」

「詞先か」

「はい……」

（長い……）

この沈黙が、やたらと長く感じる。

「ふう」

そして山中先生は、最後まで目を通した後、そう軽く息を吐いた。

「あの……、先生……？」

窺うように声をかける俺に、山中先生は『はい！』と言いながら楽譜を俺に返し、そしてニコリと笑った。

「あなたたちにピッタリだと思うわ」

そう言葉を続けて……。

「ピッタリ……ですか？」

（って、それは褒められたのか？）

「さてと……」

だが、山中先生はそれだけ言うと、徐に立ち上がり、校内放送用のマイクへと向かった。

（まあ、悪くはないってことだよな……？）

とりあえずは良いほうに考えることにして、俺は俺で楽譜のコピーに取りかかった。

『三年二組の田井中さん、平沢さん。至急、職員室に来なさい！』

（ええ~~~~っ！）

さっきまでの優しい笑みとは対照的な、明らかに“怒”の感情が入り交じった声が、スピーカーから聞こえてきた。

そつと振り向くと、すでに山中先生は『やれやれ』という表情を浮かべながら、再び自分の席へと座ろうとしている。

（さっきのつて、やっぱり律先輩と唯先輩だよな……）

確か山中先生は、律先輩たちのクラスの担任もしている。

故に、進路のこととか、成績のこととか……なのだろうか？

（まあ、三年生だし……。何かとあるんだろうな……）

その“何かと”が、二人の場合、他の人以上に心配だったりするのだが……。

*

最近のコピー機には感心する。

ソーター機能だけでなく、ちゃんとクリップで綴じられた形で出て来るのだから……。

コピー機の文明が、自分の想像の域を越えた発達を果たしていることにもだが、そんな文明の利器が自分の通う学校ですでに取り入れられているということにも驚いた。

しかし一番の驚きはやはり、山中先生に呼び出しを食らった律先輩と唯先輩の理由が、進路調査についてだということ……いや、正確に言くと、進路調査なのに、律先輩はそこに『未定』と記入し、唯先輩に至っては未だ未提出だったということだ。

一昨日の和先輩の話では、提出日はもう随分前のはずだった。

コピーを終え、原紙を含めて六部となった楽譜を抱える。

そして山中先生にコピー機使用のお礼だけでも言って退散しようと思ったのだが……。

「唯ちゃんは、まだ決まらないの?」

山中先生の声が聞こえてきた。

どうやら、唯先輩が未提出だった理由は、進路を決めかねているかららしい。

「まだずっと先のことから、何だか実感湧かなくて……」

そう言っていると、唯先輩は俯いた。

そんな会話を何気なく聞きながら、こっそりと三人の輪の中へと潜り込む。

それはまあ……、

（二人が心配だから……）

と、自分に言い訳をして。

「そんな先の話じゃないでしょ！？ もうすぐよ！」

山中先生からそう言われ、唯先輩は一層俯く。

「さわちゃんもトシをとるわけだな」

こんな状況でも、律先輩は相変わらずだ……。

「なあ～んですってえ～！？ 聞こえなかったわ」

そう言いながら、山中先生が律先輩の頬をつねるのもお約束だ……。

「そういう律先輩は、まだ決めてないんですか？」

そんなやりとりに、さすがの俺も少々呆れながら、律先輩にそう訊ねてみる。

「そんなこと言われてもな」

だが、律先輩からの返答は、そんな言葉だった。

「だよ〜。まだピンとこないもん……」

それに唯先輩も同調する。

「けど周りの人たちは、もう決めているんでしょう？ 受験勉強をするにも、大学や学部を決めないと、それによつては教科だつて変わってくるだろうし」

「そんなことは解つてんだよ〜。でも何も思いつかないんだ！」

「っていうかオミくん！ いつからそこにいたの！？」

「うわっ！ ホントだ！！ オミじゃんか！」

「今頃、気がついたんですか……」

（先のことどころか、周りも見えてねえんだな……）

「孝臣くんなら、あなたたちが来る前からここにいたわよ」

山中先生も呆れ口調だ。

「あつ！ そういえば、さわちゃんさ〜」

しかし律先輩はそれに動じることなく、相変わらずのペースで話を振ってくる。

「高校時代は“あんな”だったのに、何で先生になろうつて思ったの〜？」

律先輩の言う“あんな”とは、つまりはデスメタル……まあ、山中先生曰くの“ワイルド”を追求したバンドのことだ。

「いや……、それは……、恥ずかしいから……」

予想外に山中先生は顔を赤らめた。

「何々!？」

そんな山中先生の態度に、唯先輩も興味津々だ。

「ぜひ！ 参考にしたいんで、教えてくださいー!」

律先輩は楽しそうだ。

けど……。

「確かに俺も興味がありますね。っていつか、よく考えたら、学生にとって教師が一番身近な職業だし、教師を選ぶ理由って聞いてみたいですね」

勿論、俺のは本音だ。

ただ律先輩と唯先輩のワクワクな表情と並ぶと、同列に扱われてしまいかもしれないが……。

「実はね……」

だが、根負けしたのか、山中先生はその動機を語り始めた。

「その頃、好きだった人が『教師になる』って言うから、『じゃあ、私も』って……」

「不純だな……」

「確かに……」

予想外というか、予想どおり過ぎるといって、そんな結末に、思わず本音が律先輩とかぶった。

「それで、その人とはどうなったの？」

（ええ~~~~っ！　そこは現状を見て察するところだろ）

唯先輩の『人の心を悪気なくえぐる』スキルが発動したようだ……。

「ふられたわよ〜!!」

そしてとうとう、山中先生は項垂れてしまった……。

「けどさ。さわちゃん、その人のおかげで、今は夢を叶えて先生になれたんでしょ？」

（おおっ！　唯先輩、『まさか』のナイス・フォロー）

「そうだよ、さわちゃん！　大切なのは過去じゃなく今だよ！　今！」

律先輩も唯先輩に続くようにフォローに入る。

「でも、その“今”も彼氏はいないんだっけ？」

(……………)

唯先輩のスキルが再び発動した……。

「あゝあ……………」

「あゝあ……………」

再び泣き崩れる山中先生を尻目に、遂にはフォローは無理と判断し、律先輩共々、そそくさと職員室を退散することにした……。

*

職員室から部室へと向かう道すがら、律先輩と唯先輩は、もういつもの二人だった。

いつものように、ワイワイ、キャツキャツと、じゃれ合う二人の背中を見ながら、その後ろを着いて歩く。

後八ヶ月……。

それがどのくらいの長さなのか……………。

いや、どのくらいの長さを感じるのか……………は解らないが、確実に“その時”はやって来るのだ。

(いずれは、こんな光景も……………)

などと、センチメンタルに浸るには、まだ早いかもしれないが……。そんなことを考えているうちに部室へと着き、ドアを開ける唯先輩とその後に続く律先輩に、更に続くように中へと入る。

「やつと帰ってきた」

「あら、オミくんも一緒だったんだ？」

漣先輩とムギ先輩に声をかけられながら、梓先輩の座る席の横に椅子を持っていく。

本来の俺の場所には、すでに和先輩が座っていたからだ。

「はい、職員室でコピー機を借りていたもので……」

ムギ先輩にそう答えながら、梓先輩と並ぶように腰を下ろす。

と、同時にムギ先輩は、早速、三人分の紅茶を淹れにかかっていた。

「それで、あれで良かったの？」

和先輩の質問に、唯先輩は一言『ダメだった』と消え入るような声で答えた。

和先輩の言う“あれ”とは、きっと進路調査のことだろう。

もしかしたら、律先輩の『未定』も含まれているのかもしれない。

「はあ……、将来の夢か」

唯先輩の声は、相変わらず消え入りそうだ。

「ムギ先輩は、やっぱり以前から言っていた女子大にするんですか？」

ちょうど俺のところにティーカップを運んで来たムギ先輩に、そう聞いてみる。

確か、父親に薦められている女子大があるのだと聞いたことがある。

その時は、ムギ先輩自身も少し迷っていたようだったが……、

「うん、そうよ！ 頑張つて目指してみようかなって思ってるの」

と、今ははっきりと目標として見据えているようだ。

「ムギの成績なら、先ず大丈夫だろ」

澪先輩の言葉にムギ先輩は謙遜してみせるが、それはあながちお世辞というわけではないのだろう。

「そういう澪先輩は、どうするんですか？」

「えっ！？ うん……。私は推薦を貰って公立に行こうかなって……」

突然、自分に振られるとは思ってもいなかったのか、澪先輩は照れたように狼狽え始める。

「それだつて凄いじゃないですか！」

そして、梓先輩の感嘆に、澪先輩は『すつ、凄くなんかないよ』
と言いながら、ますます顔を赤らめた。

（でも、推薦つてことは、普段の成績が良いつてことだもんな）

「凄いって言えば、和のほうが凄いよ」

自分の話題に堪えきれなくなったのか、とうとう澪先輩はその矛先
を和先輩に振った。

「えっ！？ 私はべつに……」

（あつ、そういえば……）

「和先輩は、確か国立を受けるんですよ？ それって、やっぱり
難しいんですか？」

「そうね。少なくとも和ちゃんの志望大学は、私や澪ちゃんの大
学より偏差値高いわね……」

「ちょっと、ムギ！」

（ということとは……）

「やっぱり和先輩は凄いんですね」

そもそもからして、目指せるランクが違う……ということか。

俺とは……。

「あのね。そういうことは、ちゃんと合格してから言ってよ！
まだ受験もしてないんだから……」

少し困ったような、それでいて照れたような……和先輩の表情には、
そんな気持ちが浮かんでいた。

「ねえ……」

和先輩の表情に見入っていると、横から梓先輩が小声で声をかけて
きた。

「はい？」

「和先輩が国立を受けるって、いつ聞いたの？」

「一昨日ですよ」

「図書館で勉強してる時に？」

「いえ……。その後、二人でラーメンを食べに行っただけですけど、
そこで……」

「何で二人っきりでラーメン？」

「いや、ちょうど昼時だったし、お腹も空いていたし……」

「そついう意味じゃなくて……」

「ああ、勉強を教えてもらったお礼に……」

「ふん……」

「……………」

それだけ聞くと、梓先輩は視線を戻した。

（何なんだよ……、いったい……？）

「ところで唯！ 将来、就きたい職業とかないのか？」

澪先輩の呼びかけに、話題は再び唯先輩の進路に変わった。

「うん……」

だが当の唯先輩は、唸るだけで言葉が続かない。

「子供の頃は夢ってなかったんですか？」

『なれる』か『なれないか』は別にして、子供の頃は将来の夢なんていくらかもあったはずだ。

ただそれが高校生ともなると、『なれないもの』ではなく『なれるもの』を見つけないではなくなる……ということなのだろう。

「確か、小学生の時は『幼稚園の先生』って言ってなかったっけ？」

（へえ。幼稚園の先生か）

「それ、唯先輩に似合ってるかもしれないですね」

唯先輩といえば、音楽用語には疎くても、天性の音感と歌唱力があるし、尚且つギターも弾ける。

それに良い意味で、子供の気持ちも持ち続けているようにも思える。

「それがね。小学生の時、作文で『幼稚園の先生になって、ずっと子供たちと遊んでいたい』って書きちゃって、もうクラス中が大笑いしたの」

その時の状況を思い出したのか、和先輩は今にも吹き出しそうだ。

その横で、唯先輩は『エヘ』と笑っている。

（まあ、現実そんなもんだよな……）

それにしても……。

「唯先輩に似合う職業……」

何かありそうな気がするのだが……。

「あっ！」

「何か思いついたの？」

思わず上げた声に反応してくれた梓先輩に、とりあえず思いつくまま職業を挙げていく。

「花屋とかどうですか？」

「花の名前、覚えなくちゃいけないよ……」

「ならOLとか？」

「時間が決まっているものはどうかな……？」

「バスガイドは？」

「唯先輩って確か車酔いするんじゃない？」

「ウエイトレスとか？」

「注文いっぱい覚えなくちゃいけないよ……」

「じゃあケーキ屋さん！」

「自分で食べちゃったりして……」

「まさか、いくら唯先輩でもそこまで……」

「絶対にないって言いきれん？」

「えっ！？ いや……、それは……、その……、何とも……」

「はいはい！ 梓もオミもストップ！ ストップ！」

「あずにゃんも、オミくんも酷いよぉ」

「あつ、すみません……」

「梓先輩が、あまりにも的確な返しをするものだから、つい……」

「オミの言い訳になってないぞ」

一連の梓先輩とのやりとりの後、律先輩からのツツコミが入った。

「とにかく……」

コホンと一つ、咳払いをし、和先輩が話を戻す。

「今は自分たちが思いつくものでいいんじゃない？」

そして、特に唯先輩に……諭すように、そう言った。

「思いつくもの……」

「思いつくものか」

再び、唯先輩が唸り声を上げ、その横で律先輩の眉間にも皺が入る。

「そうだ！」

それから暫しの間があり、遂に律先輩が、何かを閃いたようだ。

「りっちゃん！」

唯先輩も同じようで、そう叫ぶと、律先輩の両手を握る。

「ああ！ 行くぞ！ 唯！！」

「うん！」

何を思いついたのか解らないが、そんな小芝居を一通りやり終えると、二人はそのまま部室を出て行ってしまった。

「いったい何をする気なんでしょう……？」

梓先輩のそんな問いかけに、しかし答えられる者は誰もいなかった。

「それにしても、和先輩も大変ですね……」

「えっ！？ 何が？」

見たままのことを言っただつもりだったのだが、和先輩はきょとんとした表情を浮かべた。

「何がって……。唯先輩のことですよ。子供の頃から、ずっと唯先輩の面倒を見てきたんでしょ？ 大変だったんだろうなって……」

「えっ！？ ふふっ」

そして、何故か和先輩は吹き出してしまった。

「和先輩……？」

だが、すぐ次の瞬間にはもう笑いをやめ、いつもの和先輩の表情へと戻る。

「それは違うわ……」

「違う……?」

和先輩はそう言うと、今度は優しい笑みを浮かべた。

「確かに、子供の頃から『唯の面倒を見て大変ね』って言われることも少くはなかったけど……」

「けど……?」

「私ね、今までただの一度だって『唯の面倒を見ている』なんて思ったことないの」

「えっ!?!」

その言葉には、俺だけでなく、皆も予想外という表情をしていた。

「何て言うのかな? 唯を見てるとね、つい手を貸したくなっちゃうというか……、私がそうしたくなっちゃうのよ」

「それが『面倒を見る』ってことなんじゃあ……?」

「いいえ……、違うわ。私はね、今まで唯の明るい笑顔に何度も励まされたの。どんなに落ち込んでいても、唯が笑ってくれると私も元気になれる気がするのよ。だから、唯にはいつだって笑っていてほしいって思う。きっとそれは私のエゴなんだろうけど、私自身がそれを望んでいるのよ。だから唯が困っている時には、つい手を貸しちゃうんだと思う。唯の明るい笑顔が見たいから……」

確かに唯先輩の笑顔には、周りを明るくする力があるように感じる。
だけど……。

そう言った和先輩の笑顔も、十分周りを明るくする力がある……と、
俺は思った。

だつて……。

そんな和先輩を見て、零先輩も、ムギ先輩も、梓先輩も、そして俺
も、自然と笑顔になっているのだから。

「それにね、唯つて何だかんだ言いながら、いつだつて最後は自分
の力で何とかしちゃう子なのよね……。ただ、ちょっとだけ人より
時間がかかるだけで」

そして最後に、和先輩はそう付け加えた。

「何だか素敵ね。和ちゃんと唯ちゃんて……」

それはつまり、全てはムギ先輩の、その言葉に集約されているとい
うことなのだろう。

もつとも、勢い勇んで自信満々に飛び出して行った二人の進路調査
の第一志望欄に“ミュージシャン”と書かれたと知ったのは、その
すぐ後のことだったのだが……。

それでも皆が呆れる中、和先輩だけは大笑いしていて、それが何だ
か唯先輩との絆の深さのように思えた。

*

「ねえ、オミ……」

夏とはいえ、夕暮れを過ぎる頃になると、やっと陽も落ち始めた。

唯先輩はあれからずっと、項垂れていて、和先輩だけでなく、零先輩やムギ先輩も心配そうにそれを見ている。

（つていうか、律先輩は人の心配している場合じゃないような気がするんだけどな……）

そんな下校の途中、皆から離れるように後ろを歩く梓先輩から声がかかる。

少し歩調を弛め、その梓先輩の隣に並ぶ。

「はい、何ですか？」

「あ……、あのね……」

「……………？」

「解らないところがあったら、私に聞いてもいいんだよ……」

「えっ!？」

「だから……、私だってオミに勉強くらい教えてあげられるし……」

梓先輩の顔が紅潮していくように見えるのは、夕陽のせいだけでは

ないような気がする……なんて言ったら怒られるかもしれないが。

だけど、先輩なのに、年上なのに、そんなふうに俯いて顔を赤らめる梓先輩が、今は何だか、可愛く思えてしまう。

「はい！　じゃあ、その時はヨロシクお願いします！」

「まあ……、私だって約束させた手前、責任だってあるし……。だから……」

「責任……、あるんですか？　梓先輩にも？」

「そりゃー、先輩だし……」

「だったら、約束を果たせなかった時には、追試の勉強は梓先輩に付きっきりで教えてもらおうかな……」

「なっ！　バカオミ！」

「バカオミって……」

「そんなこと言われたら……、追試になってほしいって思っちゃうじゃない……」

本当に小さく、聞こえるか聞こえないかというくらいの声で、梓先輩はそう呟いた。

「それって……？」

「何でもない！　約束は約束なんだから、ちゃんと全教科平均点以

上取ってもらいますからね！」

だけでもう次には、梓先輩はいつもの梓先輩の顔に戻っていた。

「あれ？　そういえば、さっきから梓先輩、俺のこと“オミ”って……」

「何！？　オミが呼び捨てにしてもいいって言ったんでしょ！」

でもやっぱり、そう言った梓先輩の顔は、さっきみたいに紅潮していった。

「はい！　いいですよ。何なら俺も梓先輩のこと“あずにゃん”って呼んでもいいですよ」

そんな梓先輩に、俺はそう言って『へへへ』と笑う。

「その提案は却下します」

梓先輩の、少し照れたような、それでいて拗ねたような、そんな笑顔を見つめながら……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6298x/>

Tomorrow is another day ~ Another K-ON ! ~

2011年12月30日18時45分発行